

吉田向井

——長野県塩尻市吉田向井遺跡発掘調査報告書——

1983

長野県塩尻市教育委員会

吉田向井

——長野県塩尻市吉田向井遺跡発掘調査報告書——

1983

長野県塩尻市教育委員会

序 文

吉田向井遺跡は、塩尻市大字広丘吉田にあり、田川右岸段丘上に位置し、以前より平安時代の遺跡として知られていました。この度、昭和57年度の県営田川地区圃場整備事業に伴い遺跡の一部が破壊されることになったため、工事に先立ち発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は花村格先生を団長に、調査員・補助員には中信考古学会員、信州大学考古学研修会の諸氏にお願いし、昭和57年7月～8月にかけて実施しました。この調査によって吉田向井遺跡は縄文時代草創期から平安時代にかけての遺跡であり、とりわけ平安時代の大集落址であることが確認されました。また出土した多量の土器、鉄器類は松本平はもとよりのこと、県下における該期研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供したといえましょう。

この発掘調査が無事完了するについては、田川土地改良区の三村忠治理事長ならびに太田英雄、小沢昭善両理事、および地元の塩原義嗣吉田区長、上條静照吉田第7常会長をはじめとする多数の地元の方々の深い御理解と暖かい御援助によるものであり、ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

報告書の発刊にあたっては、調査団長をはじめとして多数の方々の御尽力によるものであり、重ねて謝意を表するものであります。

昭和58年3月

塩尻市教育委員会

教育長 小 松 優

例　　言

- 1 本書は、塩尻市大字広丘吉田地区における、昭和57年度県営田川地区圃場整備事業に伴なう吉田向井遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、吉田向井遺跡発掘調査団（団長　花村　格氏）に委託し、現場での調査は昭和57年7月25日から9月30日まで行った。
- 3 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和57年8月から昭和58年3月にかけて行った。その過程では次の方々の協力を得た。記して感謝申し上げたい。分担は次のとおり。
 - 遺構…整理、トレース：小鳴、小林。
 - 土器…実測：島田、石上、小鳴、前田、小林、鳥羽。トレース：小鳴、前田、小林。
 - 石器…実測：深井。トレース：小林。
 - 鉄器…実測、トレース：前田。
 - 図版組み…小林、前田、鳥羽。
 - 遺構写真…小林、鳥羽。
- 4 本書の編集は小林が行い、花村　格団長が校閲した。
- 5 調査に当たり、田川土地改良区の三村忠治理事長ならびに太田英雄・小沢昭善両理事、塩原義嗣吉田区長、上條静照常会長および地元の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。
- 6 本調査の出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 調査の経過	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査日誌	2
第Ⅱ章 遺跡の位置とその環境	
第1節 遺跡の立地および自然環境	3
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 遺跡の概要	
第1節 遺跡の概要	8
第Ⅳ章 造構	
第1節 住居址	10
第2節 建物址	65
第3節 小豎穴	68
第Ⅴ章 遺 物	
第1節 繩文時代	69
第2節 弥生時代	70
第3節 平安時代	71
(1) 土 器	73
(2) 鉄製品	125
(3) 石 器	129
(4) その他	133
第Ⅵ章 まとめ	
第1節 集落立地	134
第2節 土器について	139
第3節 集落における鉄製品の在り方	143
第4節 集落と豎穴住居址	146
第Ⅶ章 結 語	153

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

昭和57年度の県営田川地区圃場整備事業は塩尻市大字広丘吉田地区を中心として実施されることになった。この圃場整備事業地内には、吉田向井遺跡が存在しているため、工事施行に先立つて発掘調査を実施し、記録保存することとなった。発掘調査は、塩尻市田川土地改良区（理事長三村忠治）からの委託を受け、塩尻市教育委員会が調査主体となり実施された。

発掘調査にあたっては吉田向井遺跡発掘調査団を組織し、調査団長に花村格氏をお願いし、調査員には中信考古学会の諸先生方を、また調査補助員には信州大学考古学研究会の諸氏にお願いした。団長はじめ調査員・調査補助員の諸先生方にはそれぞれ本務の仕事に、また他の調査にと懸念で多忙の中で発掘調査を実施し、しかも煩雑な整理・報告書作成を短期間のうちにまとめるという大変な御無理をお願いした。御苦労に対し心から感謝申し上げる。

また、田川土地改良区の三村忠治理事長ならびに太田英雄・小沢昭善両理事、および地元の塩原義嗣吉田区長、上條静照常会長はじめ各常会長諸氏には大変な御尽力をいただき、発掘調査が大きな成果を認め、無事終了することができました。ここに厚く感謝申し上げる次第である。

発掘調査のための組織は次のとおりである。

団長：花村 格

調査員：小林康男、島田哲男、石上周蔵、平林 彰

調査補助員：込山秀一、大竹庄司、上野山恭和、小嶋秀典、深井幸人、前田清彦、安塚弘明、

堀田直人、堀田貴之、金子順一、山崎敬二

参加者：高橋孝江、辛山三政、伊藤しづ、山田房代、御子柴みよ子、増田忠行、佐幸信介、中村貴士、百瀬益貴、伊藤勝一、坪田勝儀、竹内勝午、上條きみ江、石川千代、太田和、上條尚、上條あさ子、上條正明、御子柴次郎、上條平三、寺社下穂、古谷広樹、慎秀賢、古畑邦彦、柳沢浩司、中村賢平、上条ちもと、上條愛子、上條光春、清沢永義、熊谷和久、中野三七人、小堀幸子、高橋良枝、百瀬洋子、小山雅志、石川栄一、塙原一彦、鳥羽嘉彦、中野実佐雄、小林政子、山田進、熊谷けい子、須沢克英、上條哲郎、金子雅子、中野喬太郎、赤津忠秀、御子柴文重、大久保秀一、池田しのぶ、上條みなみ、上條美智子、中野栄、小原健次、広川一、矢野倉至、松尾よしあき、松崎敦、菱田昌弘、中藤亜紀、小松和美、花岡雅美、松原千穂、青柳則子、丸山昌実、北山和香、

手塚雪江、百瀬京三、篠江威治、荻村昭夫、中林重男、中林喜美江、遠藤尚弘、中沢徳雄、平山晴博、浦野賀世子、伊藤千代子、石川秀雄、沖津和子、古根達也、長村素蘭

事務局：小松優一（教育長）石原久男（総合文化センター所長）一ノ瀬政和（文化教養担当課長）、中野栄（文化教養担当副主幹）小林康男（平出遺跡考古博物館）

第2節 調査日誌

7月25日、現場に午前9時集合、調査団長挨拶、調査方法説明後、直ちに調査に入る。東側のブルドーザーによる削平区域から遺構の検出を行う。約10ヶ所ほどの住居址状落ち込みを確認。

7月27日、遺構の検出、東側区域を終了し、西側区域にも一部入る。土器の出土量が多く、また、有舌尖頭器の出土を見る。7月28日、遺構の検出、西側中央部分を中心とし、16ヶ所などの住居址を検出する。7月29日、遺構の検出、中央部分から西側の一部を行う。7月30日、第1～7号北の掘り下げ、1、3、7号址の精査、作図。7月31日、2～12号の掘り下げ、図化。8月1日、雨のため遺物、図面の整理。8月3日、10、17、35号址の掘り下げと一部図化。8月4日、18、19号址の掘り下げと北側地区の検出。8月5日、23、29、35、34の測図、8、9号址の掘り下げ。8月6日、8、12、13、15、16、32号の精査と図化。8月7日、24～28号の掘り下げ、5号址東集石の精査。西側地区の広範囲にわたる落ち込みの再検出。10軒前後の住居址の重複とみられる。8月8日、34、36号址の精査、図化。8月9日、20、21号址の精査、図化と柱穴址・小竪穴地域の再検出。8月10日、20、21号を引き続き図化し、51、54号址の掘り下げ。8月11日、14、33、37、38、59号址の掘り下げと図化。8月12日、39、47～49号址の掘り下げ、図化。8月17日、50、60、57号址の掘り下げ、図化。8月18日、62～64号址の精査と作図。8月19日、50、62～64の残りの図化。8月20日、40、58、62号址の掘り下げと図化。8月21日、41、42、56号址の精査と図化。8月22日、30、55、61、65号の掘り下げを図化。全体測図。8月23日、11、44、46号址の精査と作図。8月24日、建物址、小竪穴の精査、測図。8月25日、各住居址のカマド内の精査、建物址の測図。9月30日、未精査部分の立会調査。66～85号址の確認と規模、所属時期等を把握する。8月～2月、平出遺跡考古博物館において、出土遺物の洗浄、注記、復元作業を行う。同時に、実測図の整理、製図、遺物の実測、図版作成。また、報告書の原稿執筆を行う。

（事務局）

第II章 遺跡の位置とその環境

第1節 遺跡の立地および自然環境

(1) 遺跡の位置と周辺の地形

吉田向井遺跡は長野県塩尻市大字広丘吉田下向井地籍にあり、国鉄広丘駅から北東へ約2km離れた地点にある。付近一帯は隣接する松本市側へ入り組んでいる形になっており、遺跡のわざか80m東側が向市の市境となっている。東方約500mに赤木山(719m)の独立小丘が南北に横たわっており、背後に高ボッチ山(1,665m)、鉢伏山(1,929m)といった筑摩山地のなだらかな山稜が控えている(第1図)。

この付近の地形の形成は、木曾谷から流出する奈良井川と東側筑摩山地から流下する田川の両河川によって撮入された砂礫層からなる沖積層を基盤とする。奈良井川は木曾川と、田川は天竜川とそれぞれ分水嶺によって表裏日本を分けるものであり、両河川は塩尻市内では並流しているが松本市内へ入ると合流し、遂く日本海へ信濃川の末流となって運ばれていく。

田川は岡谷市との市境となる塩尻峰に源を発し、塩尻東地区を経て大門市街地の直前で向きを北にかえ、東側丘陵に沿って北流する。この北流は糸魚川・静岡構造線上の断層によって形成されたリニア線に沿うものである。第四紀洪積世末期に大門市街地を乗せる桔梗ヶ原台地に隆起運動が起こり、西側が東側に比して差別的に隆起したために、奈良井川沿いに4段の明瞭な河岸段丘が発達しているのに対し、田川沿いには顕著な段崖が見られない。

しかし遺跡付近はすでに松本平の低平地に入った地域であるために、河岸段丘といった浸食環境よりもむしろ自然堤防や氾濫原を形成する堆積環境の要素が強い場所といえよう。

遺跡は田川右岸の、現在、墓地に利用されている付近を中心とした自然堤防上に立地しており、海拔は最も高所で646mを測る。ここを中心に放射状に微傾斜地形となっており、現在の田川河床は西方約80m離て、比高差5mで位置する。途中田川から約50mの位置に比高差2mの明瞭な段丘崖を確認することができる。また東方約80mにも、小田川の流れがちょうど遺跡を挟む形状で北流しており、ここが市境となっている。

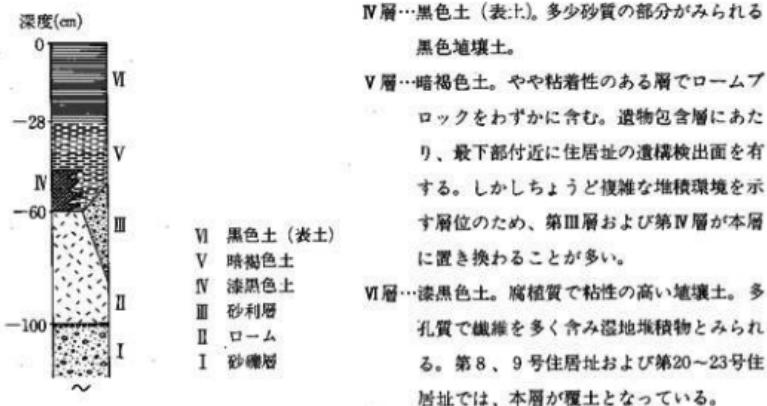
現在、一帯は水田および畠地に利用されており、東西約90m、南北約90mの地域が今回の発掘調査区域である。



第1図 吉田向井遭路位置図

(2) 層序 (第2図)

調査地域では、洪積世末期の河川堆積物である波田疊層をベースにして、その上に厚さ数10cmのローム層が堆積し、更にこれを現世の河川堆積物および表土が被覆している。河川による堆積物が流路の移動により複雑な様相を示すため、ここでは自然堤防上の比較的安定した堆積環境のもとに形成された層序をもとに、個々の柱状図を組み入れた模式的な層序断面図を示す。



第2図 遺跡付近の模式層序断面図

III層…砂利層。調査区域の南東部および西縁部に

顕著に現われた層で、かなりの住居址に直接関与しており立地条件および集落構成を規定しているものと思われる。

II層…ローム。褐色粘土質ロームで、岩片、軽石を含まないきれいなロームである。ややシルト質の部分があるが概して粘着性は高い。当初、水成の二次ロームしか存在しない段丘面と思われたが、分級作用が見られないところから風成の波田ロームということになると、自然堤防の微傾斜と一括していた本調査域に不連続面（軽微な段丘崖）を設ける必要がある。

I層…砂礫層。1cm~5cmの亜円礫を主体とする堆積物。最上位に径2cm位の礫の挟みが見られる。

(3) 磯の石質について

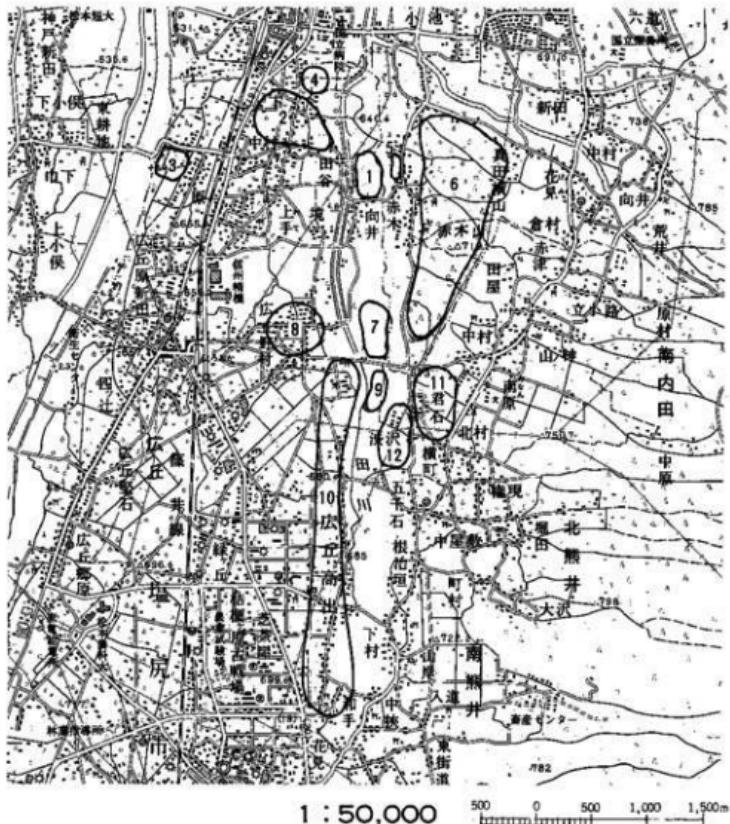
カマドの磯の石質をみると、やはり田川後背地の岩相が多く全体の8割にも及ぶ。多い順に上げてみると硬砂岩、第三紀細粒、中粒砂岩、石灰岩、安山岩、チャート、ホルンフェルス、頁岩粘板岩の順になり、これは現河床の礪質とは同じ傾向にある。

残りは閃綠岩類で、これは赤城山の裏手にあたる山麓地帯に産出するものであるが、現在は存在しない古河川によって本地域へ搬入されたものであるか、あるいは人為的に何らかの意図をもって運搬されたものであるのかは明らかではない。

（鳥羽嘉彦）

第2節 歴史的環境

松本平南半地域の遺跡分布をみると、山麓と河川流域との2地区に分けることができる。前者



第3図 吉田向井遺跡周辺遺跡分布図

の山麓への分布は主として筑摩山地山麓であり、後者は田川流域における遺跡分布である。

吉田向井遺跡は後者の田川流域への立地を示す遺跡であるが、従来まで田川沿いの遺跡では高出遺跡群を代表に、現丘中学校以南に主として発見されることが多く、それ以北は遺跡の分布は希薄と考えられていた。それは、丘中学校以南は左岸に明瞭な段丘が発達し、遺跡立地には好都合であろうと推定されるのに対し、それ以北は段丘の発達も未熟で、遺跡が形成されるには向きでないという先入観から調査の手が充分に及ばなかったためと考えられる。しかし、今回の

吉田向井遺跡の調査によって、必ずしも今までの考え方が正しいとは言えないこととなり、今後の遺跡立地・分布を考える上で大きな成果を得たといえよう。

さて、吉田向井遺跡を取り巻く歴史的環境であるが、前述のように、丘中学校以南はかなり細部にわたってその内容を把握することができる遺跡が多くあるが、それ以北では皆無に等しい。したがって、本節を述べるにあたり、その範囲をやや広げて考えてみたい（第3図）。

吉田向井遺跡と同じ吉田地区には、縄文中期土器、弥生時代の太形蛤刃石斧、石庖丁、土師器、須恵器の出土が報じられている川西遺跡(2)、中世の居館址として知られ、他に縄文、平安時代の遺物の出土もみられる長者屋敷遺跡(3)、昭和56年、大量の古銭出土で話題となった若宮遺跡(4)等があり、長者屋敷遺跡が余良井川流域に立地するほかは、田川の流域に存する。また、吉田向井遺跡と小田川をはさんで待時する松本市小赤遺跡は、昭和57年度の調査によって中世の遺物を得ているという(5)。更に、小赤遺跡の背後にある赤木山帶は、遺跡の稠密地帯で石行、赤木、原度前、清水林など10数ヶ所の赤木山遺跡群とも言うべき遺跡群が金山にわたり展開している(6)。

さて、田川を逆上ると、吉田向井遺跡の南方2kmに縄文中期および弥生後期の土器を出土した花見遺跡(7)、縄文・平安時代の遺物を得ている野村遺跡(8)がある。また、昭和53年に発掘調査が実施された高田遺跡(9)では、平安時代に属する3軒の住居址を検出している。ここまでが、田川の段丘も未発達ないわば低平地に立地する遺跡であるが、ここから以南は主として左岸に段丘が発達し、この段丘上に遺跡が密集して分布し、いわゆる高出遺跡群(10)を形成している。高出遺跡群は、広丘高出、野村の両区にわたって展開し、南北3.2km、東西300mの広範囲に分布する諸遺跡を包含した総称である。この遺跡群には、北から丘中学校（先土器、弥生～古墳の方形周溝墓1、平安時代住居29）、黒崖（先土器、縄文早期、平安時代）、北原（先土器、縄文中期、弥生後期住居4、平安住居3、柱穴址2）、一夜崖（縄文早期）、上村（平安住居3、柵列）の発掘調査された遺跡があり、他に未調査の9遺跡が存在する。この他、田川の右岸には縄文晚期の遺物を出土した君石(11)、縄文中期、弥生後期の遺物の得られた渋沢遺跡(12)がある。

吉田向井遺跡は、こうした周辺地域の遺跡の消長と密接な関連性をもちながら発生、繁栄、消滅したのであり、とりわけ本遺跡が平安時代を主として當まれたことを考えると、これらの同時代の遺跡との関わり合いは一層重要なものとなり、周辺遺跡との関連性の追究が重要な課題として提起されてこよう。

（小林康男）

第III章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

吉田向井遺跡は、現在の吉田下向井の集落の北側に展開しており、出川右岸の自然堤防上に立地している。調査は自然堤防の頂部から放射状に広がる微傾斜地域を行い、発掘面積は4,200m²に及んだ。

この結果、遺構としては平安時代の竪穴住居址85軒、建物址3軒、小堅穴3基が検出された。出土遺物はこれらに伴う大量の土器、石器、鐵器の他、縄文時代と弥生時代の土器、石器が出土した。

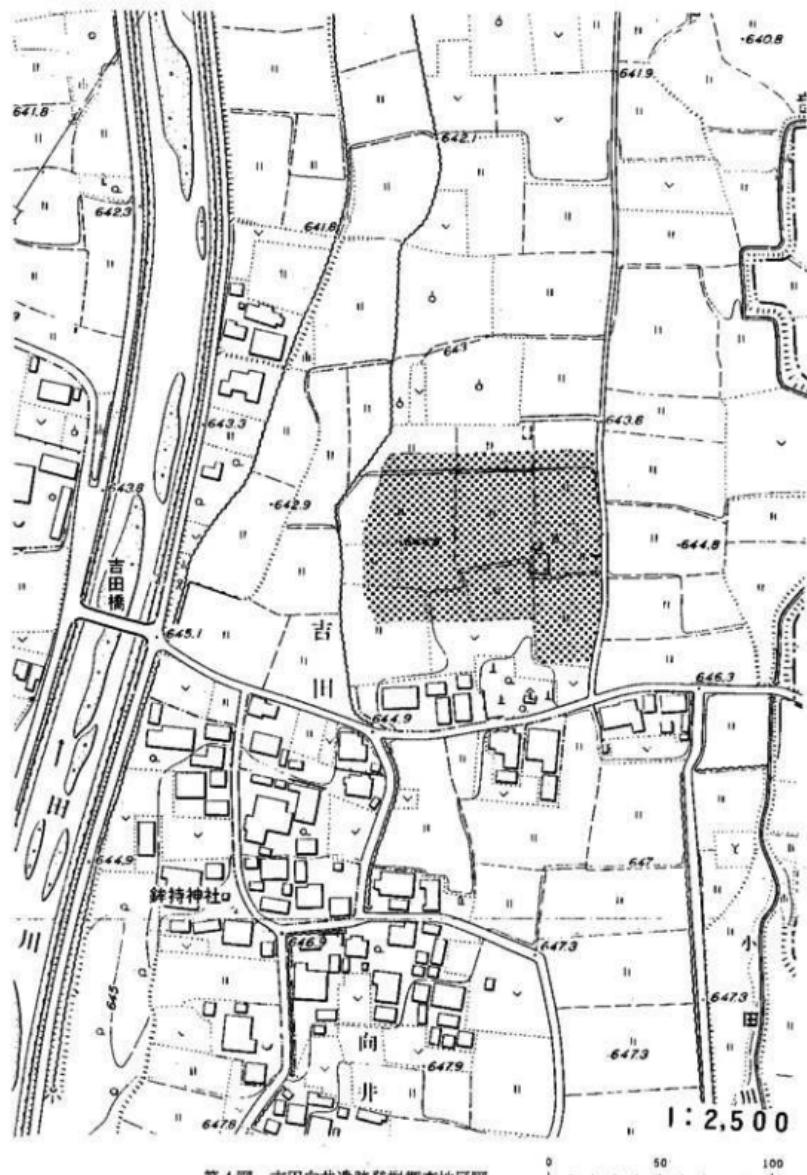
縄文時代については、草創期、中期の遺物の散布がみられた。草創期では有舌尖頭器が得られ、中期では土器、石器が出土している。いずれも数点の出土にすぎないことから、他地域からの混入の可能性が強い。

弥生時代については、第19号住居址東側の遺構外から後期の壺が2個体出土した。この時代の遺構は検出されなかったが、弥生時代の集落址の存在を伺わせるものである。

平安時代については、調査地の全域にわたって展開する85軒の住居址と、これらのいずれかに付随すると思われる建物址3軒、小堅穴3基が検出された。集落の中心は、ほぼ調査域の中にあると推定されるが、住居址の検出状態から集落の規模は調査域を含めたかなり広範囲にわたっているものと推定される。住居址はすべて隅丸方形の竪穴住居址であるが、新旧の切り合いにより全形を現わすものは全体の半数にとどまる。土器は土師器、須恵器、灰陶器、綠釉陶器があり器種としては、壺、皿、塹、壇、甕、壺、鉢等がみとめられる。石器は砥石と礫み物用石錐があり、鐵器では鍔先、鎌、斧、刀子、劔鍔車、帶金具が得られた。出土土器の様相から住居址の時期は大別して4期に区分された。しかしその間、一時的な断絶はあったにせよ平安時代のほぼ全期間を通して集落の営みが存続しており、当時の社会的背景はもちろん河川による自然環境の変化が集落の変遷を規制していたことが判明した。

以上のように、吉田向井遺跡は平安時代の人集落跡であり、古代筑摩六郷の一つ「良田郷」の中の集落としての可能性とともに、今後の松本平における該期研究に極めて貴重な資料を残すこととなった。

(島羽嘉彦)



第4図 吉田向井追跡発掘調査地区図

0 50 100

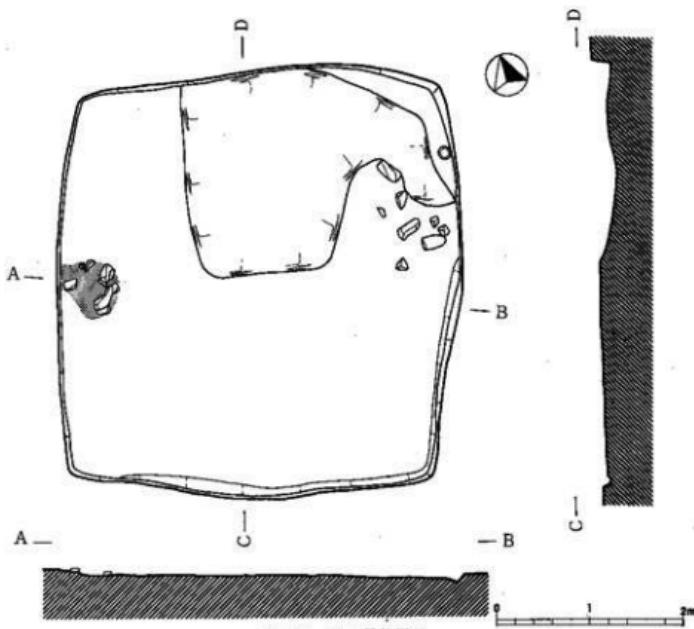
第IV章 遺構

第1節 住居址

(1) 第1号住居址 (第6回)

本址は調査地域の南東部の一隅に位置し、最南端に検出された住居址である。第3号住居址とはほとんど軸を接する場所に構築されている。

プランは、東西4.3m、南北4.5mの、いくらか南北に長い隅丸方形であり主軸はほぼ東西線上に一致する。壁は全周囲にわたって非常に良好に遺存する。壁の掘り込みは、各壁とも垂直に近く、きれいに掘られている。壁高、特に北東隅が9cmと深いほかは、ほとんど4.4cmで同一で



第6図 第1号住居址

あり、比較的浅い掘りこみである。周溝は南壁下のはほとんどと東壁下中央から南寄りの部分で、両周溝は一筋がりになっている。南壁下は長さ3.4m、幅6~14cm、深さ5cm、東壁下は長さ2.4m、幅3~8cm、深さ5~9cmをそれぞれ測る。床面は北側半分の約%の部分は他部より10~25cm低く、軟弱である。落ち込みとなっている部分を除けばローム上に構築されており、比較的平坦で堅く良好である。なお、柱穴と認められるものはなかった。カマドは西壁のはば中央に設けられている。大小9個の石を用いた石組み粘土カマドで、焼土も60cmの範囲に6cmほど堆積していた。

遺物は住居外ではあるが、住居の東壁のはば中央の外側に円筒形の土師器が発見された。

本址は、出土土器から第Ⅲ期である。

(深井幸人)

(2) 第2号住居址 (第7図)

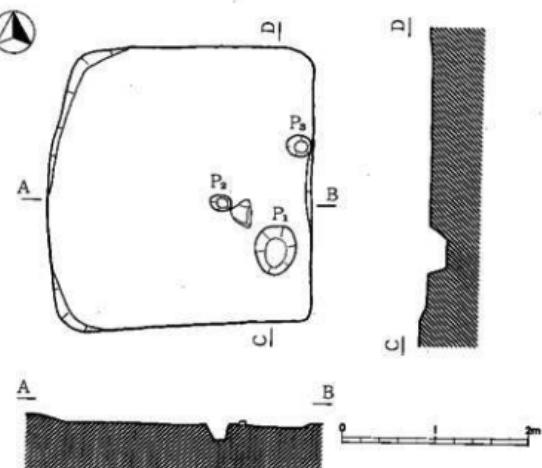
本址は調査区の南東寄りに位置し、第8号住居址のおよそ4m西に確認された。

プランは床面近くまで擾乱を受けている為判然としないが、一辺は2.9mの隅丸方形と考えられる。壁はローム層を掘り込んでおり、西壁のほとんどと東壁の一部が遺存している。壁高は西壁の北端で最高10cmを測るのみであり、また東壁の最高も7cmと浅く、擾乱の影響の大きさがしのばれる。掘り込みは、全体的にみて西壁で鈍く東壁で鋭い。

床はほぼ平坦で、中心付近は堅くしまったロームの床だが、南西隅の一角は数cmほど窪んでおり、小円礫の砂利があらわれている。また床上にはピットが3つ検出されている。南東隅の一番大きいP₁(54×44cm-19cm)、中心付近のP₂(16×24cm-18cm)、それに東壁下に存するP₃(22×28cm-9cm)の3つであるが、配置が不規則なことから柱穴と考えられるのは南東隅のP₁だけであろう。

カマドについては、後世の擾乱が激しい為、カマドに使用された石が掘り返されたと考えられP₁とP₂の間にあった人頭大の角礫がおそらくその残骸であろう。なお、焼土は検出されていない。出土遺物は擾乱の影響であろうか少なかった。

本址は、出土土器から



第7図 第2号住居址

第III期に属する。

(前田清彦)

(3) 第3号住居址 (第8図)

本址は調査地域の南東部の一隅に位置し、第4号住居址と北側の一部が重複している。第1号住居址は南西1.7mの至近距離にあり、ほとんど軒を接する場所に構築されている。

プランは東西5.4m、南北4.8mの若干東西に長い隅丸方形を呈する。

床はロームの掘り込みによるもので、床面の中央の直径およそ1.5mの部分が壁周辺の床面より堅く良好でありその周囲の床もほぼ水平でよく踏み固められていた。壁は比較的緩やかな傾斜を有する掘り込みとなっている。壁高は7~15cmを測るが、第4号住居址寄りの部分が低く南になるにつれて漸増している。なお、柱穴と認められるものはなかった。カマドはカマド石と思われるものが周囲に確認されず焼土が北側の落ち込みと壁との間に検出されたことから粘土カマドであったろうと推定される。

遺物は、覆土中から数点出土にすぎず、床直上の遺物もほとんど無かった。なお、砥石が西端の床直上に一点出土している。

本址は第II期に属する。

(深井幸人)

(4) 第4号住居址 (第8図)

本址は調査地域の最南東の一画に位置し、第3号住居址と切り合っている。

第3号址が第4号址を掘り込んでいたため、新旧に関しては、第4号址の方が第3号址よりも、古いと推定される。また西方2.5mに第7号、北方3mに第5、6、9号住居址が存在する。

プランは一辺3.5m×4.6~4.8m程度のやや歪んだ方形を呈している。主軸は東西線上に一致する。

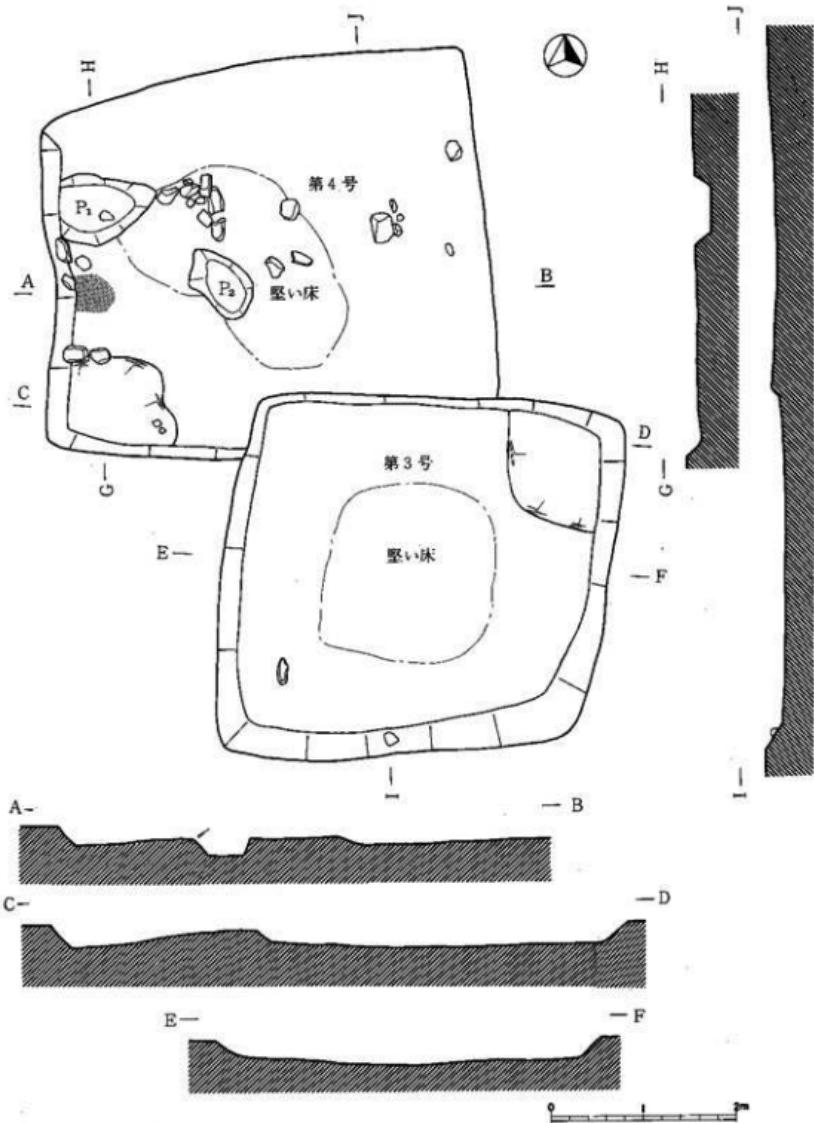
床はロームを掘り込んでおり、中央部から南・西壁にむけて広がっている部分が比較的堅く良好であった。壁は西壁と南壁の一部が確認されるが、削合と鋭い掘り込みである。壁高は西壁が20~25cmで、南へ寄るほど低くなり、南壁は17cmを測る。ピットは2ヶ所確認された。一つは住居址中央部からやや南北寄りの50×80cmの楕円形で深さ15cmである。底及び壁は堅く良好であり、ほぼ垂直であるが、北側がやや斜めに掘り込まれている(P₂)。もう一つは西壁に接し、北西の一隅にあり、100×70cmの楕円形、深さ17cm程度で壁は比較的なだらかな傾斜になっている(P₁)。

カマドは西壁の丁度真中に焼土が約2cmの高さで半径20cmに亘って残っていること、近くにカマドの石組に用いられたと見られる石が3個発見されていることなどから間違いないだろうと思われる。

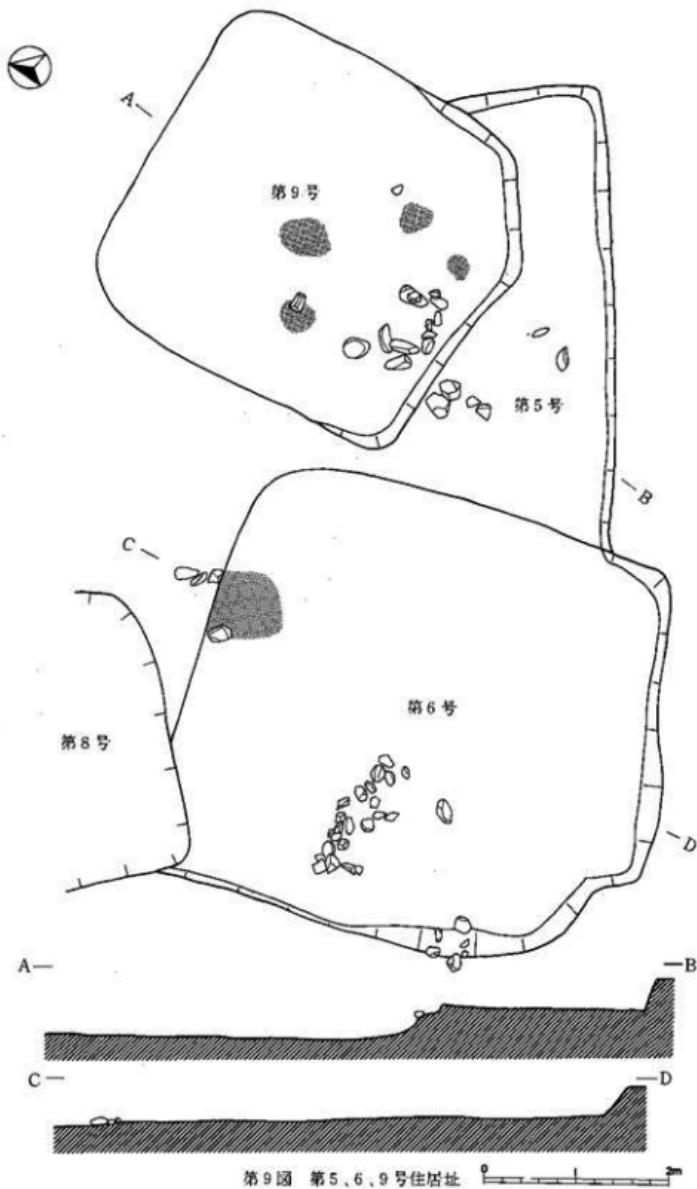
また本址中央からやや北よりに大小の計9個の石の集積が確認されている。

本址は第IV期に属する。

(深井幸人)



第8図 第3、4号住居址



第9図 第5、6、9号住居址

(5) 第5号住居址（第9図）

本址は調査区の南東寄りに位置し、西で6号址と切り合い北で9号址と切り合っている。プランは切り合いが激しく、特に北側部分など擾乱により床面までけずられているので判然としないが、東西方向は5m以上あるとみられ、南北方向は不明である。壁は南壁がほぼ全体にわたって残っており、壁高は20cmで、やや脱くロームを掘り込んでいる。床面は9号址と切り合っている為南西側が残っているだけであるが、その部分についてはやわらかい黒土混じりのロームの床で、踏み固められた跡など検出されなかった。ピットは検出されず、焼土も検出されなかつたが、住居内の南側中心付近には人頭大の礫が数個散在している。おそらくカマドを作った際に使用した石であろうと推測される。しかし、すぐ北には9号址のカマドがあるので、それが5号址のものであるか、それとも9号址のカマド石が崩れたものは判別し難い。

本址と6号址、9号址の新旧関係については、本址が最も古く、6、9号址に切られる形となっている。

本址は、III期に属する。

（前田清彦）

(6) 第6号住居址（第9図）

本址は調査区の南東寄りに位置し、北に8号址と隣合させ、東で5号址と切り合っている。プランは東で5号址と切り合っていて、判然としないが、およそ南北5m、東西4.40mほどのやや直んだ隅丸方形と考えられる。壁は西壁と南壁のすべてと東壁南端の極くわずかな部分が遺存している。壁高は、西壁で10cmから20cmと南へ向うに従って高くなり、南壁では20cmを測る。どちらもロームをやや脱く掘り込んでいる。床は大きさ2・3cmの円礫から成るローム混じりの砂利であるか貼り床のあった可能性が強い。また、住居内北西部分の床は、砂利がいく分落ち込んでおり、その上の集石とは20cmのレベル差がある。5号址との切り合いの部分については6号が砂利の床で5号はロームの床であるが切り合いの部分はそれらが混在しておりはつきりせずレベル差もないので判別がつきにくい。住居内には径10~20cmの礫が散在していて、特に西側の中心部分に集中している。いずれも床面に据えられているのではなく、床から10~20cm浮いている。カハドについては西壁の入り込んだ部分とも考えられるが、北東隅に存する焼土の部分は、焼土の厚さも5cmと厚く、その中に土師器片がかなり多く入っていたので、こちらの方であると考えた方がよさそうである。また、住居内南東寄りの位置では、フイゴの羽口と鉄製の刀子が発見されているので、この住居が鉄器製作に関する住居であった可能性を示唆するものとして注意される。

なお、本址と第5号住居址との新旧関係については、切り合いの状態、および遺物から本址が新しいと考えられる。本址は、IV期に属する。

（前田清彦）

(7) 第7号住居址 (第10図)

本址は、調査区域の南端地域にあり、東方には1、3、4号址がある。

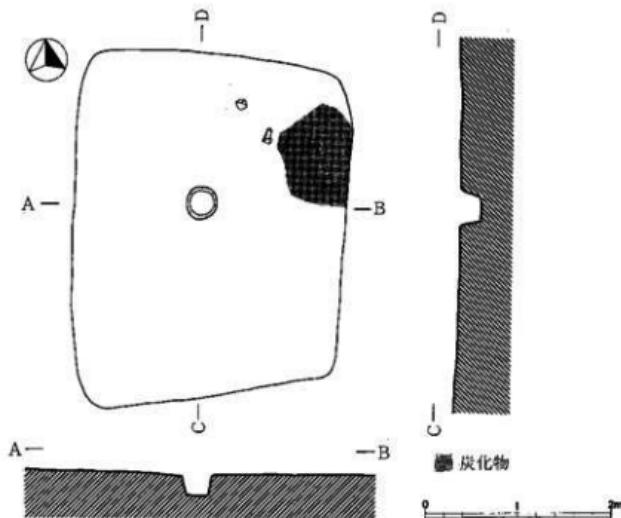
この住居址は、ブルドーザーによる表土削平時に砂利層への黒色土の落ち込みによって検出されたものであるが、掘り込みは極めて浅く、明確なプランは把握し難い。しかし、砂利に黒色土の混入した堅い床面を追うと、やがて砂利層に変化する部分があったため、この堅い床を一応の住居址の範囲として把えると、おおよそ東西2.95m、南北3.64mの矩形を呈するものと推定される。

床面は、堅く平滑であり、北東隅には 1.0×7.0 mの範囲にわたって細かな炭と焼土が顕著に認められる。壁はほとんど遺存しない。堅い床面のほぼ中央に径35cm、深さ20cmのピットがあり、あるいは柱穴かとも考えられた。カマドは、床上に炭・焼土が認められた東北隅に構築されたものと推定されるが、明確さを欠いている。

遺物は極めて少なく、ピットの脇から出土した土師器壺が唯一のものといってよい。

本址は、IV期に属しよう。

(小林康男)



第10図 第7号住居址

(8) 第8号住居址 (第11図)

本址は、調査区の南東寄り、6号址のすぐ北に位置する。

プランは、東西2.6m~3.0m、南北4.8m~5.4mの歪んだ長方形を呈しており、北東部分が弧を描いて内側に入り込んでいる。壁は、西壁が南側に3.5mにわたり検出され、壁高は10cmで、やや緩やかに落ち込んでいる。南壁は全体にわたり残ってはいるが、壁高はわずかなもので最高でも5cmである。東壁は、北壁に統く弧を描いた部分が残っており、落ち込みは緩やかで壁高は15cmを測る。また、東壁の南側は壁が残っていないばかりか、床がわずかに削り取られているようである。なお、北西隅の部分は、其の方向に米掘の住居址があるとみられ、壁は検出されなかつた。

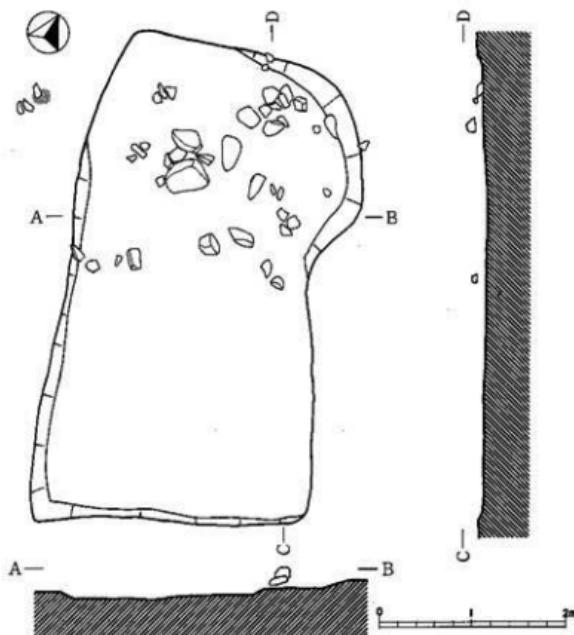
床は南側が良く残っており、ロームを踏みしめたタタキ状の堅い床が広がっているが、小さな起伏が多く、平坦とは言い難い。北側の部分には人頭大前後の礫が散在しているが、どの礫も床上10数cmの高さの所に浮いていて、カマドに使った石が崩れたものと考えられる。カマドの位置としては、礫散在の状態からみて東壁の真中より北寄りの位置が考えられ、住居内北側の中央部分にある大きな礫は、

そのカマドから崩れた
礫だと考えればよい
であろう。

その他ピットなど検出されず、遺物はいずれもかなり床から浮いて発見されたことから後世の擾乱の影響を窺わせる。

本址は、III期に属する。

(前田清彦)



第11図 第8号住居址

(9) 第9号住居址（第9図）

本址は調査区の南東寄りに位置し、南側では5号址と切り合っている。プランは北東側で攪乱が激しく、南壁と西壁の一部が残っているのみで判然としない。主軸は北北東と南南西を結ぶ直線上にはば一致する。壁は南壁が3.6mにわたり残っており、途中で一度内側に屈折し東側の端で漆黒の落ち込み(後世の掘り込みか?)によって遮られている。なお、南壁の壁高は15cmである。東壁は南側で70cmにわたり残っており、北に向かうにつれて低くなっている。床はロームを掘り込んだままのやわらかい床で、踏み固められた堅い床は検出されなかった。これは攪乱により床が削り取られたとも考えられる。カマドは南壁の中心よりやや東寄りに位置し、径20cm前後の角礫を使った石組み粘土カマドである。カマドを中心として径2mほどの範囲には焼土が散乱し、それとともに土師器なども散在している。なお、ピットは検出されなかった。5号址との新旧関係の点では9号址の方が新しい。この9号址の東には35号址の中心にある集石と同様な集石の検出されたが、床は検出されず、これだけで住居とは考えにくい。この集石はローム面直上に東西2m、南北1mの範囲内で人頭大の角礫が散在しており、他に床も焼土も検出されず、後世、開墾の時などの石捨て場だととも考えられる。

本址は、Ⅲ期に属しよう。

(前田清彦)

(10) 第10号住居址（第12図）

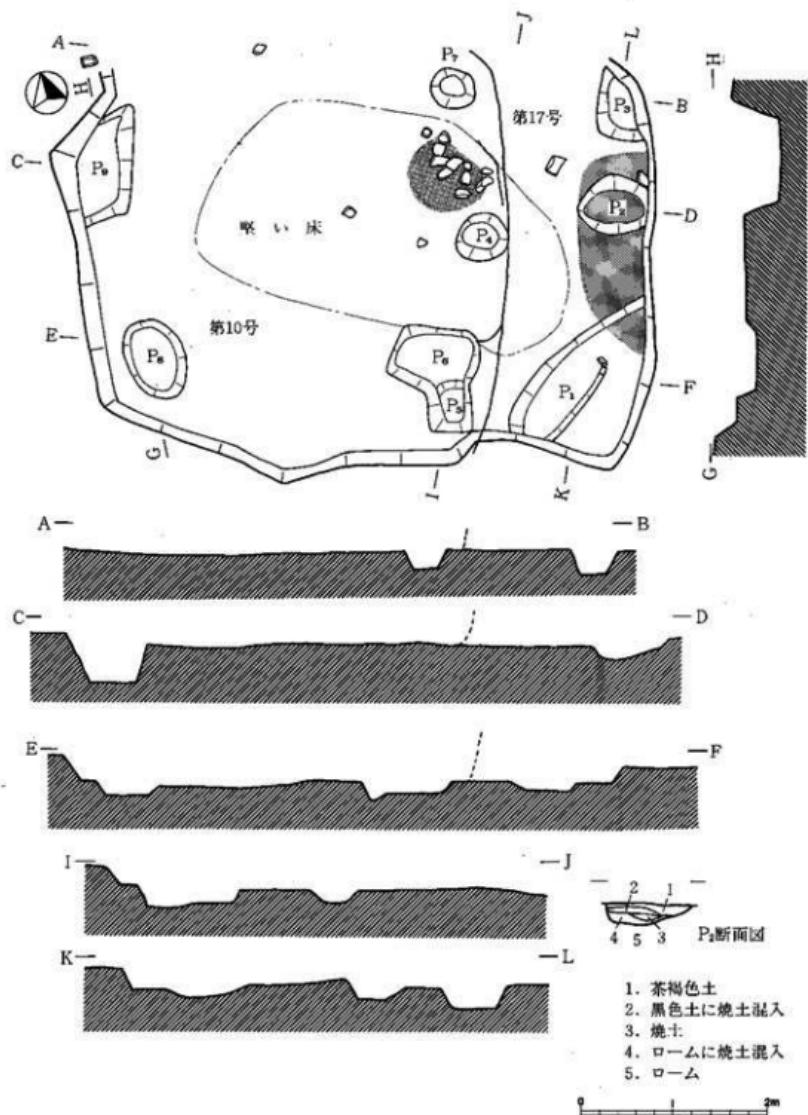
本址は、調査区内の第1号建物址より南約16mに位置する。プランは一辺約4.5mの隅丸方形を呈する。主軸はほぼ東西方向と一致する。壁は南壁と西壁が残存し、東壁は第17号住居址内に存在したと考えられる。北壁は確認できなかった。壁はローム層をほぼ垂直に掘り込んでいる。壁高は、南壁で25cm、西壁は自然地形の傾斜に沿って北に向かって20cmから漸減し、消滅している。

床面は全体的に水平で平坦である。床はローム層上に構築され、P₄~P₉を結んだ内側に堅硬な部分があり、他の部分も比較的良好であった。P₄北側の集石がカマドと考えられ、石組み粘土カマドである。これは集石付近に焼土が50cm×100cmにわたって散布していたことからも推定できる。柱穴はP₄ (30×20)、P₇ (20×20)、P₈ (60×50)、P₉ (90×40) の4本が考えられる。P₄ (30×20) は貯蔵穴であろう。P₄内からは少量であるが炭化物、焼土が検出されている。

第17号住居址との新旧関係は、遺構の状態から第17号住居址が古く、第10号住居址が新しい。本址は出土土器の様相からⅣ期の住居址と推定される。

遺物の出土状態は住居址内より土器片が出土し、床面よりやや浮いての出土が多かった。中央付近より床面直上で打製石斧が1点出土している。

(小嶋秀典)



第12図 第10、17号住居地

(11) 第11号住居址 (第13図)

本址は、建物址の南に位置し、第30号址と重複する。プランは、東西4.9m、南北4.5mの東西にやや長い隅丸方形を呈する。主軸はほぼ東西を指す。壁はローム層をほぼ垂直に掘り込んでいるが、南側だけは、砂利混りのローム層である。壁高は、東壁8~14cm、南壁13~16cm、西壁は第30号住居址と重複している部分が7cm、他が8~11cm、北壁4~12cmとなっており、壁高は各壁ともわずかであるが差がみられる。床は北側半分は、一般的なローム層となっているが、南側半分は砂利混りのローム層となっていることから、床面全体に貼床状の何らかの構築があったものと思われる。中央部分は堅緻であるが、周辺部は起伏があり、良い状態とは言い難い。ピットは全部で3ヶ所確認された。南壁中央に25×25、-4ないし-20cmのピットが1つ、南西隅に120×90、-16cmと50×40、-34cmの2つのピットが重複するように検出された。いずれも柱穴と考えられる。カマドは東壁中央やや北寄りに位置する。石組粘土カマドと考えられるが、石はわずか1コを残すのみである。焼土は半径45cmの半円径に広がっている。

本址は、IV期に属し、第30号址との新旧関係は、本址が古く第30号址が新しいと思われる。

(小嶋秀典)

(12) 第12号住居址 (第14図)

本址は、第1号建物址より東へ約6m隔たり、また第32号住居址の北側に位置する。

プランは、一辺約3.6mの隅丸方形を呈すると考えられるが、北壁は起伏が激しい。主軸は、南北方向に一致している。壁は、北壁、西壁は遺存しているが、東壁の一部と南壁は、第32号住居址と重複しているため残存していない。壁は砂利混りのローム層を垂直に掘り込んでいる。壁高は、北壁および西壁とも約20cmを計る。

床面は、多少起伏がみられる部分もあるが、全体的には水平で平坦である。床の状態は小円碟を含むロームからなっている。カマドは、北壁中央に構築されている。カマド内には焼土がみられ、石が崩れた状態でカマドのプランは、はっきりしないが支柱石は残されている。石組み粘土カマドである。

柱穴と考えられるピットは発見されなかった。

出土遺物は少なかったが、鉄製の紡水車が一点発見されている。

本住居址は第32号住居址より古く、II期に属すると推定される。

(山崎敬二)

(13) 第13号住居址 (第15図)

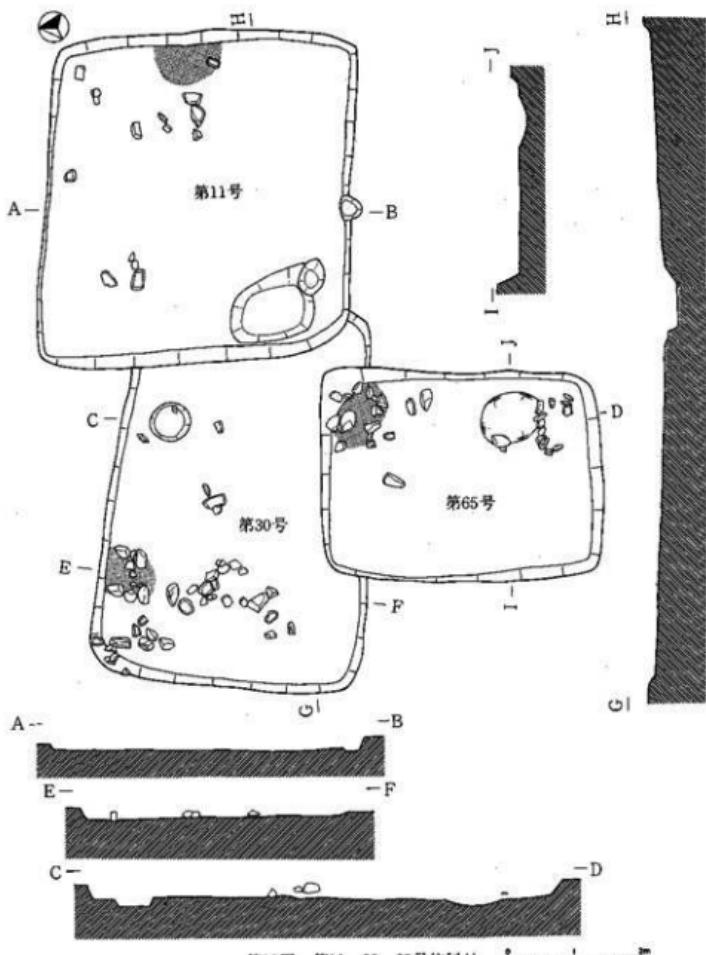
本址は、建物址群の南側に位置し、東側を第30号址を切る形で重複している。

プランは、南北3.6m、東西3.05mのやや南北に長い隅丸方形を呈する。壁は、第30号址との重複部分を除き、全周間遺存し、掘り込み面はローム層となっている。各壁とも垂直に近く鋭く掘

り込まれ、壁高は、北壁12cm、西壁10cm、南壁12cmを測る。床面は、平滑で良く踏み固められている。カマドは、西壁の北寄りにあり、壁際120×70cmの範囲に焼土の散布が認められ、この焼土散布部分にカマド使用と推定される煙が散存する。柱穴と推定されるものは検出できなかった。南西隅には深さ7～9cmの浅い不整形の掘り込みが見られるが、後世の擾乱によるものであろう。

本址と第30号址との新旧関係は、本址が新、第30号址が旧となっており、本址は、Ⅳ期に該当する。

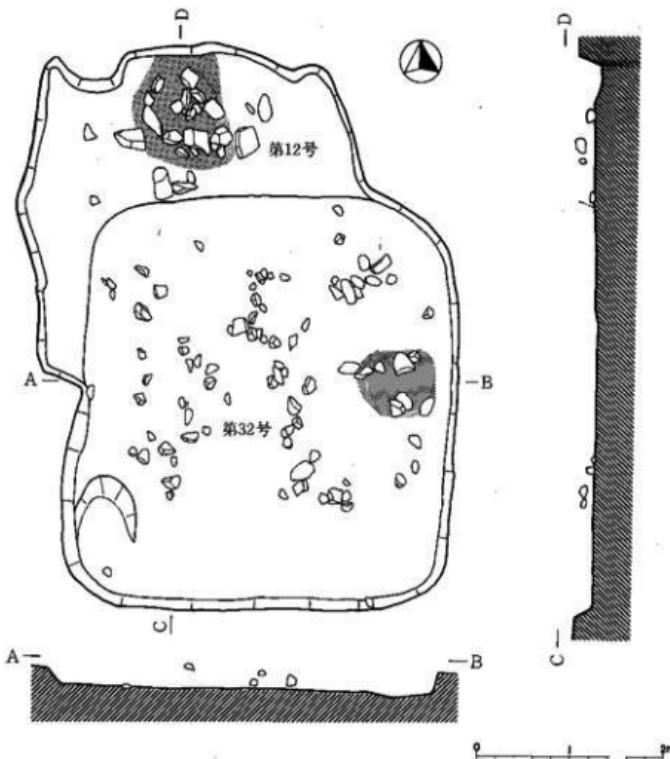
(小林康男)



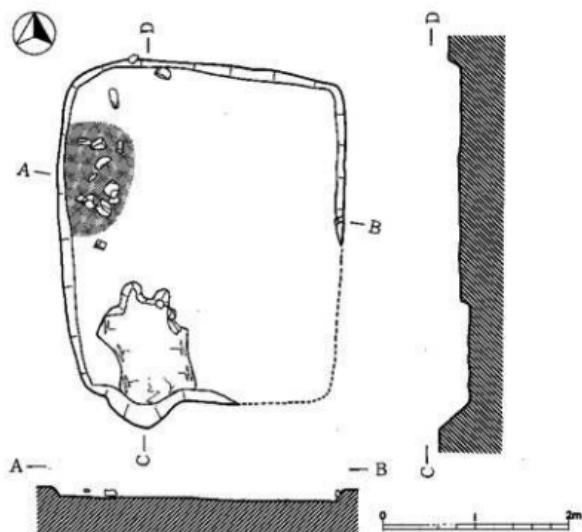
第13図 第11、30、65号住居址

(14) 第14号住居址 (第16図)

本址は、調査区域の中心部分の東北端に位置し、西側に第33、59号住居址が接し、本址の東半分は調査区域外に属し未発掘である。したがって、本址のプランは、調査済みの西側部分から推定して一辺4.6mの隅丸方形と考えられる。本址の存在する区域は砂利混り層が顕著な地域であり、覆土にもローム層にも多量の砂利が混入している。壁は南・北壁が残るのみで、西壁は擾乱のため確認できなかった。砂利混りのローム層を鈍く掘り込んでいる。ピットはP₁ (40×40cm)、P₂ (60×60cm)、P₃ (40×40cm) の3ヶ所あり、P₁・P₂は柱穴と考えられるが、P₃は擾乱のための落ち込みとえた方がよい。P₃の南西に位置する集石がカマドで、石組み粘土カマドである。カ



第14図 第12、32号住居址



第15図 第13号住居址

(15) 第15号住居址 (第17図)

本址は、建物址群の南にあり、また16、31号址のすぐ西方に位置する。調査地域のほぼ中央に存在する住居址である。

遺存状態は良く、原形を良く保っている。プランは、南北4.75×東西4.62mのほぼ隅丸方形を呈する掘り込み面は、南西隅を除きローム層であり、南西隅のみ砂利層となっている。壁は四周ともきれいに掘り込まれ、壁高は、北壁で16cm、西壁21cm、南壁27cm、東壁27cmとなっており、地形の傾斜と従い南に向うにつれて漸増している。床面は、南西部部分(1.8×1.0m)が砂利面となっているほかは、ローム層上にあり、全般的に平滑で堅緻である。床面中央部を中心として径1.4mの範囲に集石がみられ、40×60、28×48cmの大きな礫から拳大の小さなものまでが認められる。これらの礫はほぼ床面上にある。ピットは、南東隅と北東隅の壁下にあり、南東隅が130×60、-21cm、北東隅が110×67、-18cmで、不整形を呈する。存する位置、形状から柱穴とは考え難い。カマドは、西壁に設置され、中央よりやや南に寄っている。石組み粘土カマドで、間口70cm、奥行110cmを測り、向袖の石は比較的良好に残されている。焼土は認められなかった。

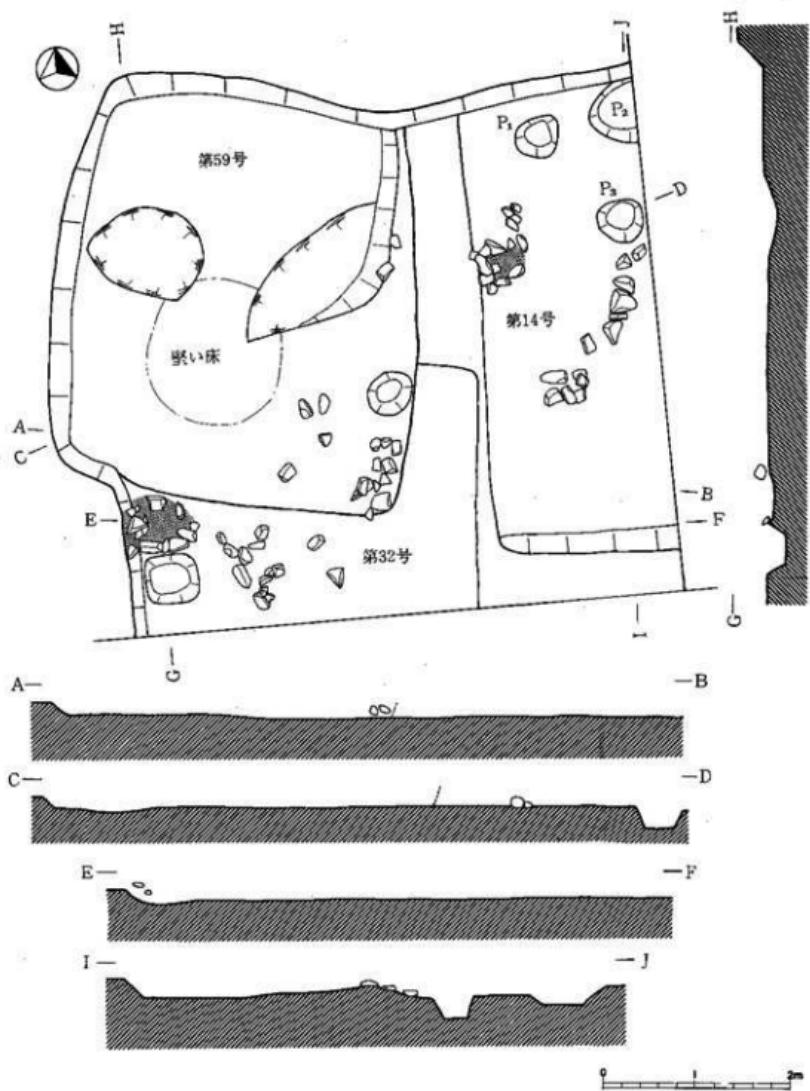
本址は、IV期に属する。

マド内には焼土がみられ、土器も出土している。間口50cm、奥行60cmで比較的良好に残存するが、西壁がはつきりしないため煙道は確認できなかった。

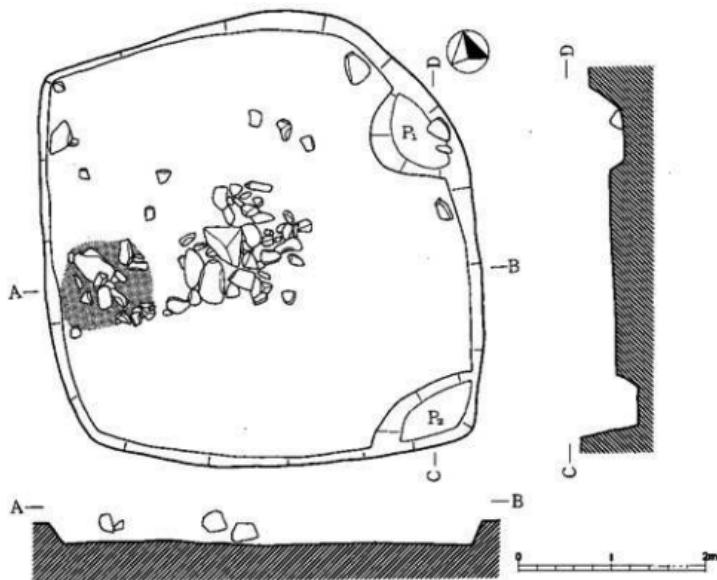
遺物は全体的に少なく、特筆するほどのものは出土していない。

本址は出土土器の様相からII期に属しよう。

(小嶋秀典)



第16図 第14、33、59号住居址



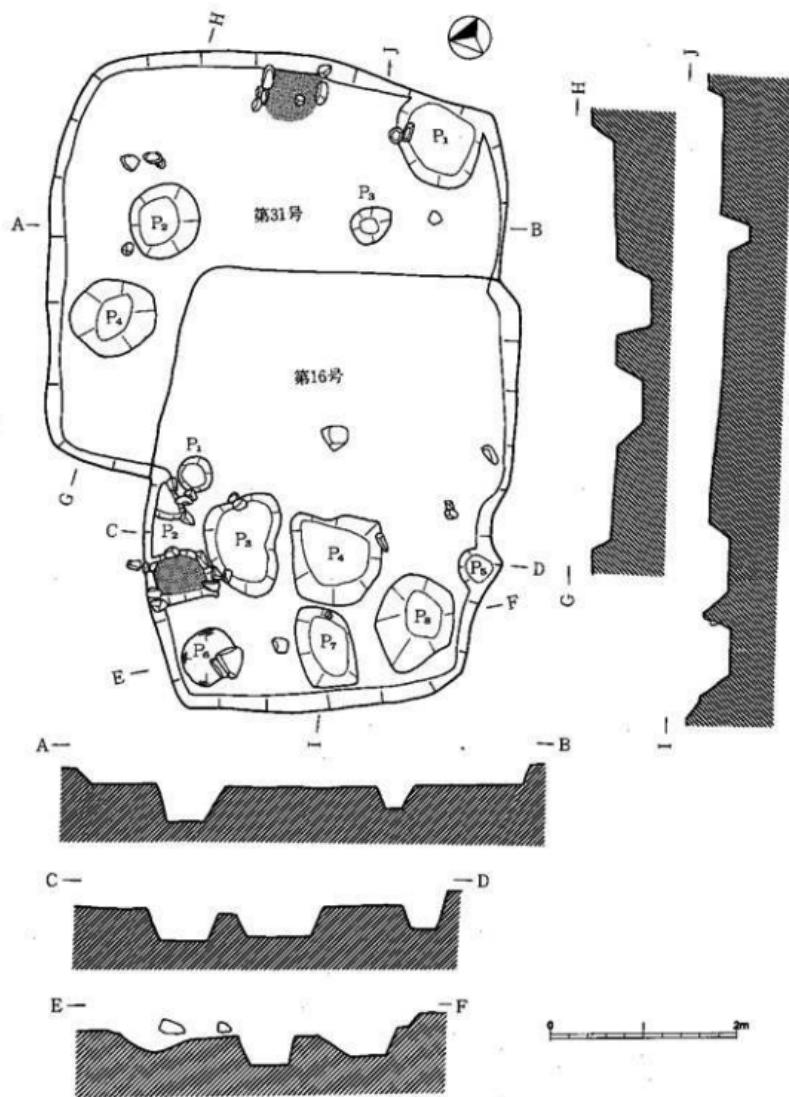
第17図 第15号住居址

(16) 第16号住居址（第18図）

本址は、発掘区の中央よりやや東寄り、即ち建物址群の東隣りに位置する。東側の第31号住居址とは重複しており、また西側の第15号住居址ともわずか10cmの隔たりをもって接している。

本址は、第31号住居址の一部にロームをもって貼床をし構築されているために北壁および東壁の確認が不明瞭であるが、平面形態は残存壁の在り方より推して南北3.6m、東西4.8mの隅丸方形を呈すると推測される。残存している床面にはビットが多数散在しているため起伏が著しい。この中には明らかに本址に作るものも見受けられるが、おそらく後に構築された隣接住居に付随するものもある。床面自体は踏み固められよく締っている。壁は床面が緩やかに東へ傾斜しているため、西壁で壁高10cmを計るが東側へいくに従って壁高を増し、南壁東端部では19cmを計る。また第31号住居址直上に貼床されたロームの厚さは10cmを計る。掘り込みは比較的なだらかな傾斜で、凹凸が激しく不明瞭な部分が多い。

ビットは全部で8個検出され、P₁ (-20)、P₂ (-5)、P₄ (-27)、P₆ (-24)、P₈ (-22)、P₇ (-31)が描鉢形、P₃ (-18)、P₅ (-25)が柱穴形の形態を示している。このうち主柱穴はP₆とP₈を含む4本柱と思われるが、第31号住居址への貼床部に推測される2個については確認できなかつ



第18図 第16、31号住居址

た。またP₁とP₂は補助柱穴的な役割を果していた可能性が強い。その他のピットについては用途不明である。

カマドは石組み粘土カマドで、北壁西寄りに構築されている。遺存状態は悪く、焼土も著しくはなかった。本址は、Ⅳ期に属する。

(鳥羽嘉彦)

(17) 第17号住居址 (第12図)

本址は、第1号建物址より南に約16mに位置し、第10号址と西側半分が重複している。本址のプランは残存する東壁及び第10号址との重なり具合から、南北方向一辺約4m、東西方向一辺約3mの南北に長い隅丸長方形と推定される。主軸はほぼ東西方向と一致する。壁はローム層と南壁の東半分が残存する。西壁は第10号址に切られ、北壁は確認できなかった。壁まローム層をほぼ垂直に掘り込む。壁高は南壁で約25cm、東壁は自然地形の傾斜に沿って北に向かって約25cmから漸減し消滅している。

床面はローム層上に構築され、全体的に水平で平坦である。床の状態は、カマドの西側に1m×1mの範囲で堅緻な部分が認められた。カマドはP₂に焼土がレンズ状に堆積していたこと、P₁～P₃にかけて焼土が約1mの幅で散乱していたことからP₂の落ち込み部分が考えられる。したがって本址のカマドは粘土組みカマドである。貯蔵穴はカマド南のP₁が考えられる。P₁からは土器片が多数出土している。主柱穴は、P₁ (130×100)、P₃ (50×25)、P₆ (50×80)、P₇ (20×20) の4本が考えられる。しかし、P₆の主柱はP₈ (30×20) であったとしてもおかしくない。また、P₁は第10号址の主柱穴とも考えられる。

第10号住居址との新旧関係は遺構の状態から第17号住居址が古く、第10号住居址が新しい。

本址は、出土土器の様相からⅢ期に属する。

土器の出土はカマド付近とP₁付近に集中していた。

(小嶋秀典)

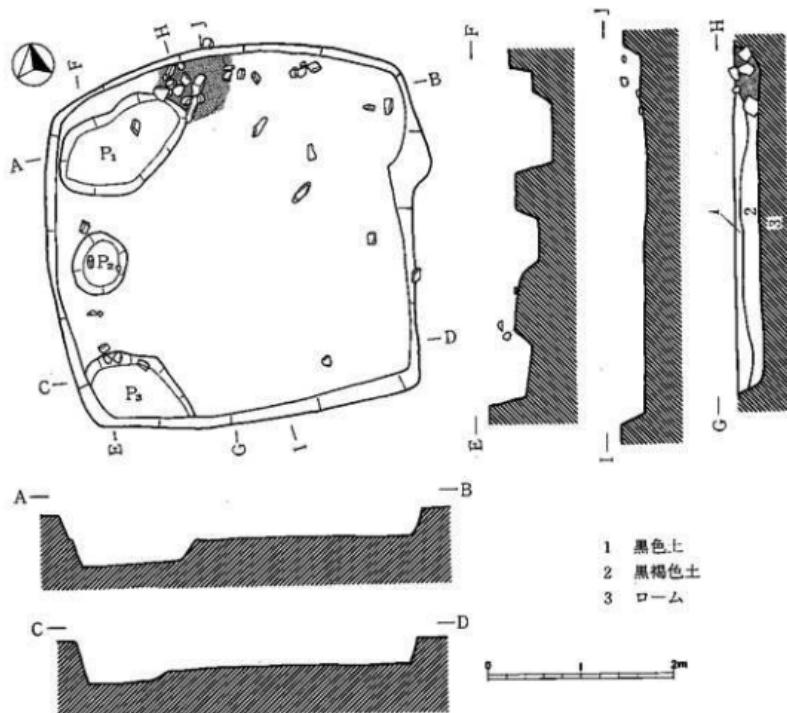
(18) 第18号住居址 (第19図)

本址は、第1号建物址の北面約5mに位置する。プランは、一辺約3.6mの隅丸方形を呈するが、全体にややゆがんだ形となっている。主軸はほぼ南北方向に一致する。

壁は全周圍にわたって非常に良好に遺存する。壁の掘り込みは各壁とも垂直に近い。壁高は、東壁28cm、西壁24cm、南壁26cm、北壁29cmとそれほど差がない。

床面は、東側半分が砂利を含むローム層で、西側半分が一般的なロームであり、西側中央部分に堅い床面がみられた。ピットはP₁からP₈まで確認され、全部西壁寄りに並んでいる。いずれも柱穴と考えられるが、東側には、ピットがまったく見られなかった。カマドは、北壁中央やや西よりに、壁をわずかに抉り込んで石組み粘土カマドが設けられている。規模は、間口40cm、奥行70cmで、石は崩れた状態であった。焼土はカマド内に見られた。

貯蔵穴は、カマド西側のP₁が考えられる。P₁は東西に長く、東側から播鉢状になっていたので



第19図 第18号住居址

柱穴と貯蔵穴が重複していたものと考えられる。遺物の出土は、全般に少ないがカマド付近に完形品が数点あり、カマド内からも若干出土している。

本址は、出土土器から、III期と考えられる。

(小嶋秀典)

(19) 第19号住居址（第20図）

本址は、調査区の中央より西へ約30mに位置し、南側に第20、21号住居址、西側に第56号住居址、北側に第52、58号住居址が存在する。

プランは、東西6.44m、南北5.96mの隅丸方形を呈する。主軸はほぼ東西方向と一致する。壁は、ローム層をほぼ垂直に掘り込んでいる。壁高は南壁で約30cm、東壁、西壁は25cm～13cmで北へ向かって自然地形の傾斜に添って漸減し、北壁は約13cmと浅い。

床はローム上に構築され、特に堅緻な部分は観察されなかったが、全体的に平坦である。柱穴は、P₁ (45×50-) P₂ (40×50-) P₃ (35×50-) の3本が考えられるが、いずれも西壁沿にあ

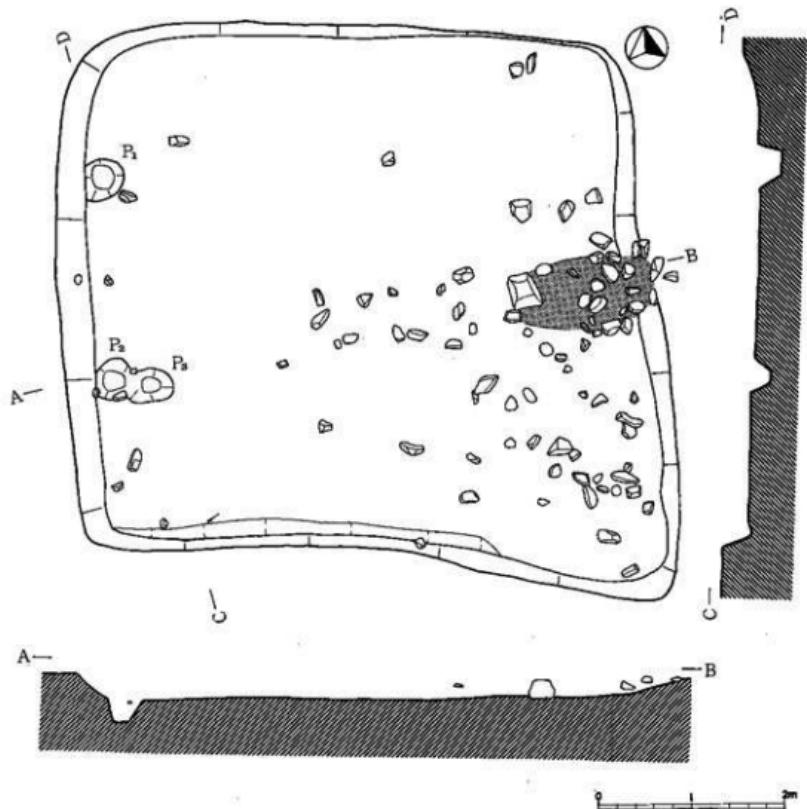
り、他には、柱穴と推定されるピットは発見されなかった。

カマドは、東壁中央に位置し、カマド内には焼土がみられた。カマドの石は崩れた状態でプランは、はっきりしない。石組み粘土カマドである。

遺物は、ほとんどが土師器で他に須恵器、灰釉陶器が特に住居の南東部分に集中して出土している。鉄器も5点あり、紡錘車、ベルトのバックル状のものが出土している。

本址は、出土土器の様相よりIV期に属する。

(堀田貴之)



第20図 第19号住居址

(20) 第20号住居址（第21図）

本址は、調査地の南端、19号住居址の西に位置する。21号住居址と北西隅の一部を切り合っているが、おむね、良好な形で検出できた。

プランは、1辺約4mの隅丸方形を呈し、主軸方向をW-N-Wにとっている。（豊穴住居址）の北半分が粘質ロームに、南半分が小さな角礫まじりで砂質のロームに掘りこまれている。そのため、北壁は直に掘り込まれているが、南壁はやくずれている。壁高は南壁が高く約40cm、北壁は約25cmを測る。床面は非常に良好なかたちで検出された。特に、ピットに囲まれた中央部では、タタキ状の非常に堅緻な床面となっている。周壁付近ではやや軟弱になっている。21号との重複部分にも張り床がわずかに認められた。

カマドは、南壁中央に位置したと考えられるが、原形を留めていない。わずかに拳大の石が10個程あるのみで、焼土は顕著でない。この他に住居中央や北寄りに、6個の石を並べた不規則な施設があり、焼土が認められた。

ピットは、P₁～P₇まで検出したが、P₇を除いて、すり鉢状を呈し、約20cmの掘り込みを持っている。こうち、主柱穴と考えられるものは、東壁に接しているP₁、P₂、それに、カマドの両脇のP₄、P₆であるが、いずれも不整形であり、形がくずれる。

遺物は、いずれも土師器、灰釉の破片であるが、大量に出土している。特に、羽釜は図示できただけでも5個体もある。羽釜は、カマド左脇、P₁付近を中心として主に出土しているが、出土レベルは床面よりかなり高い。この他、P₁隣り床面より、長頸壺が、南壁中央付近より、長胴の甕が、東壁中央と、カマドの左脇から綠釉が出土している。

本址は、Ⅳ期に属する。

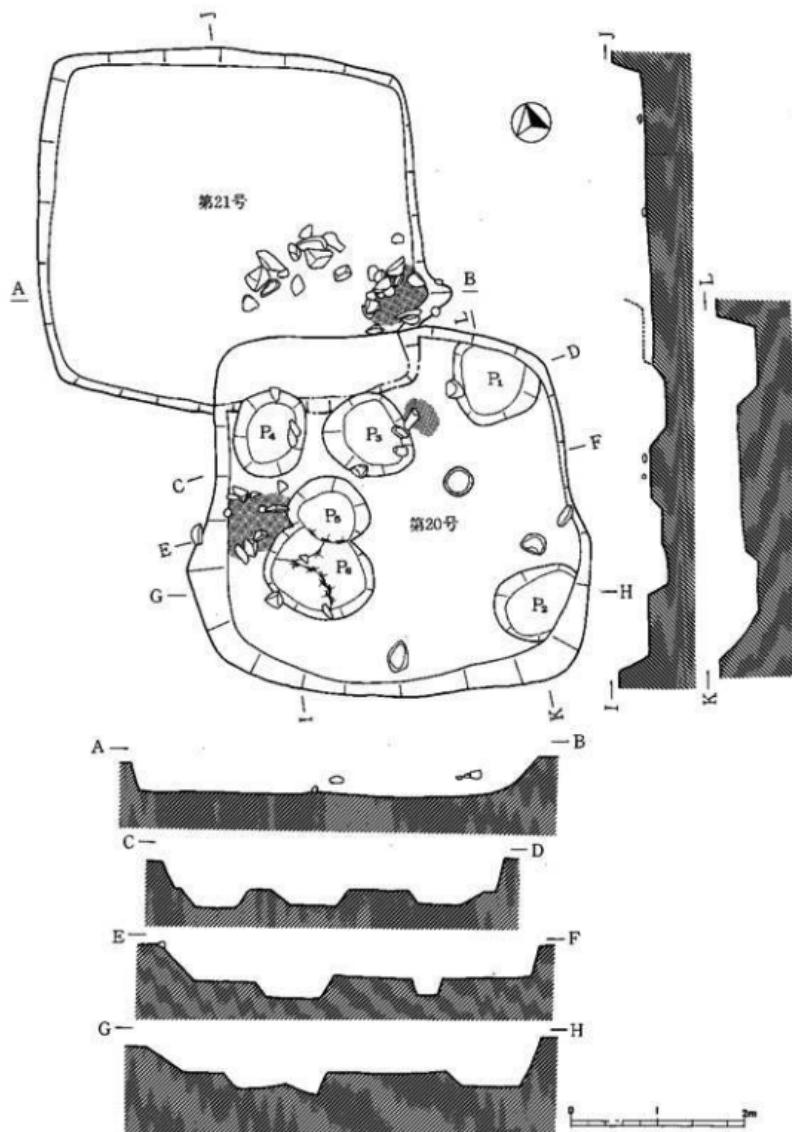
（石上周蔵）

(21) 第21号住居址（第21図）

本址は、調査地の南、20号住居址の北に位置し、一部重複している。検出時に於いては、台形を呈すと思われたが、その後の調査で、長軸4.3m×4.0mのやや長方形を呈す住居址と判明した。掘り込みは直に近く、約30cmの深さを測る。20号住居址よりも、5～10cm程掘り込みが深く20号住を切っているようであるが、重複部分にはリ床がみられ、本住居址の方が古いことがわかる。西半分が角礫まじりのロームに掘られている。

カマドは、東壁のやや南に寄った所に、壁を40cm程掘り込んでつくられているが、カマド石はくずれて原形は留めていない。石組粘土カマドと思われる。焼土はあまり顕著ではないが、焼土だまりがみられた。また、南東コーナー付近には、焼土がよくみられ、長胴甕の破片がみられた。

床面には、ピットは検出されなかった。また床面は平坦であり、やや軟弱である。土壙などの施設もない。検出時に覆土から床面にかけて、拳大から人頭大の河原石がみつかっている。住居廃絶後の所産と考えられる。



第21図 第20、21号住居址

遺物の量はあまり多くない。須恵器土師器を中心として、いずれも破片である。

本址は、II期に属する。

(石上周歲)

(22) 第22号住居址 (第22図)

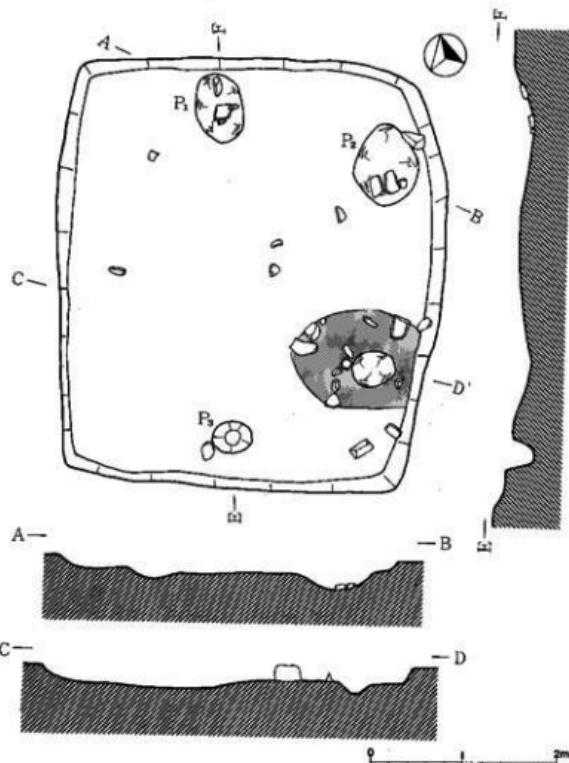
本址は、調査区西側中央に位置し、建物址からは南西にあたる場所に存在する。検出時には、乾燥すると白っぽくなる小円窯混入ロームの中に小円窯混入漆黒土の落ち込みが明確に認められた。覆土は、漆黒色を呈し、2~10cm程度の小円窯がギッシリつまっており、住居址かどうか疑わしいほどであった。

プランは、東壁中央付近に擾乱がみられたが、4.5×4mのやや南北に長い隅丸方形を呈している。壁は、西側がしっかりと残っている。しかし小円窯混入ロームを掘りこんだため、壁ぎわは崩れやすかった。

床については、南東コーナー付近がやや高く、中央部がやや凹んでいた。小円窯混入ローム層の上に2~3mm程度の堅い砂層の面がみられ、それが本来の床と考えられる。堅い砂質の床面は西壁中央付近に主として観察された。

ピットはP₁~P₃がある。P₁は0.9×0.7mと南北に長く、グラグラとした掘り込みで底には扁平な円窯が3つ並んでいた。P₂もグラグラとした掘り込みで、角窯がはいり込んでいた。P₃は0.3mの円形で底は平らであり柱穴と考えてよいだろう。

カマドは東壁際中央



第22図 第22号住居址

やや南よりに設置され、規模は 1.3×0.9 mである。中央部は40cm程度すり鉢状に凹んでいた。なおカマドのやや北東端の石の上に白色の粘土がのっていた。

遺物は、カマドを中心として土師器、灰釉陶器が出土し、鉄器としては刀子の出土がみられた。
本址は、IV期であった。

(大竹庄司)

(23) 第23号住居址 (第23図)

本址は、第1号建物址より南西約28mに位置しており、29号址と重複している。

プランは、南側が調査地区外のため、判然としないが一辺4mの隅丸方形と推定される。なお北側にわずかではあるが突出が見られる。主軸は、ほぼ東西方向と一致する。

掘り込み面は砂利混入ローム層である。

壁は北壁と西壁が残存し、西壁ははっきりとした状態では検出されなかった。東壁は29号址と重複のため明確さを欠く。壁の掘り込みは北壁がほぼ垂直であるが、西壁は北側が、角度のある傾斜となっている。西壁の壁高は30cmであるが、はっきりした状態では検出できなかった。北壁は28cmである。

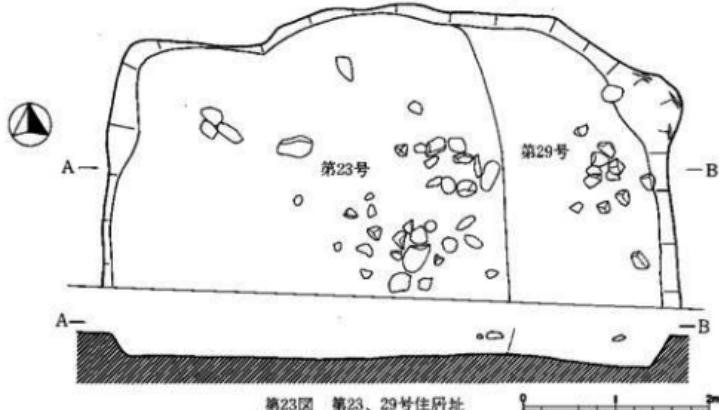
床面は、ところどころに起状が見られるが、全体的には平坦で北側に向かってなだらかに傾斜している。床の状態は粘土状のロームで硬く、きわめて良好な状態で遺存する。

カマドは、東側に位置する集石部分で、これは周囲に $2\text{cm} \times 1\text{cm}$ 程度の炭化物が多数出土したことによっても裏付けられる。なお柱穴は確認されなかった。

この住居では、完形品の遺物が多数出土したが、その大半は床面よりやや浮いた状態での出土であった。29号址との新旧関係は、床の状態、遺物の観察から、29号址が古く、23号址が新しいと考えられる。

本址は、IV期に属する。

(堀田直人)



(24) 第24号住居址 (第24図)

本址は、第1号建物址から南西約15mに位置する。調査区域での中央部分に当たる。

プランは、一辺約4.5mの隅丸方形で、西壁の南端に突出部分が見られる。掘り込み面は、ローム層である。なお南側は28号址と接する。

北壁と西壁が残存し、共にはっきりとした状態では検出されなかった。東壁は、南端付近で一部残存するものの、ほとんど壁と呼べる状態では遺存せず、掘り込みは浅い。南壁は28号址と接するためはっきりとは残存していない。壁の掘り込みは北壁の西半分、西壁の北半分では垂直であったが、残りの半分は共に角度のある傾斜となっている。壁高は、北壁の西半分、西壁の北半分で18cm、残りの部分は西壁で23cmから27cm、北壁で3cmから7cmである。

床は北壁の西半分、西壁の北半分で囲まれる部分はローム層で堅く、平滑な床であるが、残りの部分は前述の部分の床に比べて10cmから20cm落ち込み、床らしきものは存在せず、ロームの混入した茶褐色土であった。この部分は起状が激しかった。

カマドは、西壁中央部分に設置されたと思われるが、わずかに西壁中央に集石が見られるのみで、焼土、炭化物などは出

土せず、その規模等明

確さを欠いている。

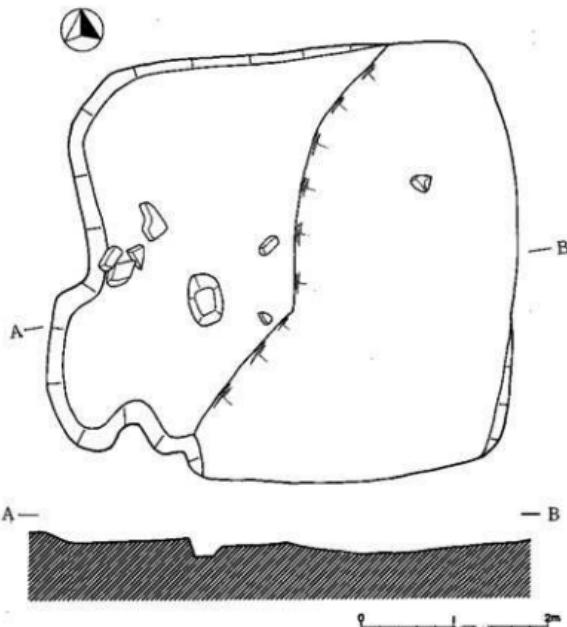
中央付近に見られる
落ち込みは貯蔵穴とも
推定されるが、はっきり
しない。

本址では遺物はほと
んど出土しなかったが、
ただ中央部から用途不
明の鉄製品が出土して
いる。

本址は、Ⅱ期に属する。
明の鉄製品が出土して
いる。

本址は、Ⅳ期に属す
る住居址である。

(堀田直人)



第24図 第24号住居址

(25) 第25号住居址（第25図）

本址は、調査区内のほぼ中央に位置している。住居址の西側には第28号住居址がすぐ隣接しているために壁部が薄く軟弱になっており、ロームによって若干貼られた形跡がみられる。この西壁だけがやや崩れているが、残りの壁が明瞭な掘り込みで遺存されているためプランは容易に把握できた。北側から北東隅にかけて第26号住居址が重複しており、明らかに本址が後者を掘り込んでいる。このため新旧関係は、本址が新、26号址が旧といえる。

住居址のプランは、南側から東側にかけてやや張り出しの感があるが、ほぼ隅丸の方形を呈し、南北4.2m、東西4.0mを測る。壁高は、南壁と東壁が15cm、北壁は第26号住居址をさらに掘り込んでいたため5cm余りを残すのみであり、いずれもほぼ垂直に立ち上がっているが、西壁は起伏が激しくこの中間値を示す。床はローム面上に構築され、東から西へ向って緩やかに傾斜している。中央から東側が概して平坦堅密な良好面なのに対し、西壁付近は起伏が著しく、このまま生活面に用いられた可能性は薄い。周溝としては南東隅に唯一3cmほどの深さをもつものが不明瞭ではあるが存在し、これがちょうど壁の張り出し部と一致しているため何らかの意味があったことは明らかと考えられる。ピットは東壁近くに擂鉢状の浅いものが穿たれていたが、土柱穴等は確認できなかった。カマドは東壁中央に礫を積んで構築された石組み粘土カマドで、石組みの崩れが激しく、炭化物、焼土、灰もそこを中心に住居址中央部から北側にかけてかなり散在していた。カマド付近からは銅鏡をはじめ土器片が多数出土している。

本址の覆土は上部に土層の乱れはほとんどみられなかつたが、床面上10cm位に拳大の中疊からなる集石層が東側を中心に分布しており、これは投げ込みというより流れ込みの感が強い。その下位は灰を混入する茶褐色土層が床面まで追えた。

本址は、IV期に属する住居址である。

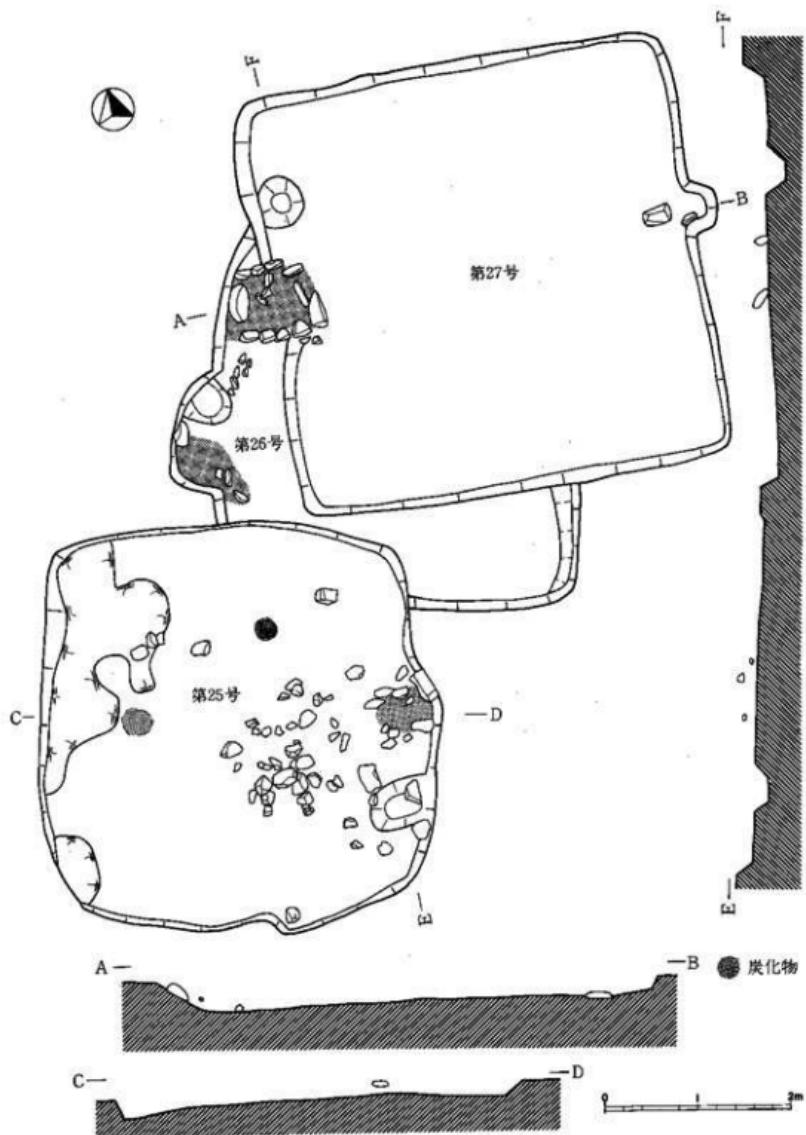
（鳥羽嘉彦）

(26) 第26号住居址（第25図）

第25号住居址と第27号住居址が本址のほぼ中央で接するように重複しているため、北西隅と南東隅のみを残存している。接線部にわずかに残る高まりの床面が両址とわずかに比高をもつことと、対角線の隅およびカマドが良好に残っていたことが幸いして、かろうじて遺存している。

プランは、4.0×3.0mのやや不定形な隅丸方形を呈し、主軸は東西方向である。壁高は南東隅が15cm、北西隅が10cmを測り残りは不明である。ロームをほぼ垂直に掘り込んでいるが、壁面は概して軟弱である。

床面は若干の起伏がみられる部分もあるが、全体的には水平な平坦面である。床の状態は余り堅密ではない。床面の高さを比較すると、中央接線部分で第25号住居址が5cm、第27号住居址が20cmそれぞれ本址より低い。両址の落ち込みプランが明瞭であることから第25号住居址と第27号住居址がそれぞれ本址を掘り込んでいると思われる。従って、これらの住居址との新旧関係は、



第25図 第25、26、27号住居址

本址が最も古いことになる。周溝は東壁沿いに深さ約6cmのものがきれいに掘られていたが、全周するものとは看取されなかった。

ピットは、カマドの北隣りに深さ15cmの擂鉢状に穿れたものが検出されただけで、主柱穴は確認できなかった。

カマドは石組み粘土カマドで、西壁中央に壁をわずかに抉り込んで設けられている。礎はほとんど崩れカマドの原型をとどめていないが、カマド内部、特に焚口付近には焼土の堆積が著しい。本址は、II期と考えられる。

(鳥羽嘉彦)

(27) 第27号住居址 (第25図)

本址は、調査区の中央、即ち建物址のすぐ南側に位置する。南側の第26号住居址とは重複しており、後者を深く掘り込んで構築されている。削平時にローム層面に黒褐色土の落ち込みが明瞭に認められたため、本址の存在は容易に把握できた。

プランは、東西の中央部がそれぞれ凸状にやや抉りられている方形を呈し、南北4.6m、東西4.7mの規模を有する。壁は全周にわたって非常に遺存状態が良く、壁の掘り込みは各壁とも垂直に近い。壁高は、北壁と西壁が20cm、東壁が22cm、南壁は東側遺構検出面とか29cm、西側第26号住居址床面とか19cmを測る。

床面は、ローム面で、中央やや東寄りの部分が若干高くなっているが、全体的には平坦をなし、堅緻な良好面である。床面には多少、円礎（小砂利）層が浮き出ているが、これが当時の生活面なのか、あるいは精査時の削り過ぎなのかは明瞭ではない。しかしいずれにしてもこのレベルまで掘り下げることは礎層の存在により回避されることであり、掘り下げの規制とそれに相反してわざわざ深く掘ったこととの矛盾が注目される。

ピットはカマドの右脇に1個確認されただけで、口径55cm、深さ20cm、擂鉢状を呈する。用途途は不明である。

カマドは石組み粘土カマドで西壁中央部にやや抉り込んで構築されている。間口80cm、奥行100cmを測り、礎の石組みは良好に遺存されていた。焼土はカマド内部、焚口、さらに住居址内部床面上まで広く堆積しており、特にカマド内部では14cmの厚さを計る。

本址は、今回調査された住居址中、最も遺存状態の良い住居址の一つであった。

26号址との新旧関係は、27号址が新、26号址が旧である。

本址は、II期に属する。

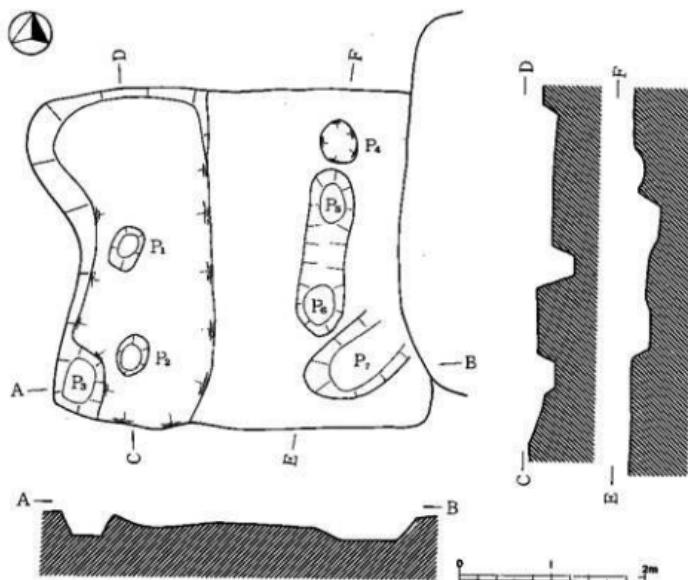
(鳥羽嘉彦)

(28) 第28号住居址 (第28図)

本址は、建物址群の南にあり、北に第24号址、東に第25号址と接する。大幅な擾乱のため、プランははっきりしないが、およそ南北3.7m、東西4.0mの不整方形を呈するものと推定された。壁は西・北壁が確認できたのみで、他の部分は破壊されてしまっていた。掘り込み面は、ローム層であり、北壁はほぼ垂直であるが、西壁は角度のある傾斜をなしている。壁高は、北壁10cm、西壁20cmである。床面は、ローム層上にあり、全面にわたってピット状の掘り込みがあり、起伏の激しい床となっている。ピットも数ヶ所検出されているが、床面が荒れているため、柱穴、貯蔵穴として確認することはできなかった。また、カマドについても検出することができなかった。

本址は、所属時期不明。

(畠田直人)



第26図 第28号住居址

(29) 第29号住居址（第23図）

本址は、第1号建物址より南西に14mに位置し、小豎穴群の南にある。

プランは、南側が土盛によって調査不能のためはっきりしないが、一辺4mの隅丸方形と推定される。なお東壁の北端に一部突出が見られ、西側は23号址と重複している。

壁は、北壁と東壁が残存し、北壁は、はっきりしているが、東壁は前述の突出部分があまりはっきりしない。西壁は23号址に切られ、南壁は土盛の中に隠れて確認できなかった。壁の掘り込みは、北壁は、ほぼ垂直であるが、東壁はなだらかに傾斜している。壁高は北壁が23cm、東壁は突出の付近でやや低くなるが、ほぼ19cmである。

床面は、砂利を多数含むローム層で、多少起伏はあるもののほぼ水平である。軟弱で、余り踏み固められていない。

カマドは、中央部分の集石付近から微量の炭化物が集中的に出土しているので、この部分が想定される。しかし、破壊が著しくこと詳細は判然としない。第23号址との新旧関係は、本址が旧、23号址が新で、本址は、IV期に属する。

（堀田直人）

(30) 第30号住居址（第13図）

本址は、調査区域の東南に位置し、第11・13・65号住居址と重複している。

プランは、東西5.6m、南北4.0mの隅丸長形を呈する。主軸は南北を指す。壁はローム層をほぼ垂直に掘り込んでいるが、東壁と南壁の一部が、それぞれ第11号住居址、第65号住居址に切られていて残存しない。壁高は北壁で18~24cm、西壁で6~11cm、南壁の残存分が6cmを測る。床はローム面をそのまま用いており、起伏がみられ、11、65号址と比較した場合、やや小石が混入する。ピットは、東北隅に一ヶ所確認されている。規模は、80×60、-11cmで垂直に掘り込まれている。他にピットは確認されなかつたが、柱穴と考えてよいだろう。カマドは北壁中央や西よりに位置している。石組み粘土カマドである。石組が比較的良好に残存しており、間口60cm、奥行き70cmを測ることができる。カマド内には支柱石が残されている。本址からはカマドのすぐ東より微量の骨片が出土し柱日された。

本址は、第11・13・65号住居址の中では最も古く、IV期に属する。

（小嶋秀典）

(31) 第31号住居址（第18図）

本址は、発掘Xの中央よりやや東側に位置しており、第16号住居址と一部重複している。遺構検出面での黒褐色土の落ち込みが明瞭であったため、住居址の存在は当初から容易に把握されていたが、第16号住居址の床面が緩やかに東へ傾斜していたことと、覆土に明瞭な区別がつかなかつたことから両址の重複関係が掘り込みなのか貼床なのかが最後まで把えにくく、そのためにプランの確認が遅れた。

南壁西側が、後から構築された第16号住居址によって抉られており、また貼床の下に検出された西壁に不明瞭な部分があるためにプランは明確ではない。しかし残存壁の存り方より推して平面形態は隅丸方形を呈し、南北5.0m、東西4.6mの規模を有すると想われる。

床面は、よく踏み固められた堅緻なローム面で、中央が低く壁へ向って徐々に高くなるといった断面皿状の形状を示す。ピットはP₁ (-34)、P₂ (-25)、P₃ (-21)、P₄ (-31)が検出され、このうち主柱穴はP₂、P₃、P₄が該当すると思われるが、位置的に推定される残りの主柱穴については確認されなかった。本址の床面からは特に鉄滓の固まりが所々から出土しているのが注目され、このことは本址が鐵治的な役割をもつ住居址であることを示唆するものかもしれない。

壁は西壁が第16号住居址面とが10cm、遺構検出面とか18cmの壁高を計り、また残りの壁はすべて20~25cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。一部軟弱な部分が見受けられるが全体的に堅緻なローム面である。

カマドは石組み粘土カマドで、東壁中央部に構築されている。石組みは散在しており遺存状態は悪く、また焼土等付随物も著しくなかった。

16号址との新旧関係は、本址が古く、16号址が新と思われる。

本址は、II期に属する。

(鳥羽嘉彦)

(32) 第32号住居址 (第14回)

本址は、調査区内の建物址群より東へ約6mに位置し、住居址群中最も内奥に存在する。一部第12号址と重複する。プランは、一辺約4.2mの隅丸方形を呈している。砂利混りのローム層を掘り込んでおり、東壁、南壁、西壁は残存するが、北壁は、第12号住居址内によって切られておりはっきりしない。壁高は東壁で約20cm、南壁16cm、西壁20cmであり、壁高にはそれほど差がない。掘り込みは、立ち上りが鋭く良好。

床は中央部分が若干高く、壁寄りが低日である。西側半分は砂利を大量に含んだロームとなっている。東側は、きれいなロームで良く踏み固められている。

東壁中央よりやや西側にある集石が、カマドと考えられる。50×70cmの範囲に焼土が見られたが崩れた状態のためカマドの大きさ等は、明確さを欠く。

ピット等は確認されなかつたが、南西隅にははっきりしない落ち込みがみられた。床の状態から何らかの擾乱によるものと考えられる。柱穴は発見されていない。

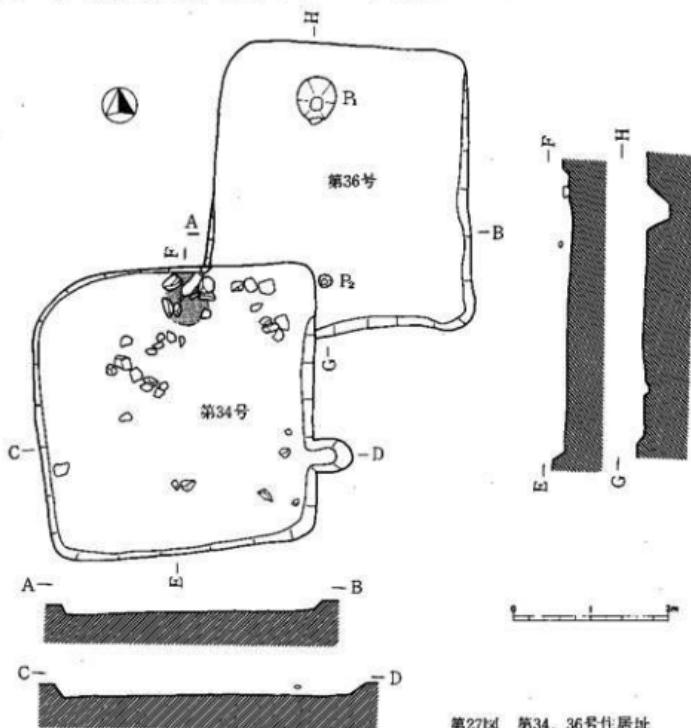
本址からは、床面全面にわたって10cm~20cm浮いた状態でかなりの礫が発見された。住居廃棄後何らかの形で投げ込まれたものと考えられる。

第12号址との新旧関係は、本址が新、12号址が旧と推定されている。本址は、IV期に該当しよう。

(山崎敬二)

(33) 第33号住居址 (第16図)

本址は、主要調査区域の北東端に位置し、第14号住居址の西、第59号住居址の南に位置し、第59号住居址と北側部分が重複する。第14号住居址同様この区域は搅乱が激しく、又調査区域の端であるため全面が発掘調査されたわけではなく、住居址の北半分が調査されたにすぎない。壁も西壁の一部が確認されただけである。したがって住居址のプランは、推定の域を出ないが、東西3.2m、南北3.6mの隅丸長形と考えられる。壁は砂利混りのローム層を掘り込んでいるが、東壁北壁は確認できなかった。南壁は未調査区域に存在すると思われる。床は全体的に平坦であるが部分的には起伏がみられる。床面の状態は良好とは言い難く、砂利混りのローム層上に床となる何らかが構築されていたものと思われる。ピットはカマドのすぐ南に1ヶ所発見された。大きさは50×50cm、-16cmである。カマドのすぐ近くにある貯蔵穴と考えられる。他に柱穴と考えられるピット、落ち込みは見あたらなかった。カマドは西壁をわずかにえぐり込むように、構築されている。保存状態は比較的良好で、間口60cm、奥行き80cmで内部がやくばんでいる。さら



第27図 第34、36号住居址

に焼土の堆積もみられた。石組み粘土カマドである。

第59号址との新旧関係は、第33号址が古く、第59号址が新しい。

本址は、出土土器の様相からII期に属する。

(小嶋秀典)

(34) 第34号住居址 (第27図)

本址は、第3号建物址の北側約9m、第18号住居址の北側2mに位置し、第36号址と重複する。

プランは、南北3.7m、東西3.5mのやや不整の隅丸方形を呈する。主軸はほぼ南北方向と一致する。壁はローム層を掘り込んでいる。壁高は、北壁17cm、東壁18cm、南壁19cm、西壁17cmと壁間にほど差がない。垂直にきれいに掘り込まれていて。床はローム層上に構築され、全般的に平坦で良好に残存している。カマド周辺、特に北東隅床上に礫がみられる。東壁の中央からやや南寄りに40cm×50cmの突出がみられる。カマドは、石組み粘土カマドが北壁のほぼ中央に、北壁をえぐり込むように設置されている。カマドの大きさは、間口60cm、奥行65cmで比較的良好に残存していた。カマドの焚口付近を中心として焼土がみられた。柱穴・貯蔵穴と考えられるピットは確認されなかった。

第36号址との新旧関係は、第36号址が古く、本址が新しい。

本址は、出土土器の様相から、III期に属すると考えられる。

(堀田貴之)

(35) 第35号住居址 (第28図)

本址は、調査区の南東寄りに位置し、第8号住居址の東に確認された。

プランは擾乱の為はっきりせず、壁は全く残っていない。ただ、床が集石を中心として径1~2mの範囲でよく残っているため住居址と推定した。床面は、東西3.4m、南北3mで楕円形を呈し、ローム層が平らに堅く踏み固められている。

床の中心には東西2.0m、南北1.5mの楕円の範囲内で、人頭大もしくはそれより少し小さな角礫、円礫が集められている。

柱穴およびカマドは検出されなかつたが、集石のすぐ東には南北に延びる広範囲の焼土東西50cm、南北1mが検出された。また集石を中心として北北東の方角には、床の範囲を少し離れているが直徑7cm、長さ15cmほどの炭化材が検出された。

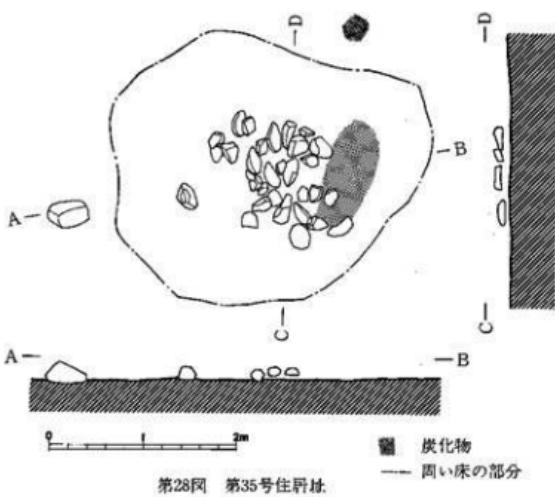
本址は、不明確な住居址であるが、付近から出土した土器から、IV期と考えられる。

(前田清彦)

(36) 第36号住居址 (第27図)

本址は、建物址群の北方にあり、今回調査された地域では北端地区に発見された住居址である。また南西部分は第34号住居址と重複している。

プランは、一辺3.3mの隅丸方形を呈する。壁は、ローム層をほぼ垂直に掘り込んでいるが、北



第28図 第35号住居址

壁の全部と西壁の北半分は自然地形の傾斜により消失している。残存部分から壁高をみると南壁13cm、東壁8cmである。

床はローム層上に構築され、堅緻な部分はみられないが、比較的良好な状態で、北へわずかに傾斜している。

本址は、カマドと考えられる集石及びカマドに伴う廃土、炭化物等は発見されなかった。

ピットはP₁(60×50-29)、P₂(18×18-5.5)の2つがあるが柱穴か否かは断じ難い。

遺物等の出土はまったくなく、本址がいずれの時期に属するかは、はっきりしない。しかし、第34号址との重複部分のカマドを破壊していないことから少くとも第34号址よりも古く位置づけられることは間違いない。

本址の所属時期は不明である。

(鶴田貴之)

(37) 第37号住居址（第29図）

本址は、発掘区の北西に位置する。本址の北側には第48号住居址が存し、第57号住居址が東側にある。これらと本址との間には重複関係がない。一方、本址の南西部は隣接する第38号住居址によって切られており、南東部には第50号住居址の貼り床が残存している。従って、本址と第38号住居址・第50号住居址との間には、37号住→38・50号住という前後関係が成り立つ。

本址のプランは、長径4.6m(南北軸) 短径4.4mの隅丸方形である。住居址の面積は調査区内の全住居址との比較において中位よりやや大きい程度というところであろう。壁は第38号住居址との重複部を除いて良好に残存しており、全体に確認面に向かって垂直に立ち上がっている。確認面と床面との比高差は北壁中央部10cm・東壁同13cm・南壁同13cm・西壁同約10cmを有する。床面は壁際において緩やかな傾斜をもちながら若干高くなっているほかは中央部を主として全体にはほぼ平坦である。第38号住居址重複部にみられる高まりは床面精査の不手際にによるものであろう。堅緻なカマドは検出されなかったが、西壁やや南寄りに分布する砾の密度の高さから該地に設置されていたものと考えられる。おそらく第38号住居址建築の際に破壊されたのであろう。柱穴お

より周溝は検出されなかった。

出土遺物は覆土中のものを含めると土器を中心としてかなりの点数にならうが、床面直上のものに限定するならば土師器と須恵器を合わせて8点である。覆土中ではあるが、南壁中央やや北寄りから25cm床面から18cmほど浮いた地点で砥石が出土している。

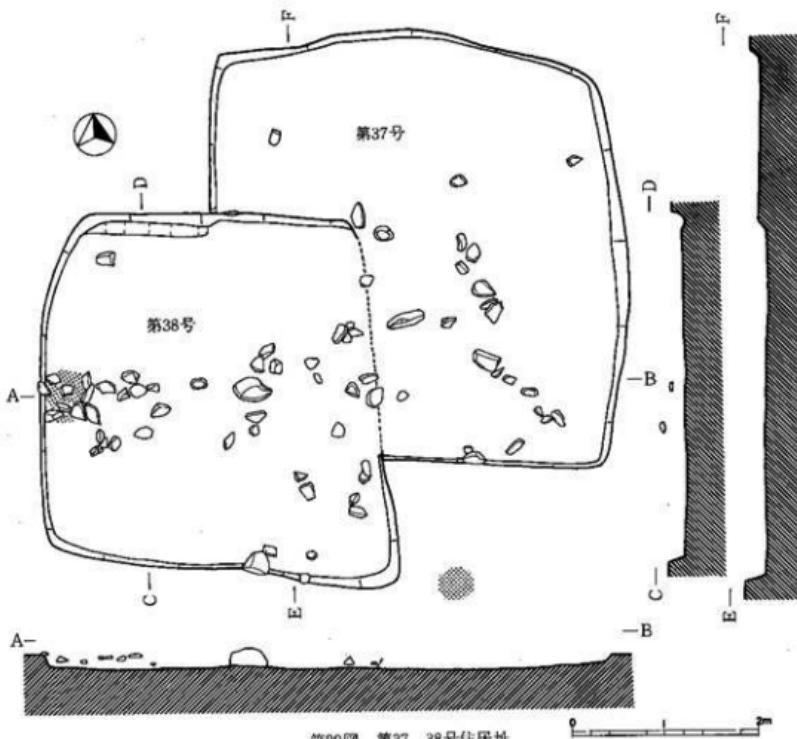
床面直上の遺物から比定して、本址は、IV期のものであろう。

(平林 彰)

(38) 第38号住居址 (第29図)

本址は、第39号住居址の東北東に位置し、東北部において第37号住居址と重複している。(重複関係については第37号住居址の項を参照されたい)

平面形は東南コーナーに若干出張りはみられるものの、全体として隅丸方形を呈する。長径は南北方向3.78mで、短径は3.68mを計る。規模は隣接する第37号住居址より一周り小さい。壁は第37号住居址との重複部を除いて良く残存している。四辺ともに確認面に向かって垂直に立ち上



第29図 第37、38号住居址

がっている。確認面と床面との比高は北壁中央やや西寄りで15cm（但し、ここでは確認面と周溝底との比高値を計測した）・東壁中央やや南寄りで15.5cm・南壁中央部12cm・西壁中央部17cmを有する。床面は一様に平坦である。周溝は北壁下西側にみられる。長さ130cm最大巾14cm深さ5cmの小規模なもので、周溝内には特別な施設はみあたらない。カマドは西壁中央部に位置する。投棄されたかのように見える21個の碟が、該部に楕円形を描くかのように配列されている。碟の大きさは径10cm大から長径30cm大までのものが主体を占め、形状は角碟のものが多い。楕円形の配列内および周囲には粘土や焼土の堆積はみられない。柱穴は検出されなかった。

床面直上土器は土師器・須恵器合わせて5点である。カマド付近から出土した3点の土器についても注意する必要がある。土器以外では、住居址中央やや東寄りの床面直上から長径40cmを超える碟が出土した。他の碟に比して飛び抜けて大きく床面中央近くから出土している点を考え合わせると、あるいは本址と何らかの関わりをもっているのかもしれない。

床面直上の遺物から、本址は、Ⅲ期に比定される。

（平林 彰）

⑨ 第39号住居址（第30図）

本址は、調査区の北西、第49号住居址の南約10mに位置し今回の調査区の最も西側部分に発見された住居の一つである。

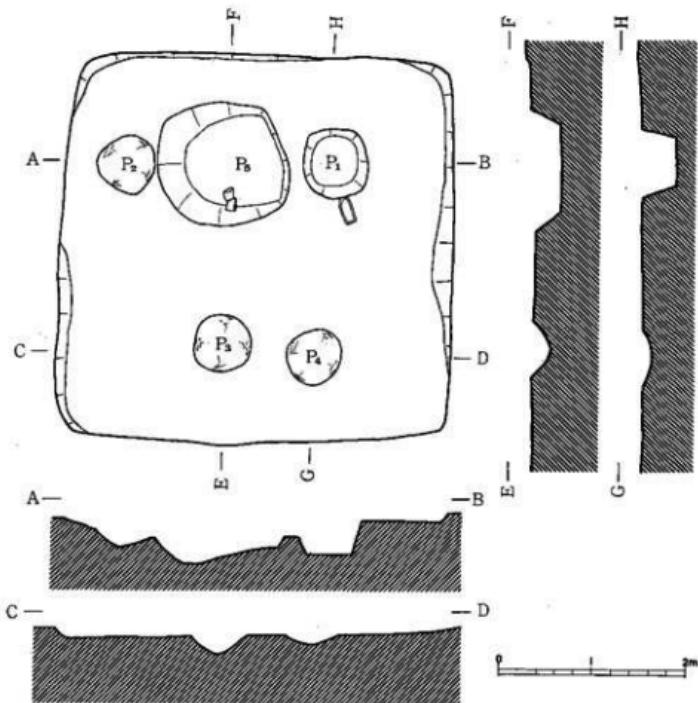
砂利層を掘り込んで構築され、覆土は暗黒色の砂利混り層であった。プランは、一辺4mの隅丸方形である。壁は東壁が若干確認できる程度で、他は不明瞭である。これは、本址が暗黒色の砂利混り層から掘り込まれているため、検出時の削平と、その後の崩れによるためと考えられる。

床面は、砂利混り層上にあり、起伏が激しい。踏み固められた部分もなく、不良な床面である。ピットは、P₁ (50×50) P₂ (50×50) P₃ (50×50) P₄ (50×50) P₅ (90×90) の5個ある。しかし、いずれも、砂利層のためかはっきりした落ち込みとは言えず、柱穴・貯蔵穴等との性格は明確にし難かった。また、本址からは、焼土石組み等カマドを推定させるものは検出されなかった。いずれにしても、性格が不明確な住居址ではあるが、所属時期は、Ⅳ期に該当するものであろう。

（金子順一）

⑩ 第40号住居址（第38図）

本址は、58、64号住居址を切る形で重複し検出された住居址である。水田造成時にかなりの搅乱を受けたらしく約1mの壁は検出が困難であり、それは床面よりの想定線である。プランは、南北4.1m、東西4.1mの隅丸方形である。壁高は西壁17cm、南壁6cmを測る。床面は、全体的に平坦であるが、軟弱である。床面には柱穴は検出されなかった。カマドは、何も痕跡はなかったが、おそらく北壁か東壁にあったが搅乱時に破壊されてしまったものと思われる。北西コーナーには155×117cm、深さ14cmのピットが検出された。ピットには貼床がないので住居址に付属したものと思われる。



第30図 第39号住居址

本址の所属時期は、不明である。

(島田哲男)

(4) 第41号住居址 (第31図)

本址は、建物址群のすぐ北に接し、42号址と重複している。調査時42号址と重複している部分は、壁、床面とも検出できなかった。このため西壁と北・南壁の一部、そして床が遺存するのみという性格の判然としない住居址である。

住居の掘り込み面は、ローム層であり、床面もローム上に構築されている。プランは、遺存している部分から推定すれば、一辶2.8m前後のやや不整な方形であったと思われる。壁は、遺存状態の良い西側で16cmを測り、掘り込みは傾斜を呈し余り良好とはいえない。床面はほぼ平坦であり、特に堅緻な部分もなく、軟弱でもない。床から10~15cm前後浮いて15×45cmの大きなものから拳大の小さなものまでの礫が南西隅を中心として散在し、その一部は42号址の上面にまで及ん

でいる。規則的な在り方でもないが、カマドに使用された礫が崩れた可能性も考えられる。この他の施設、柱穴、周溝、そして明確なカマドは検出されなかった。

42号址との新旧関係は、調査時には明確にし得なかったが、出土土器の検討から、42号址が古く、本址が後続するものと分かった。

本址の所属時期は不明である。

(小林康男)

(42) 第42号住居址 (第31図)

本址は、建物址群のすぐ北に接して存し、最も内奥に位置する住居の一つである。西辺の一部を第41号址と重複し、また、北側は第43号址と重なる。

掘り込み面は、ローム層であり、覆土は褐色土であったため、かなり明瞭に落ち込みは検出できた。プランは、南北4.6m、東西4.2mの隅丸方形を呈するが、北側部分は第43号址との切り合いのため不整形となっている。壁は、四周とも良く遺存し、それぞれ立ち上りは垂直に近い。壁高は、東壁22cm、西壁17cm、南壁11cm、北壁23cmで、他住居址との切り合い部分は低くなっている。床面は、砂利混入のローム層上に構築され、起伏が多く、概して軟弱であるが、東壁寄りの部分、カマド前面は幾分堅密となっている。床上には、中央や西北寄りに30×20cmの礫が遺存するほかはこれといった施設もない。カマドは、東壁中央に設置され、カマドに使用された礫が5個残存している。間口65cm、奥行70cmを測る。石組み粘土カマドであろう。

本址は、遺物からⅠ期に属し、第41、43号址に先行するものと推定される。

(小林康男)

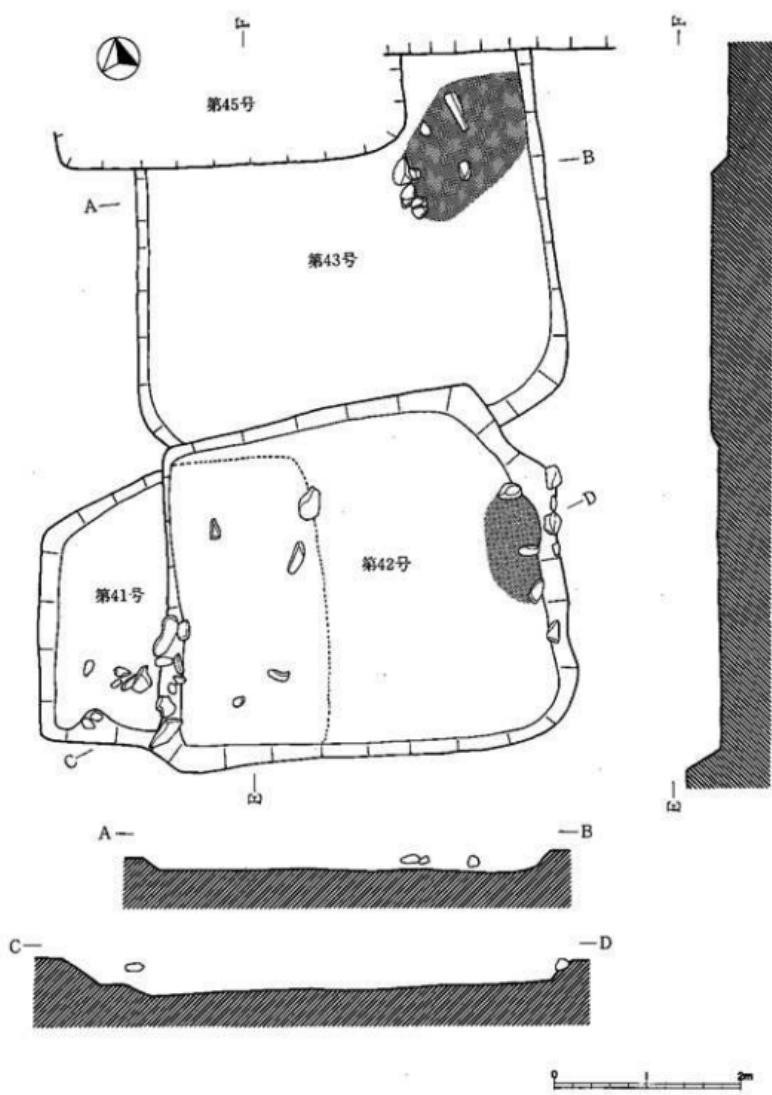
(43) 第43号住居址 (第31図)

本址は、建物址群の北方にあり、第42号、45号、46号址と重複する。多数の住居址との重複により、その性格を知ることは非常に困難であった。

プランは、その大半を第42号址と切り合っているため、今ひとつ明確さを欠くが、およそ南北3.6m、東西3.5~4.5mの不整方形を呈する。壁は、東・西面と南壁の一部を残し、掘り込み面は砂利混入ローム層であった。壁面は垂直に掘られ、壁高は、東壁17cm、西壁13cm、南壁9cmである。床面は、砂利混入ローム層中に構築され、ほぼ平滑を示す。カマドは、東北隅に設置されており、右側の袖石が比較的良く残っている。間口50cm、奥行120cmで、壁外に抉り込むようにして作られている。カマド内には、焼土がかなり大量に認められた。

第42・45・46号址との新旧関係は、第42号址を切り、第45・46号址に切られる形となっており、したがって、第42号址より新しく、第45・46号址より古く位置づけられる。本址は、Ⅰ期に属する。

(小林康男)



第31圖 第41、42、43號住居址

(44) 第44号住居址（第32図）

本址は、調査地域の北側にあり、一部第45号址と重複する。北側が調査中の廃土置き場となつたためその北側半分は未調査に終わった。

プランは、東西約6mほどであるので、この位の規模の方形を呈するものであろう。掘り込み面は砂利層である。壁は、南・西壁のそれぞれ一部が検出されたにとどまるが、高さは南壁20cm、西壁21cmで、掘り込みはほぼ垂直で良好である。床面は、砂利面上にあり、起伏が激しく、堅硬なよく踏み固められた床面とはなっていない。ピットは、2ヶ所検出され、P₁は75×52cm、深さ7cm、P₂は木樋のためはっきりしないが貯蔵穴的な大きなものである。壁ぎわには数個の疊が認められたが、カマド石とは異なるようである。調査範囲内からは、カマドの検出はなかった。

第45号址との新旧関係は、本址が古く、第45号址が新しくなる。本址は、Ⅲ期に属する。

（小林康男）

(45) 第45号住居址（第32図）

本址は、建物址群の北側にあり、西側を第44号址と、東側は第46号址、そして南側は第43号址とそれぞれ重複する。

本址の所在する部分は、多数の住居址が重複し、極めて複雑な様相を呈し、プラン、出土遺物の帰属性住居址など判断に苦しむことが多かった。本址のプランは、一辺4m前後の方形を呈するものと考えられる。壁は、南・西壁および東壁の一部が遺存するが、掘り込み面が砂利層のためやや傾斜を有する。壁高は、西壁20cmと高いが、南壁は本43号址と重複のため16cmとやや低くなっている。床面は、砂利層上のため堅硬とは言い難いが、ほぼ平坦である。調査時には、カマドを推定させる焼土、粘土、石組み等は検出できなかった。また、柱穴も同様見当らない。

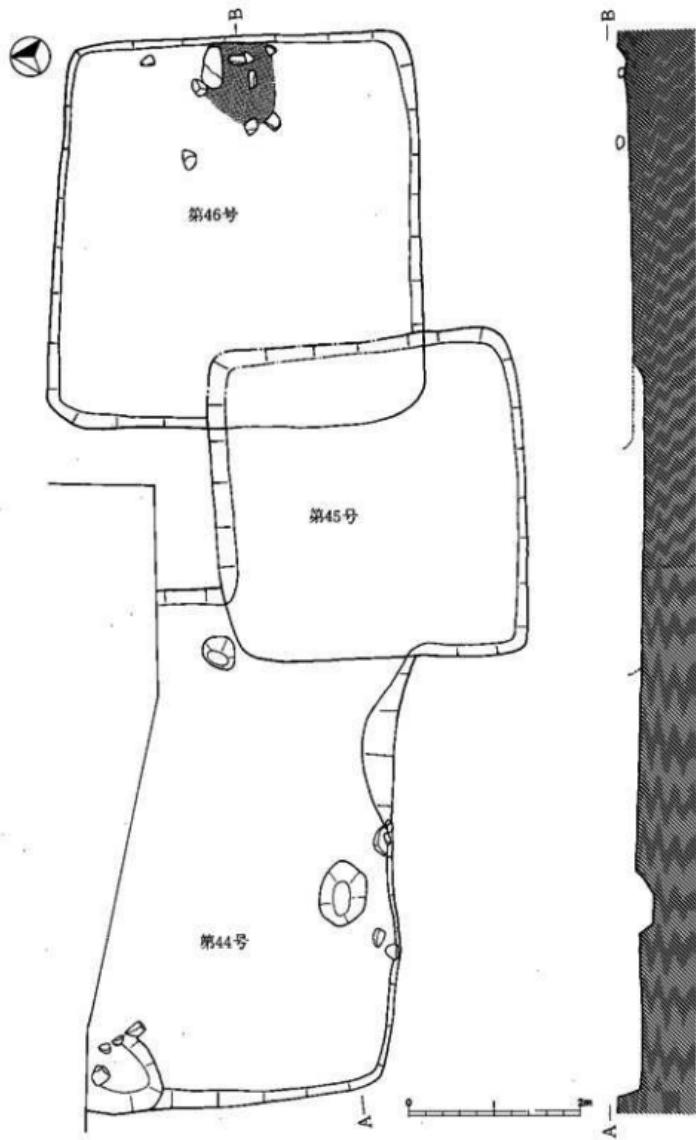
本址は、第43号および第44号址を切り、また第46号址によって切られており、これら住居址との新旧関係は、第43・44号址よりも新しく、第46号址よりも古いということになる。本址は、所属時期ははっきりしない。

（小林康男）

(46) 第46号住居址（第32図）

本址は、建物址群の北方にあり、第45号址を切る形で重複している。

プランは、南北4.1m、東西もおよそ4.1m前後の隅丸方形と考えられるが、西壁が第45号址と重複していて遺存せず、明確さを欠いている。掘り込み面は、砂利層である。壁は、西壁を除き残存し、砂利層を掘り込んでいるため、掘り込みは傾斜を示す。壁高は、東壁14cm、北壁12cm、南壁14cmで、概して低い。床面は、砂利層にあるので平坦ではあるが、堅硬ではない。カマドは、東壁中央部に設置されており、間口55cm、奥行60cmの規模で、左側袖石（47×24、厚さ13cm）がきれいに残されている。内部から焼土は検出されていない。また、柱穴と考えられるピットは検



第32圖 第44、45、46號住居址

出されていない。

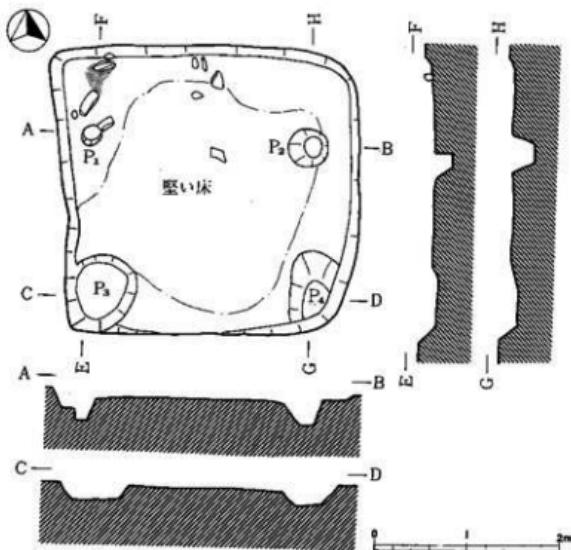
第45号址との新旧関係は、第45号址が旧、本址が新となり、本址は、Ⅲ期に該当する。

(小林康男)

(47) 第47号住居址 (第33図)

本址は、南西側に第47号住居址、南東側に第51号住居址、南側第57号住居址に隣接し、重複関係をもたずにはば完全な状態で検出された。

住居址は、ローム面に切り込んでいる。平面形は北東コーナーに出張りをもった隅丸方形で、径は南北3.03m、東西3.26mを計る。壁はほぼ垂直で良好に残存しているが、南壁中央部にあっては壁高が減じて皆無である。確認面と床面との比高は北壁中央部5.5cm、東壁同5cm、西壁同13.5cmを有する。床面は中央部に踏み固められたように堅緻な面があるが、南西部および北東部になだらかな凸面があり、全体に起伏が目立っている。周溝は検出されなかった。カマドは北西コーナーに有する。該部では床面直上に長環が高密度をもって散在し、付近には焼土の分布がみられた。ピットはP₁(40×42、-16、22×16cm:口径、深さ、底径)、P₂(85×62、-20、38×27cm)、P₃(83×77、-18、61×55cm)、P₄(22×20、-16、16×18)の4本で、形状がそれぞれP₁スリバチ状、P₂不定形、P₃タライ状、P₄横木鉢状と一定しないため、いずれも柱穴としては不適当である。



第33図 第47号住居址

出土土器は8点で、うち4点はカマド付近に集中している。

これらの土器から本址の時期はⅡ期であろう。

(平林 彩)

(48) 第48号住居址 (第34図)

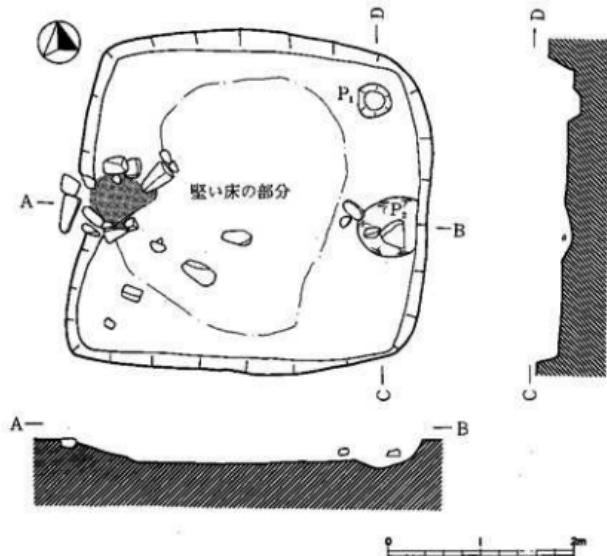
本址は、第37号住居址の南側、第47号住居址の北東側に位置し、他の住居址と重複関係をもない。

平面形は隅丸方形で、南北3.2m、東西3.95mを計る。壁はロームをほぼ垂直に切り込んでいる。東壁の一部は削除され立ち上がりがみられない。確認面と床面との比高は北壁中央部で27cm、南壁中央部で22cmである。床面は一様に水平で、中央部に堅緻な面を留めている。周溝は検出されなかった。カマドは西壁中央部にあり、10cm大~30cm大の角礫や円礫をとり混ぜて袖部を構築している。焚き口部周辺には焼土の堆積がみられたが、袖部の補強および天井部に使用されていたと思われる粘土は確認されなかった。ピットはP₁ (35×35、-14、20×21cm: 口径、深さ、底径)、P₂ (63×63、-10cm) の2本である。位置および形状より主柱穴としては不適当であろう。

床面上出土器は6点である。うち4点はカマド付近から出土した。

これらの土器から本址の時期はII期であろう。

(平林 彰)

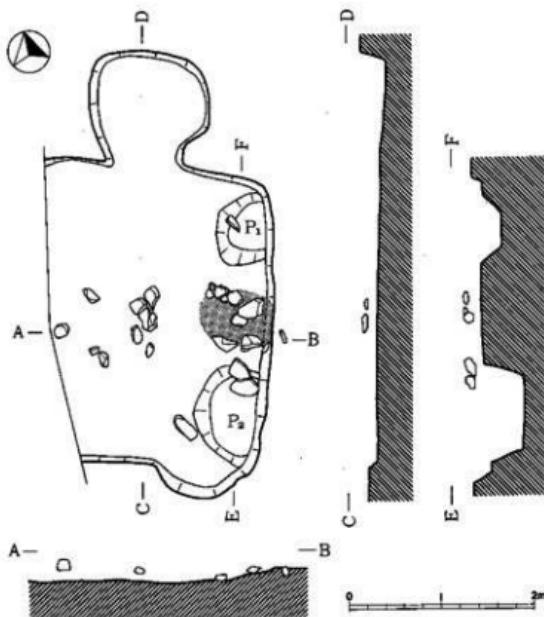


第34図 第48号住居址

(49) 第49号住居址（第35図）

本址は、調査区の北西隅に位置し、南側に第39号住居址、東側に第47号住居址があるが、いずれも20m近く離れており、孤立している。

調査区の関係で住居址西部は完掘していないが、平面形はおよそ方形を呈する。ただし、北壁および南壁に一部張り出し部を有する。南北の径は約3.2mである。壁はロームを深く切り込んでおり、確認面と床面との比高は北壁中央部で12.5cm、東壁中央部で13.5cm、南壁中央部で12.5cmである。床面は水平で、中央部が踏み固められている。周溝は検出されなかった。カマドは東壁中央部に構築されていたと推定されるが、破壊が著しく形状を留めていない。ピットはP₁ (73、-18、53cm: 口径、深さ、底径)、P₂ (105、-20、82cm) の2本であり、いずれも東壁に接している。張り出し部は北壁と南壁に各々1個所検出された。北壁の張り出しは大きく奥行き120cm、幅130cmを有する。張り出し部の床面はなだらかな凹面で、本址床面より約5cm低い。本址付属の施設であることは間違いかろう。倉庫としての機能が推定される。南壁の張り出しは規模が小さく奥行き25cm程度のもので、人為的な所作のものであるかどうか疑わしい。



第35図 第49号住居址

床面直上出土土器は8点で、ほとんどが東壁側に集中している。

本址の所属時期は、III期であろう。

(平林 彰)

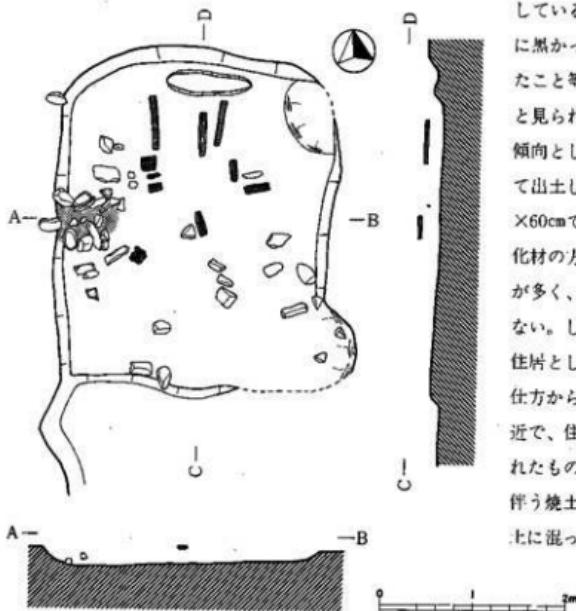
(50) 第50号住居址 (第36図)

本址は、調査区内の西側、第62号住居址の西、第64号住居址の北に位置し、第37号住居址と北西隅が接している。

プランは、特に南側が搅乱のためはっきりしないが^g、残存する東壁、西壁、北壁より東西2.8m、南北3.8mの南北に1m程長い隅丸長方形と考えられる。壁は西壁で鋭く、東・北壁で鈍くローム層を掘り込んでいる。南壁は搅乱のため確認できなかった。壁高は、東壁が9~14cmと一定でなく、西壁は約70cm、北壁は10cmと全体的に浅い掘り込みである。柱穴・貯蔵穴と考えられるピット、落ち込みは確認されなかった。北壁中央付近に添って幅25cm、長さ1mの高まりが見られる。これは住居を建て直した時のなごりかもしれない。床は全体的に堅く良好であるが、四隅付近は搅乱のためやや軟弱となっている。カマドは西壁中央に位置する、間口70cm、奥行90cmで、支柱石をカマド内にもつ、カマド内には焼土がみられ比較的良好に原形をとどめている。石組み粘土カマドである。

さて本住居址の特徴は、何んと言っても炭化材がかなりの量みられたことである。炭化材はカ

マドの周辺から北側にかけて散在している。検出時から覆土が非常に黒かったこと、炭化物がみられたこと等から焼失住居ではないかと見られていた。炭化材は全体的傾向として床面から10cmほど浮いて出土した。炭化材は最大で10cm×60cmで、太さはあまりない。炭化材の方向は南北方向をさすものが多く、東西方向をさすものは少ない。したがって本住居址を焼失住居とした場合、炭化材の散在の仕方から、火元はカマドの北側付近で、住居は南北方向に焼けくれたものと推定される。炭化材に伴う焼土は、炭化材の下より黒色上に混ってわずかに見られる程度



第36図 第50号住居址

で、特に集中してはいなかった。

遺物はカマドを中心に出土しているが、数はあまり多くなく、他の焼失住居のように特に完形品が多いというわけでもない。

本址は、出土土器の様相からⅢ期に属しよう。

(小嶋秀典)

(51) 第51号住居址 (第38図)

51~66、40号住居址は、59号、65号住居址を除くと、発掘区北西で重複し検出された。

本址は、55号住居址に南壁を切られる形で重複し検出された住居址である。プランは、南壁が切られているので南北は推定となるが、東西4.2m、南北4.3mの隅丸方形で、北壁中央やや東寄りにカマドが構築されている。壁高は東壁26cm、西壁11cm、北壁6cmを測る。床面は全体的に平坦で堅い。床面に柱穴は検出されなかつたが、北東コーナーに110×90cm、深さ21cmの円形ピットと190×65cm、深さ20cmの溝状ピットが重複し検出された。ピットの埋土は、両者共に黒褐色土で新旧関係は、はっきりとしなかつた。西壁北側には、幅17cm、長さ143cm、深さ10cmの周溝が検出された。カマドは、80×60cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。カマドはすべて崩れており、天井石は落ち、袖石も倒れており、粘土も散っていた。カマド底部には焼土が約5cm堆積していた。

本址の所属時期は、Ⅳ期と考えられる。

(島田哲男)

(52) 第52号住居址 (第38図)

本址は、北側を66号住居址に、西側を58、63号住居址に切られる形で重複し検出された住居址である。約半程度しか残存していない為、全貌ははっきりとしないがおそらく約5m前後の隅丸方形の住居址であったと考えられる。壁高は東壁20cm、南壁20cmを測る。床面は、全体的に平坦で堅く良好である。床面には東壁の中央北寄りに柱穴と思われる、18×16cm、深さ41cmのピットが1ヶあるのみであった。カマドは東壁の中央やや南寄りに構築されている。カマドは110×62cmの規模をもつ粘土カマドであり、天井は崩れ落ちていたが、両側には多量の粘土が残在し、石はひとつも検出されなかつた。内部は上面5cmに粘土塊、粘土粒、焼土塊、焼土粒が多く混入する黒褐色土でその下層は底まで6cmに焼土が堆積していた。カマド内からは甕の半完形品と小形甕の完形品が検出された。

本址は、約半程度しか残存していないが、カマドが良好に残存していた為か甕、小形甕、杯などの遺物が完形、半完形品の良好な状態で出土した。

本址の所属時期は、Ⅰ期と考えられる。

(島田哲男)

(53) 第53号住居址（第38図）

本址は、54、66号住居址を切り、61号住居址に貼床され切られている形で重複し検出された住居址である。66号住居址には貼床をしている。プランは、東壁と南壁が残るのみで、北壁は61号住居址に貼床された時に削られたらしく検出されず、西壁は黒褐色土であることや水田造成時の擾乱もくわわり検出が困難で、床面から想定すると東西3.5m、南北4.1mの隅丸方形で東壁南隅コーナー横にカマドが構築されている。壁高は、東塗20cm、南壁28cm、北壁残存部2cmを測る。床面は全体的に平坦で堅く良好である。床面にはP₁～P₃のピットが検出された。P₁は70×52cm、深さ16cm、P₂は50×41cm、深さ25cm、P₃は60×36cm、深さ15cmを測る。ピットはすべて柱穴と思われ、P₁とP₂は主柱穴にあたると思われる。カマドは、60×50cmの範囲で、すべて崩れ落ち、毀れているので、元の規模ははっきりしないが石組粘土カマドである。天井石、袖石は崩れ、粘土は周辺に粘土粒がわずかに散っていた。焼土も焼土粒が散る程度であった。

本址の所属時期は、Ⅲ期と考えられる。

（島田哲男）

(54) 第54号住居址（第38図）

本址は、西壁と北壁の大半を53、61号住居址に切られる形で重複し検出された住居址である。プランは、南北5.24m、東西3.35mの不定形な隅丸長方形で南壁隅、南東コーナー横にカマドが構築されている。壁高は、東塗20cm、西壁12cm、南壁11cm、北壁20cmを測る。床面は、全体的に平坦で堅く良好である。床面に柱穴、その他施設は検出されなかった。カマドは、96×80cmの範囲で、元の規模ははっきりとしないが石組粘土カマドである。天井石、袖石は崩れ落ちたり倒れていた。粘土は石の周辺及び下に粘土塊、粒となり散っている。底部には焼土が5cm堆積していた。

本址の所属時期は、Ⅲ期と考えられる。

（島田哲男）

(55) 第55号住居址（第38図）

本址は、北側の51号住居址、西側の60号住居址を切る形で重複し検出された住居址である。プランは、南北5.63m、東西7.04mの隅丸長方形で北東隅にカマドが構築されている。壁高は、東壁30cm、西壁34cm、南壁26cm、北壁30cmを測る。床面は、全体的に平坦で堅いが西側の60号住を切っている部分は砂礫質で軟弱であり、この部分は、貼床である。床面にはピットは検出されなかつたが、床面中央やや南寄りに100×100cmの範囲で焼土が見られた。床面上には、カマド周辺から中央の焼土にかけて、人頭大～拳大の礫が散在していた。おそらくカマド周辺のものはカマドに使用されたものと思われるが、他のものは人為的か、自然的かは不明である。カマドは110×70cmの規模をもつ石組粘土カマドである。天井石はカマド内に崩れ落ちたり、周辺に散っていた。左右の袖石は2～3ヶ床面に立てられ遺存していた。粘土は袖石の根元に遺存しているのみであった。底部には焼土が約10cm堆積していた。

本址の所属時期は、Ⅳ期と考えられる。

(島田哲男)

56 第56号住居址 (第37図)

本址は、調査区西、中央やや北よりに位置し、建物址からは西となる。

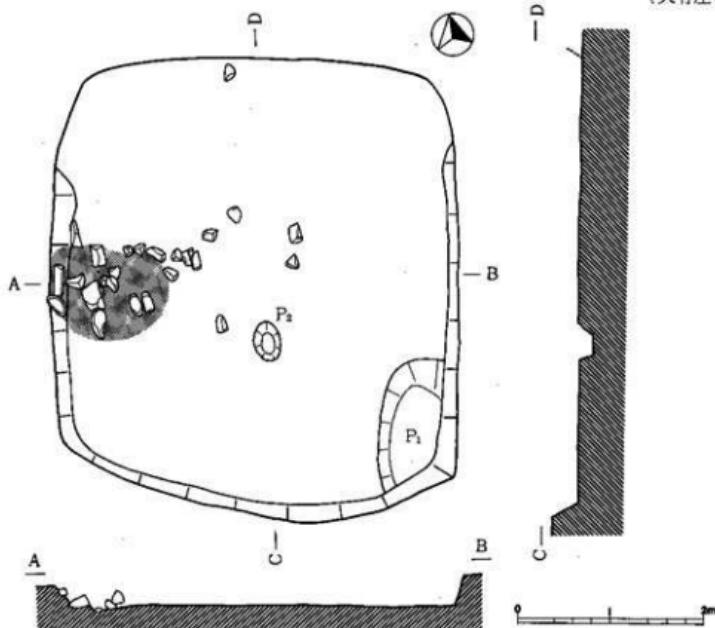
覆土は黒色土であるが、東壁から西へ0.5mのところから1mの幅で南北に小礫砂混入のロームが床まではいりこんでいた。プランとしては、切り合いのため北がはっきりしないが、一辶4.5m程度の隅丸方形プランと考えられる。

壁は切り合いの北側を除き、しっかりととした掘り込みがほぼ垂直になされている。床は特によく踏みしめられたところはなかったが、南から北へゆるやかに傾斜していた。なお、壁上面も、南から北へゆるやかに傾斜していた。

ピットは、 P_1 、 P_2 が検出された。 P_1 は南東コーナー壁際にあり 1.2×0.6 mの大きさで、遺物がみられた。 P_2 は 0.4×0.3 mであった。カマドは西壁中央に位置し、 1.5×0.5 mの範囲でしっかりとした石組みが残っていた。焼土もこの範囲にみられ、カマドの付近に特に遺物が集中していた。

本址の所属時期は、Ⅳ期と考えられる。

(大竹庄司)



第37図 第56号住居址

(57) 第57号住居址（第38図）

本址は、60号住居址に東壁及び全体の臺を切られる形で重複し検出された住居址である。プランは、南北3.8m、東西もほぼ同様の長さで、隅丸方形を呈すものと思われる。北壁残存部東端にカマドがあるが、おそらく北壁のはば中央部に位置したと考えられる。壁高は西壁20cm、南壁23cm、北壁19cmを測る。床面は平坦で堅く良好である。床面に柱穴は検出されなかった。カマドは6.0×60cmの規模をもつ石組粘土カマドである。天井石は1枚は残り、あとはカマド内や周辺に崩れ落ちていた。左右の袖石は2~3枚の石を床面に立てたまま遺存していた。粘土は袖石の根元に遺存しているのみで、あとは周辺に飛び散っていた。底部には焼土が約8cm堆積していた。

本址の所属時期は、Ⅲ期と考えられる。

（島田哲男）

(58) 第58号住居址（第38図）

本址は、52、63号住居址を切り64号住居址に北壁を切られ、19号住居址に南東コーナーを切られる形で重複し検出された住居址である。プランは、6.0×5.5mの隅丸方形を呈する。壁高は東壁26cm、西壁13cm、南壁12cmを測る。床面は平坦で軟弱である。東壁北隅コーナーに85×70cm、深さ24cmのピットが検出された。東壁下には、幅35cm、深さ3~6cmの周溝が検出された。カマド及び柱穴は検出されなかった。本址は、遺物も少なく、床面も軟弱であり長い間使用されたという感じではなかった。

本住居址の所属時期は、明確さを欠く。

（島田哲男）

(59) 第59号住居址（第16図）

本址は、調査地域の東北端に位置し、第14号住居址の西に接するようにして第33号住居址の北に一部分重複するように位置している。第14・33号住居址同様擾乱の激しい地域なので、プランの確認は容易でなかった。一辺3.6~3.8mの不整隅丸方形を呈すると考えられる。壁は砂利混りのローム層を掘り込んでいる。住居址中央やや西よりに堅く精緻な床面が見られる。

本址東南の石組みがカマドと考えられる。焼土はみられなかつたが、熱を受けたと思われる石が数個存在した。また、石組みもカマドがくずれたような状態であった。ピットはカマドの北側に一ヶ所みられた。大きさ(40×40cm-8cm)から貯蔵穴よりも柱穴と考えた方が妥当である。他に落ち込みが2ヶ所確認されたが、東側のものは擾乱によるものと考えられる。西側のものは柱穴と考えられないこともない。

遺物の出土は少なかつた。第33号住居址との新旧関係は、第33号住居址が古く、本址が新しい。

（小嶋秀典）

(60) 第60号住居址 (第38図)

本址は、55号住居址に切られ、57、62号住居址を切る形で重複し検出された住居址である。プランは、南北6.35m、東西6.05mの隅丸方形で西壁には中央にカマドが構築されている。壁高は、東壁30cm、西壁20cm、南壁20cm、北壁20cmを測る。床面は全体的に砂礫質であるため軟弱であるが、東壁側1mの範囲のみロームで堅く良好であった。床面にはP₁～P₅の柱穴が検出された。P₁ (60×60cm、深さ20cm)、P₂ (20×25cm、深さ30cm)、P₃ (45×45cm、深さ20cm)、P₄ (40×40cm、深さ24cm)、P₅ (45×40cm、深さ12cm)を測る。P₁～P₄は方形に並び主柱穴と考えられる。床面北壁と西壁南側、東壁南側、南壁下に周溝が検出された。北壁下の周溝は、幅15～30cm、深さ4～12cm、南壁下の周溝は、幅5～20cm、深さ3～5cmを測る。カマドは100×50cmの範囲で、元の規模ははっきりとしないが石組み粘土カマドである。天井石は57号住居址側や周辺に飛び散っていた。袖石は、左側の2つが床面に立てたまま遺存していたが、それ以外は飛び散り散在していた。粘土は、遺存している袖石の根元にわずかに残るのみで、周辺に粘土塊、粒が散っていた。底部にはわずかに焼土が残るのみであった。

本址の所属時期は、II期と考えられる。

(島田哲男)

(61) 第61号住居址 (第38図)

本址は、53、54号住居址を切る形で重複し検出された。54号住居址の部分には貼床をしている。プランは、西壁、南壁、東壁の半分が53、54号住居址の覆土の黒褐色土で検出困難で床面からの推定であるが、東西3.1m、南北3.9mの隅丸長方形で東壁の中央にカマドが構築されている。壁高は東壁12cm、北壁7cmを測る。床面は全体的に平坦で堅く良好である。床面に柱穴、その他施設は検出されなかった。住居址中央の床面上には、拳大～人頭大の礫が散在していた。これらの礫の中には、カマドに使用されていたもののほか、住居址廃棄後、混入したものもあると思われる。カマドは、50×50cmの範囲で、壁側の一部が残るのみで、元の規模ははっきりとしないが石組み粘土カマドである。天井石は崩れ落ち、袖石が左側1ヶ、右側2ヶ床面に立てられ遺存していた。粘土は袖石の根元に遺存しているのみで、周辺に粘土塊、粒が散っていた。

本址の所属時期は、IV期と考えられる。

(島田哲男)

(62) 62号住居址 (第38図)

本址は、南壁を64号住居址、北壁の一部及び、東壁の一部を60号住居址に切られる形で重複し検出された住居址である。本址の東側には66号住居址があるが、本址の東壁側が水田造成時の擾乱を受けてはっきりしない為、本址との新旧関係は確認が困難であった。プランは、東壁が擾乱によりはっきりしないことや住居址の約半の壁が2軒の住居址により切られて尖なわれているので、

床面の範囲、焼土の位置から想定して、東西5.5m、南北4.8mの隅丸方形と考えられる。カマドは焼土の位置から東壁中央に構築されたものと思われる。壁高は西壁17cm、北壁15cmを測る。床面は全体的に平坦で、西側は堅く良好であるが、東側はやや軟弱である。床面には柱穴は検出されなかった。カマドは、64×55cmの範囲で焼土が見られ、焼土の西側に石が3ヶ所まつて検出されたことから焼土の大きさとほぼ同様の規模の石組み粘土カマドであったと思われる。焼土は5cm堆積していた。

本址の所属時期は、II期と考えられる。

(島田哲男)

(63) 第63号住居址 (第38図)

本址は、52号住居址を切り、58、64号住居址に切られる形で重複し検出された住居址である。住居址のほとんどが切られており、南壁、東壁の一部とコーナーが残存するのみで、全貌ははっきりとしないが、プランは、隅丸方形を呈すると思われる。壁高は、東壁24cm、南壁23cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴、その他の施設は検出されなかった。

本址の所属時期は、III期と考えられる。

(島田哲男)

(64) 第64号住居址 (第38図)

本址は、58、62、63号住居址を切り、40号住居址に切られる形で重複し検出された住居址である。66号住居址との関係は搅乱を受けており不明である。プランは、東西6.2m、南北4mの隅丸長方形で、東壁中央にカマドが構築されている。壁高は東壁15cm、西壁25cm、南壁12cm、北壁10cmを測る。床面は平坦で軟弱である。床面には柱穴、その他の施設は検出されなかった。カマドは、115×50cmの範囲で薄く焼土が見られるのみであった。おそらく石が1つも見られないことなどから推察して粘土カマドであったと考えられる。本住居址も南隣の58号住居址と同じく遺物は住居址の広さにくらべて極わずかであった。

本址の所属時期は、不明確である。

(島田哲男)

(65) 第65号住居址 (第13図)

本址は、建物址群の東南に位置し、第30号住居址と重複している。

プランは、東西3.0m、南北4.1mの隅丸方形を呈する。掘り込み面は、ローム層である。壁は、南・西・東で残存し、北はその一部のみが確認された。壁高は、東壁で9cm、南壁で25cm、西壁で34cm、北壁で11cmを測る。床面は南から北へ向ってわずかに傾斜している。全般的に堅緻であり、第30号址との重複部分のみ起伏がみられる。また北西部の覆土は砂利混りの黄褐色土であった。ピットは東南隅に1ヶ所あるだけである。大きさは75×85cmでなだらかな落ち込みとなっている。このピットのまわりから床面に接して錐となるような10ヶの拳大のやや細長い石が発見された。ほぼ一連になって発見され、2ヶ1組の5対の状態かとも考えらる。カマドは、東北隅

に位置しているが、石がかなり崩れており、間口、奥行き等ははっきりしない。

本址は、Ⅳ期に属し、第30号住居址より新しい。

(小嶋秀典)

66) 第66号住居址 (第38図)

本址は、東側を53号住居址に貼床されまた、52号住居址を切る形で重複し検出された住居址である。北側西側は擾乱を受けてはっきりせず60、62号住居址との新旧関係は不明である。アランは、北側が擾乱を受けはっきりしない為推定であるが、東西4.5m前後、南北4.8m前後の隅丸方形を呈すると考えられる。壁高は東壁3cm、南壁20cmを測る。床面は砂疊質で軟弱である。東壁下に1ヶのピット(P_1)、北壁下に1ヶのピット(P_2)と周溝が検出された。 P_1 は40×40cm、深さ30cm、 P_2 は37×38cm、深さ35cmで両者共、柱穴と思われるが主柱穴なのかどうかは不明である。周溝は幅40cm、深さ5~7cmである。カマドは擾乱で破壊されてしまったのか検出されなかった。

本址からは、出土遺物はなにも検出されなかった。

本址の所属時期は新旧関係がはっきりしないこと、遺物が何もないことから不明である。

(島田哲男)

67) 第67号~第85号住居址 (第42図)

発掘調査終了後、未調査区域の工事にあたり、表土削平時に遺構・遺物の検出、確認を行った。この地域は本調査時の南・東・北の地区を主体に実施し、約3,300m²の広さにわたる。この結果、新たに19軒の住居址の存在を確認し、住居址の帰属時期、規模についての記録を得ることができた。(工事中のことであったので、住居址の詳細な図は作成することができなかつたため第38図によつておよその規模、カマドの位置を記録した。)

第67号住居址は、調査区東側にあり、第68号址と重複している。東西3.7、南北3.0mのやや東西に長く、カマドは北西隅に設けられている。第68号住居址は、第67号址に北西部分が切られて重複し、規模は東西5.2、南北5.3mのほぼ正方形を呈している。カマドの位置は確認することができなかつた。第67号、68号の新旧は、出土土器より第67号が新しく、第68号が古く位置づけられる。第67号址が、Ⅳ期に属するが、第68号址は所属時期は不明確である。

第69号住居址は、調査区の中でも、最も東北隅に当たる住居址で、南西隅が第70号址と重複する。規模は、東西3.9、南北4.2m、カマドは西壁中央に設けられている。第70号住居址は、第69号址と重複する。規模は、東西4.6、南北4.7mのほぼ正方形を呈し、カマドは西壁中央に設置されている。尚住居の新旧関係は、土器の様相が類似のため明確にし得なかつた。ともにⅣ期に属する。

第71号住居址は、第70号址の南に50cm隔たって発見され、東西3.8、南北3.7mの規模をもち、カマドは東壁中央に設けられている。Ⅲ期に属する。

第72号住居址は、建物址群の東方、第12号、32号住居址のすぐ東に位置する。規模は、東西3.8

m、南北3.4m、西壁中央にカマドを設けている。II～III期に属しよう。第73号住居址は、第72号址の北に接して構築され、東西4.6m、南北5.0mの大きさをもち、カマドは東壁中央に存在する。所属時期ははっきりしない。また、第74号住居址は、第73号址の北にあり、東西3.7m、南北3.2mの東西に細長い方形で、カマドは西壁に設けられている。III期にあたる。

第75号住居址は、調査区域の北辺にあたり、東西5.2m、南北5.2mの正方形を呈し、東壁中にカマドを有する。IV期に該当する。この第75号址の北に位置し、調査区中最北端に検出されたのが第76号住居址である。東西3.8m、南北3.8m、カマドは東壁中に構築されている。IV期にあたる。

第77号住居址は、建物址群の東方にあたり、東西3.7m、南北3.2mの長方形で、西壁中にカマドを有する。IV期にあたる。第78号住居址は、第77号址のすぐ東にあり、東西3.1m、南北3.2mの小さな住居で、カマドは東北隅に設置されている。IV期に入る。

第79号住居址は、第80号住居址と重複し、最も東の位置から検出された住居址は、東西4.1m、南北4.6mで、カマドは南西隅に設けられている。この第80号址は、覆土に炭化物が多量に散在し、焼土も認められることから、おそらく焼失家屋であろうと推定された。第79号址との新旧関係は、出土遺物から、第80号址が新、第79号址が旧と考えられる。しかし、それぞれの所属時期は不明確である。

第81号住居址は、東方に孤立して存在し、東西3.1m、南北2.9mの小さな住居址で、カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。カマドは大きな礫を用い、小さな住居址の割合に規模の大きなカマドをもっている。また、他の住居に比較し、土器の出土が多く注目された。IV期にあたる住居址である。

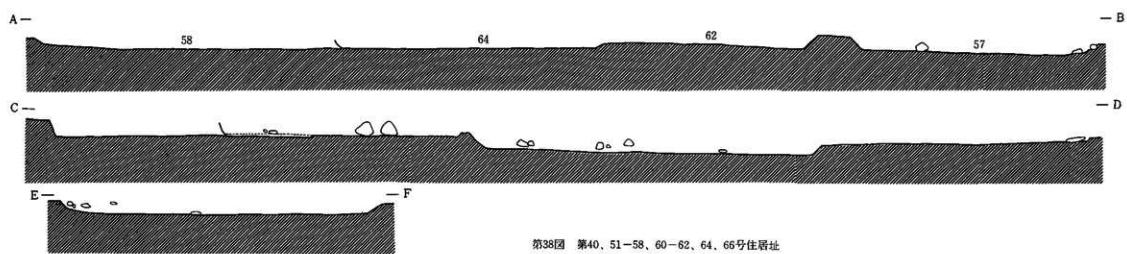
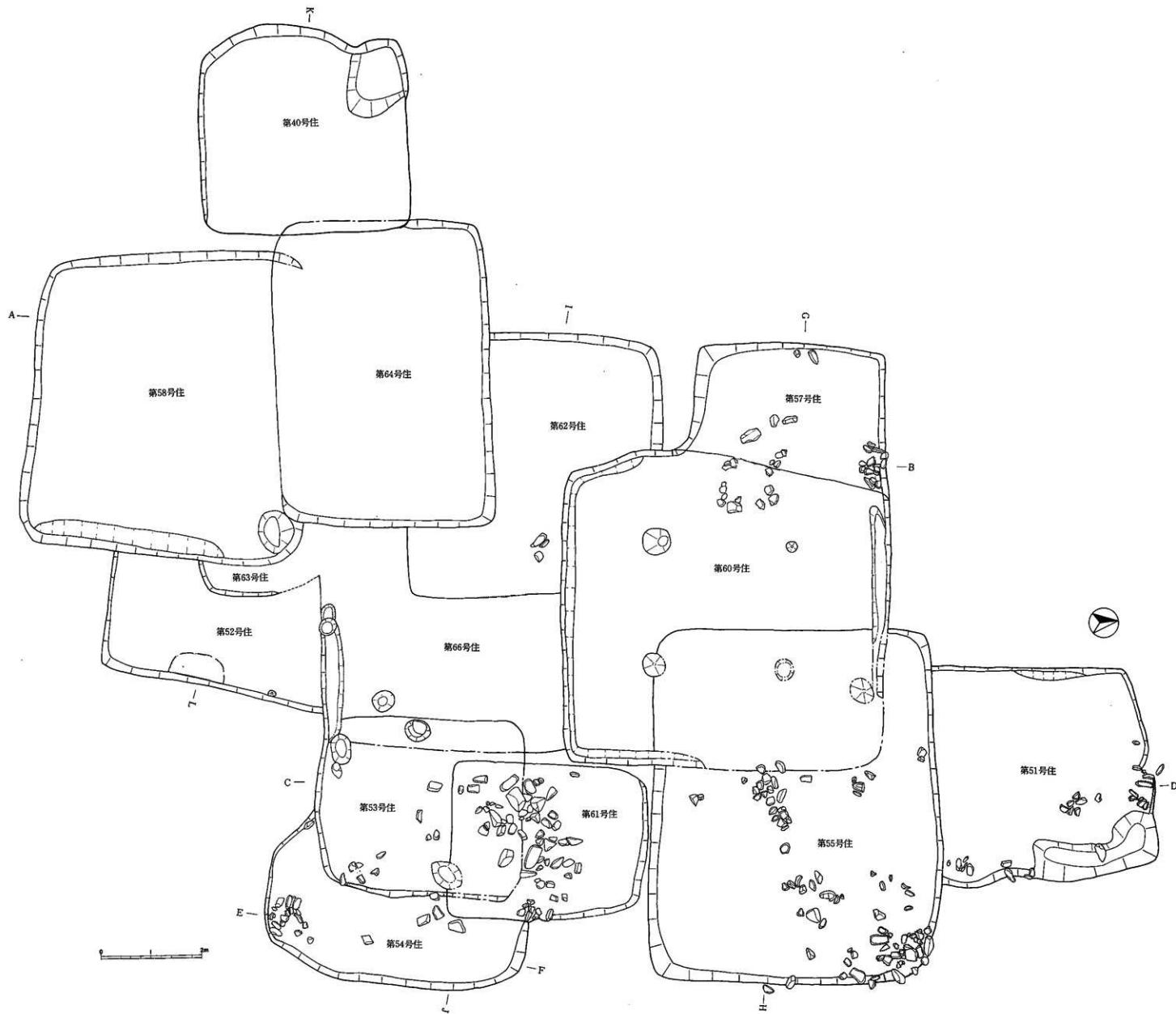
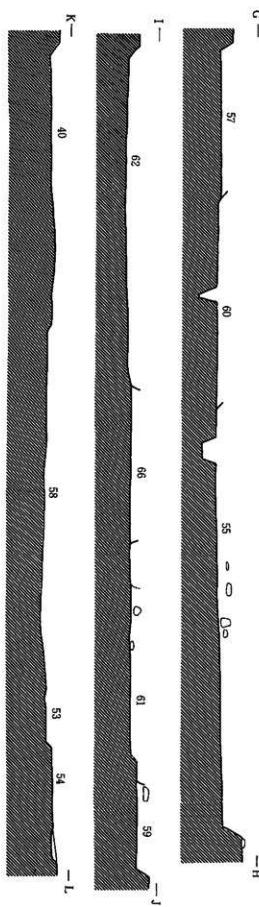
第82号住居址は、建物址群北方にあり、東西4.3m、南北4.2mの規模を有する。カマドの位置は確認できなかった。所属時期不明。

第83号住居址は、調査区域内でも最も南に発見された住居の1つであり、また最高所に構築された住居でもある。東西3.6m、南北3.8mで、カマドは東壁中央に位置する。IV期に該当する。

第84号住居址は、東西3.8m、南北3.7mの規模で、東壁にカマドが設置されている。第85号住居址は、第84号址の西に接して存在し、東西5.6m、南北4.4mの東西に細い住居で、カマドは北東隅に設置されている。ともに遺物の出土がないため、該当時期がはっきりしない。

以上、調査終了後、確認された各住居址についてその概要を述べたが、何分にも工事進行中のため時間的余裕がなく、細部にわたった記録をとることができず、位置・規模・所属時期の確認にとどまった。しかし、集落の在り方を考えるうえでこれらの住居址群の確認は大きな意義を有するものといえる。

(小林康男)



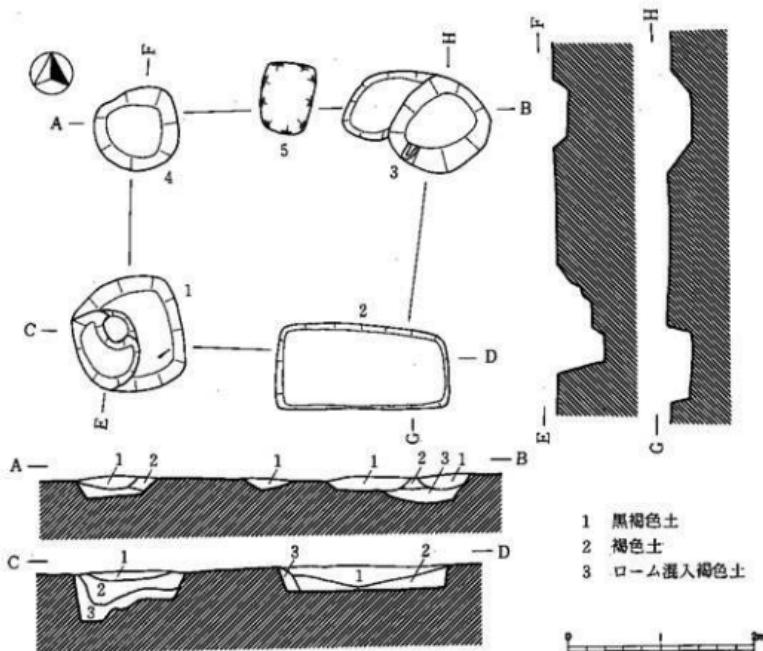
第38图 第40、51-58、60-62、64、66号住居址

第2節 建物址

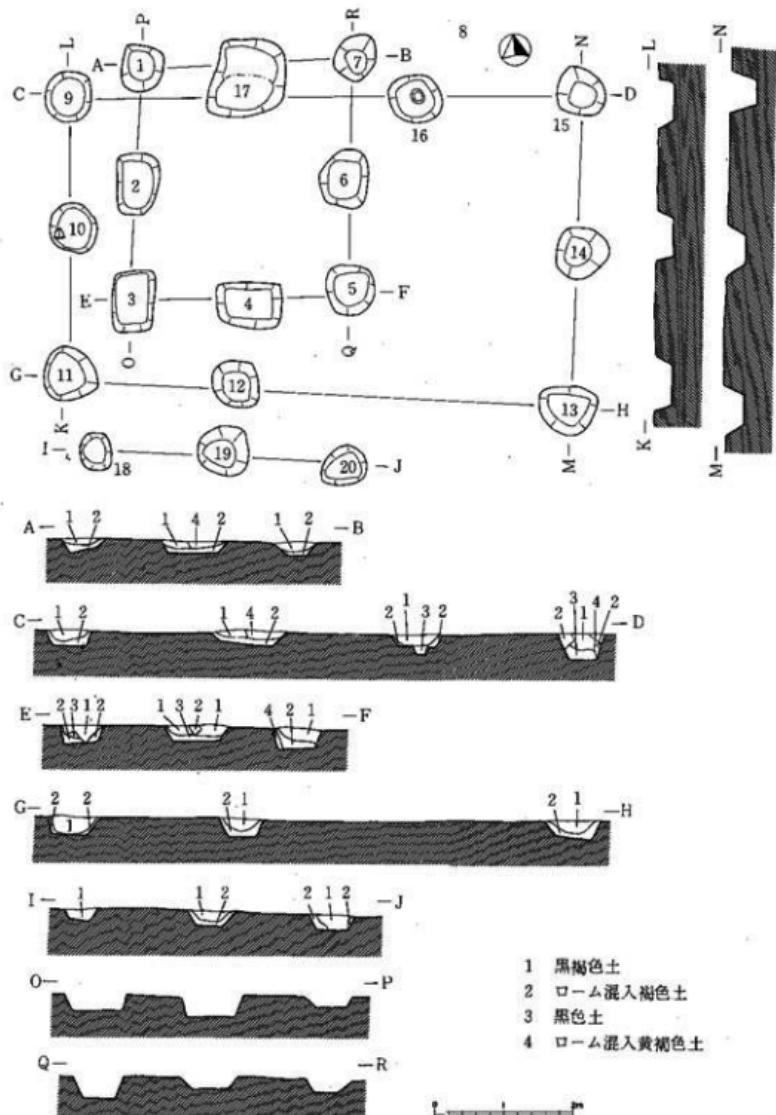
(1) 第1号建物址 (第40図)

本址は、調査地区中央部、第42号住居址の南側に位置する。第3号建物址とP₆が重複する。しかし、今回の調査ではその前後関係を把えることができなかった。

本址は、2間×2間のほぼ正方形を呈し、桁行4.1m、梁行3.6mを測り、総数8本の柱穴群から成る。棟方向は、N-12°-E。柱間寸法は、桁行で1.65m、梁行で1.55mである。柱穴は円形のものと、方形のものに分けられる。円形は、1・5・7で、規模は直径60~70cmである。また方形は、2・3・4・6で、規模は60×90cm前後とやや大き目である。これらの柱穴の覆土は、黒褐色土ないしローム混入褐色土がレンズ状に堆積し、柱痕は認められなかった。柱穴の検出面からの深さは、円形、方形ともに20~32cmで、柱穴の規模からすると浅く、上層を削平されているものと考えられる。



第39図 2号建物址



第40図 1号、3号建物址

なお、南側に直線的に配列するP_{1a}～₂₀の柱穴址は、配列状態からあるいは本址に関連するものかとも考えられたが、決め手に欠け、一応これらの柱穴は異なる建物のものとしておきたい。

(中野実佐雄)

(2) 第2号建物址 (第39図)

本址は、調査地区中央部に検出された3ヶ所の建物址の内、最も西側に位置し、第18号住居址の南側にある。

本址は、1間×1間で、桁行3.2m、梁行2.3mを測り、総数4本の柱穴から成る。棟方向は、N-86°-Eである。柱穴の形状は不整形であり、何回か建て直しか行なわれていると考えられる。それは、P₁、P₂においては重複する2ヶ所の柱穴となり、またP₂はその規模からして2ヶの複合した柱穴とも推定されるからである。柱間は、桁行3.2m、梁行2.3mであるが、最小の時は、桁行が梁行と同値の2.3mを示している。なお、P₆としたピットは、覆土の状態から後世の攪乱ではないかと推定された。なお、P₃の覆土上層（黒褐色土）から、土師器壊および鉄製鋤頭の完好品が出土し、またP₁から墨書き土器の出土がみられた。

(中野実佐雄)

(3) 第3号建物址 (第40図)

本址は、調査地区中央部に位置し、第1号建物址とP₁₇で重複している。

本址は、2間×3間で、桁行7.9m、梁行4.7mを測り、南辺の柱穴を1本欠く総数9本の柱穴址から成る。棟方向は、N-80°-Wである。柱間寸法は、桁行で2.5m、梁行で2.3mである。柱穴は円形で、径70～80cm、深さは18～35cmである。P_{1e}は底面が段状を呈し、下段は、径18cm、深さ10cmである。柱穴覆土は、第1号建物址同様、黒褐色土ないしローム混入複色土がレンズ状に堆積しており、柱痕は確認されていない。

(中野実佐雄)

第3節 小 穴 (第41図)

(1) 第1号小竪穴

本址は、第84号住居址の東側に位置し、長径0.95m、短径0.80mのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは26cmでローム層を垂直に掘り込み底面は平坦である。

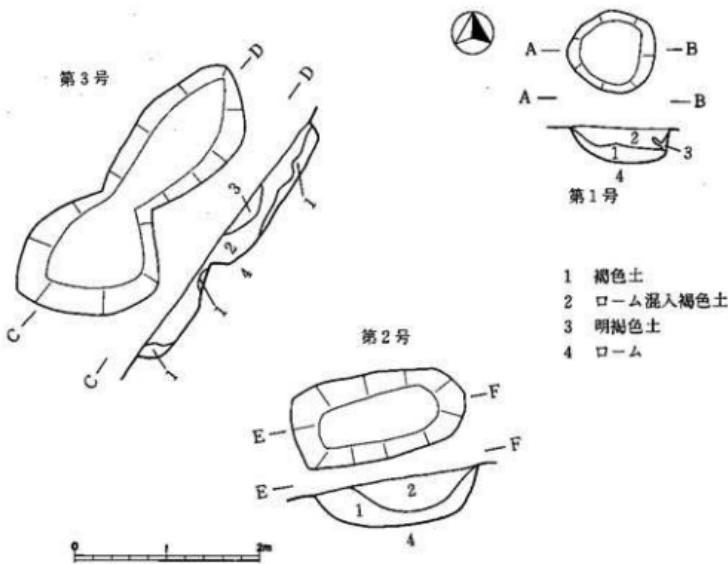
(2) 第2号小竪穴

本址は、第22号住居址の北側に位置し、主軸方向を東西に取る楕円形を呈する小竪穴である。長径1.90m、短径0.90mで、検出面からの深さは4.6cm～5.8cmで底はほぼ平である。

(3) 第3号小竪穴

第2号小竪穴北西側に位置し、主軸方向をN-45°-Eに取るひょうたん形をした小竪穴である。長軸は3.30m、短軸は1.05mと1.50mで、検出面からの深さは30cmと44cmで底はくびれの部分で2つに分かれれる。

(中野尖佐雄)



第41図 第1～3号小竪穴

第V章 遺 物

第1節 繩文時代

今回の発掘調査によって発見された縄文時代に属する遺物は有舌尖頭器1、石鐵1、縄文土器片2の計4点である。このほか、第53号、56号住居址から出土した打製石斧3（第70図3、11、12）も縄文時代に属すると考えられる。

有舌尖頭器（第42図1）は、第31号住居址東側からブルドーザーによる表土削平後の遺構検出作業中に褐色土層中より出土した。この有舌尖頭器は、淡青色のチャート製で、先端部をわずかに欠損するのみの完好品である。現存長は、6.0cm、最大幅2.0cm、最大厚0.6cm重量10gで、舌部の長さは1.0cmを測る。舌部は、基部より三角形状に作出される。整形は、周縁よりの丁寧な押圧剥離による。表面は左辺からの、また裏面は右辺からの剥離が中央部を越えており、剥離面は美しい。厚さは薄手で、ほぼ左右対称の均整のとれた優美な有舌尖頭器である。有舌尖頭器は、この周辺では、広丘高出北ノ原、高出V地点などの遺跡から出土しており、松本平におけるこの種の石器としては比較的稠密な分布地域といえよう。なお、前2者の遺跡が河岸段丘上の比較的高所に位置しているのに対し今回の本遺跡での発見は、低平地での出土であり、出土状況の面からも注意されよう。

石鐵（第42図2）は、黒曜石製で、長さ3.5cm、厚さ0.6cm、重さ8g。基部を欠損している。調整はそれほど精巧ではなく、粗さが目立つ。基部に有茎が欠損した痕跡が認められる。

土器（第42図3）は、中期後半に属する破片で、粘土紐の貼り付けおよび沈線文が施され、溝巻文を描いているものと思われる。色は赤褐色。第42図4は、後期の深鉢形土器の破片。口縁部破片で、口唇下に一条沈線をめぐらす。赤褐色を呈し、焼成は良い。

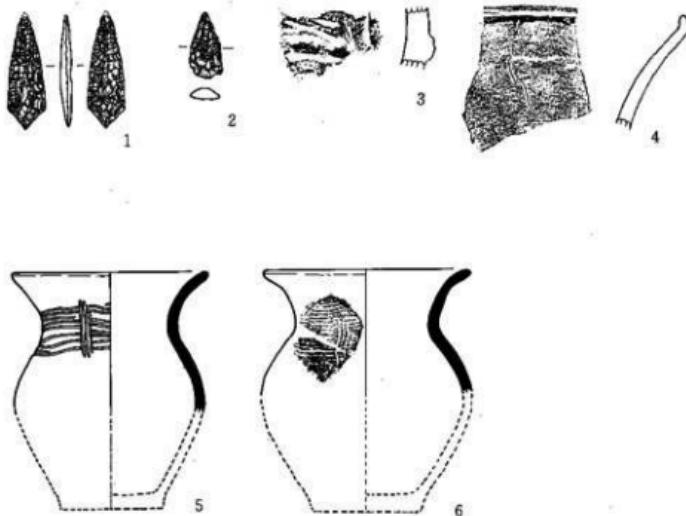
これら縄文時代の遺物は、量的には僅少であるが、最近問題になりつつある低平地における遺跡立地を考えるうえでの好資料を提供するものとして貴重である。なお、松本の日本民俗資料館には中期後半に属する縄文土器の完形品が収蔵されており、この資料は現下向井集落の南側より出土したとのことである。また、以前の工事により、現下向井集落内および南方の畠地、水田地域より多量の縄文土器が出土したという記録もある。これらの事実から、この地域における縄文時代の集落址は、今回の調査地域より南方にその中心部分を有していると考えられる。今回出土した僅少の資料は、より大きな縄文時代集落の一角を示したものともいえよう。

第2節 弥生時代

第19号住居址東側で弥生時代後期の土器が出土している。第42図5・6の変形土器が口縁を下にし、2つ並んで発見された。肩部以下が耕作時に破損されてしまっているため明確さを欠くが、土壤状の掘り込み中に、逆位に2つ並べて置かれていたのではないかと思われる。

5は、口径10.4cm、推定器高12.5cmの小形の甕で、頸部に3本1単位の櫛描文が右回りに施文され、その上に縦に同一工具により文様が施文されている。胴部および内面は横位のミガキが施されている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良い。

6は、口径11.1cm、推定器高12.8cmの小形の甕で、5と類似した形態をしている。文様は頸部にみられ、3本1単位の櫛状工具による横位の施文と、その上におそらく4単位と思われる縦方向の文様とが施文される。胴部および内面は横位のヘラミガキが施されている。赤褐色を呈し、焼成は良い。



第42図 織文・弥生時代出土遺物

第3節 平安時代

(1) 土器

今回調査では、平安時代に属する住居址を中心として多量の土器が出土した(第43図~67図)。種類は、土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器があり、器種も土師器では、壺、蓋、鉢、罐釜、手づくね土器が、須恵器では、壺、蓋、襲、鉢、壺、灰釉陶器では壺、皿、瓶、手付瓶、綠釉陶器では皿、手付瓶など多種にのぼっている。

出土の状態をみると、その大半が住居址覆土からの出土であり、住居址外から発見されたものは僅少である。住居址では、第4号、10号、11号、20号、23号、31号のように非常に多量の土器が出土したものと、第40号、41号、43号、45号のように破片がわずかに得られる程度の住居址がある。整理・報告にあたっては出土した土器は可能な限り図示することに努めたが、住居址の重複が激しく、その帰属住居が判然としないものに関しては除外することとした。個々の土器についての観察は第1表に記述したので、特別項を設けて記載することは紙数の関係もあり取り止めることとした。また、出土状況も、特別なものについては備考欄に記述し、それ以外は住居址覆土からの出土であるため敢えて記述することはしなかった。

出土土器に関しては、発掘調査後、まだ短時間であり充分な検討を加えることができなかつたが、第V章第2節に示すように第I期~第IV期の4段階に時期区分を行った。この時期区分はもとより非常に不充分なものであり、資料の今後の検討により更に細分される可能性があるが、現段階での一応の時期区分設定としたい。

(2) 鉄製器

今回の調査では、22軒の住居址及び第2号建物址より、総数37点にのぼる鉄製品が発見された(第68、69図)。全て竪穴住居の覆土、もしくは建物址の柱穴内よりの出土であり、平安時代に帰属するものと考えられる。住居址別出土数は、55号址5点、46号址4点、19、24号址3点、14、50、61号址2点、他15軒の住居址及び2号建物址が各々一点という具合である。

これら37点の鉄製品の内訳は刀子7点、鐵4点、鎌4点、斧2点、紡錘車2点、麻皮削器2点、帶金具1点、鋤頭1点、不明鉄製品14点であり、やはり刀子が最も数が多く、当時の唯一の日常的な鉄製品であったことをうかがわせる。また本遺跡を特徴づけるものとしては鋤頭が挙げられる。これは集落の中心ともいえる遺物址群のうち第2号建物址の柱穴内より、完形の土師器と共に出土しており、当時の社会経済面の実体把握をする上で貴重な資料となろう。その他、19号址からは帶金具が、また、38号址と55号址からは麻皮削器が出土しており、同様の鉄製品を出土した市内、内田原遺跡との比較が問題となろう。鎌は4点のうち1点は雁脱式で、当地方では珍しい形態である。斧は大型と小型の2点が出土しており、両方とも表面にテープ状の木質部を残し、装着時に何かを巻き付けたことが推察される。

鉄製品は破損品が多く、鎌など、4点(5点)も出土したが、原形を窺い知れるのは、61号址出土の一点のみであった。しかし、このような大きな集落において各種バラエティーに富んだ鉄製品を出土したこととは、当時の生活を知る上での貴重な資料となろう。なお、今回の調査で鉄製品を出土した住居址は、85軒のうちの22軒であるが、67～85号址までの完掘出来なかった住居址を除けば、66軒のうち、21軒から鉄製品が出土しており、パーセンテージは31.8%となる。この値は国分期においては、県内でも、また全国的にも妥当な値と言えよう。

(前田清彦)

(3) 石 器

平安時代に属する石器として網物用石鍬が出土している。網物用石鍬は、自然石に余り手を加えずに使用していることが多いため、その認定に困難さが伴うが、本遺跡においては住居址床面に図示したような環が検出されることが少なく、しかも住居址の中にある程度一かたまりの状態で出土している点などから該種石器とした。特に、第55号址では9個、第65号址では7個が発見され、前者では長さ10～12cm、幅4cm、の棒状自然環を用いている。また第65号址では長さ15～20cm、幅5～10cm、とやや大き目のものを使用している。

いずれにしても、85軒という多くの住居址が発見された割合には、こうした石器を出す住居址が少なく、この種の石器の当時における役割を考えるうえで参考となる出土状況といえる。

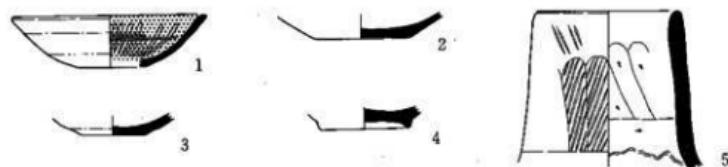
(4) その他

羽口(第72図1、2) 羽口は第5号および第6号住居址より各1点づつ破片が出土している。1は、第6号址より出土し、外径は推定で7.2cm、内径2.0cmを測る。内外面とも明赤褐色を呈し、外面は焼けてヒビが入っている。2は、第5号址より出土し、推定外径7.0cm、推定内径3.0cmを測り、内外面とも明褐色を呈し、外面には鉄滓が付着し、剥落が著しい。

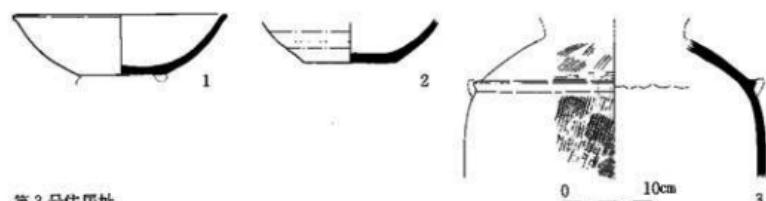
土製紡錘車(第72図3) 直径7.0cm、厚さ1.6cmで、中心部に径0.8cmの孔があり、これを取り囲むようにして径0.4～0.3cmの孔が5個みられる。全面ヘラケズリが施され、色調は灰白色を呈する。

古銭(第72図4) 第3号住居址床面より出土した「開元通宝」で、器面は非常に荒れていてからうじて錢種が識別できる程度である。

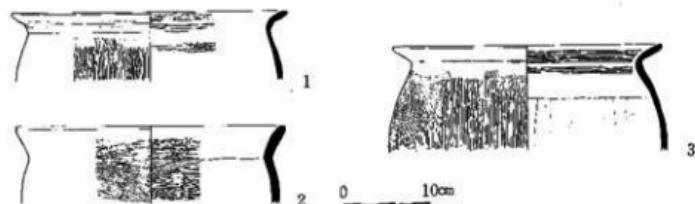
第1号住居址



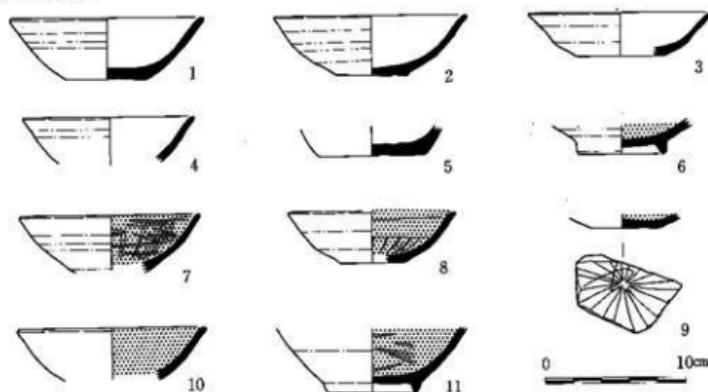
第2号住居址



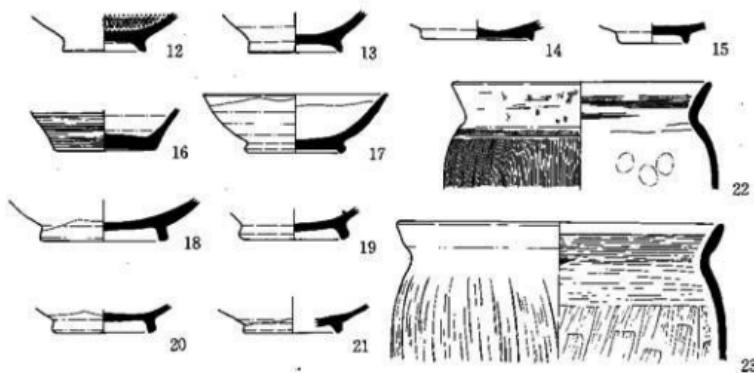
第3号住居址



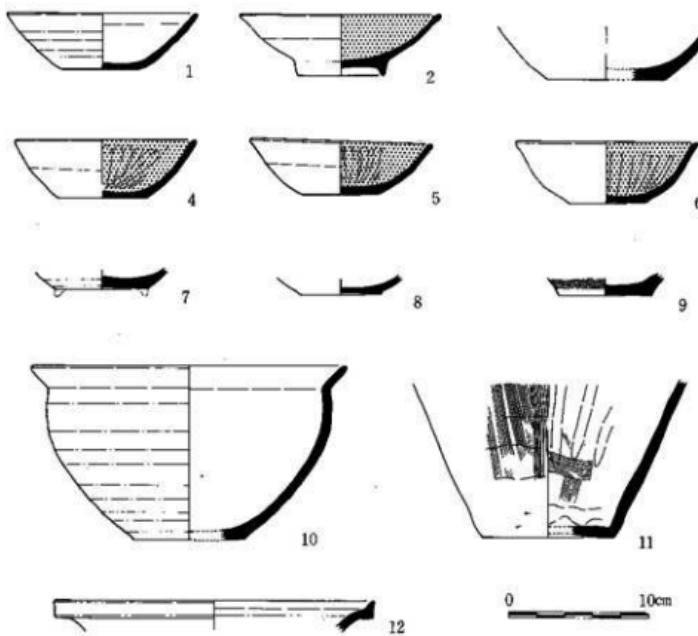
第4号住居址



第43図 第1号、第2号、第3号、第4号住居址出土土器

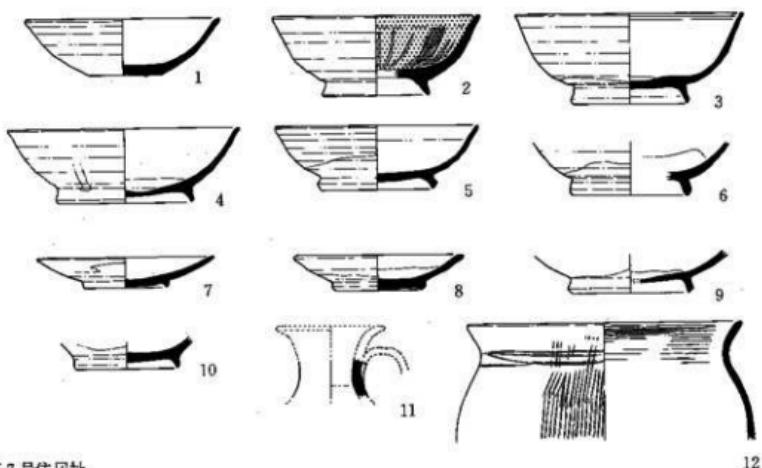


第5号住居址

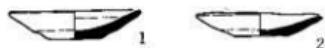


第44図 第4号、5号住居址出土土器

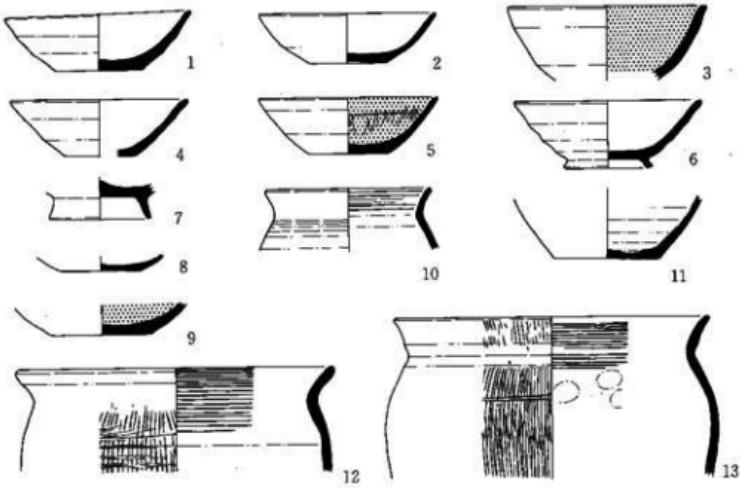
第6号住居址



第7号住居址



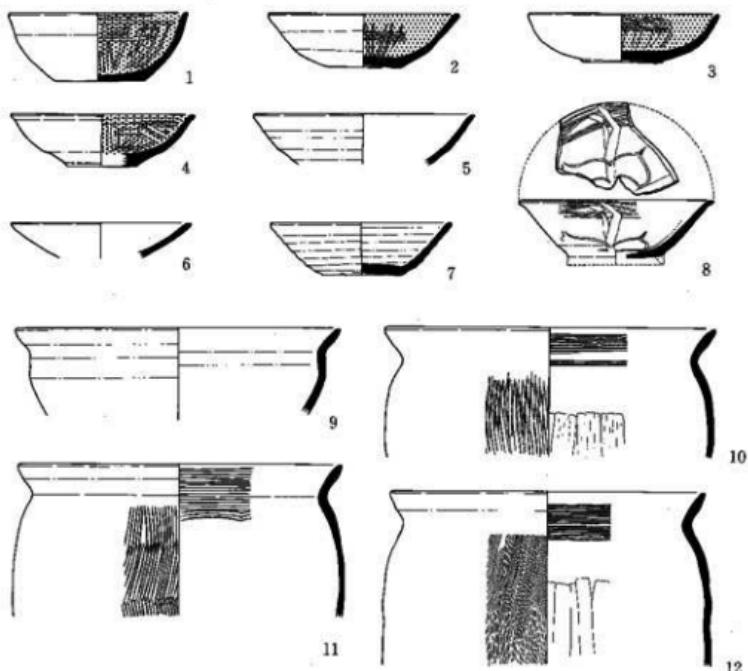
第8号住居址



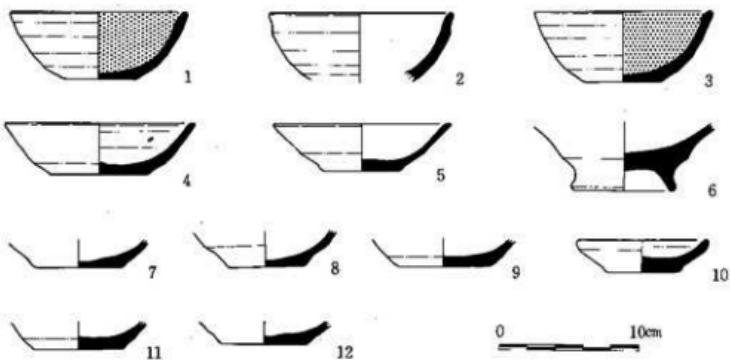
第45図 第6号、第7号、第8号住居址出土土器

0 10cm

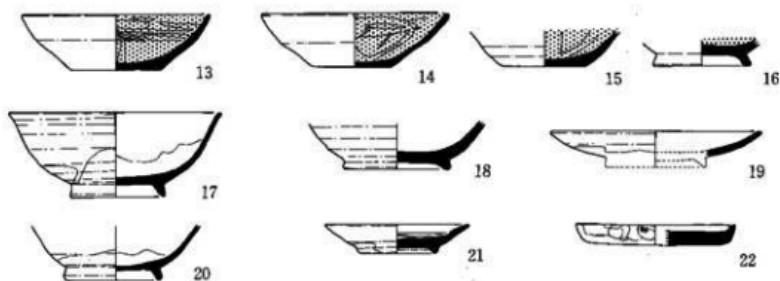
第9号住居址



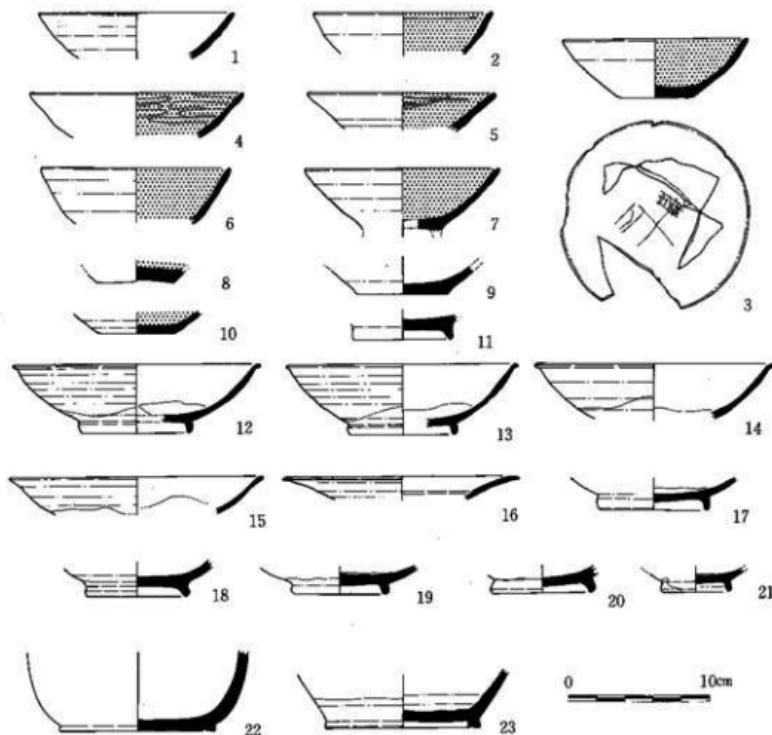
第10号住居址



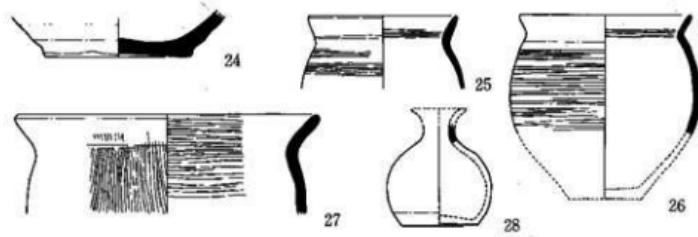
第46図 第9号、第10号住居址出土土器



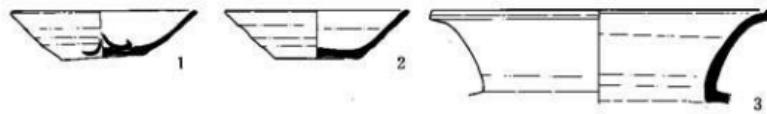
第11号住居址



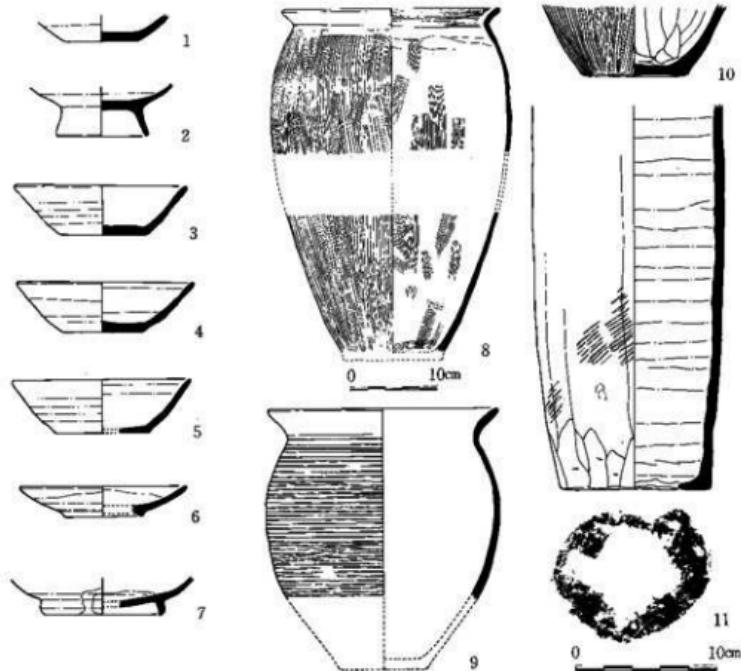
第47図 第10号、第11号住居址出土土器



第12号住居址

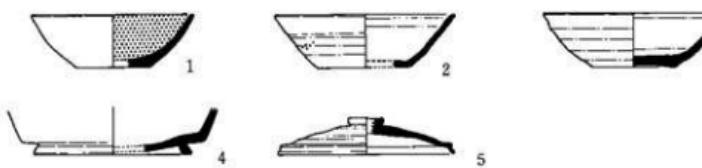


第13号住居址

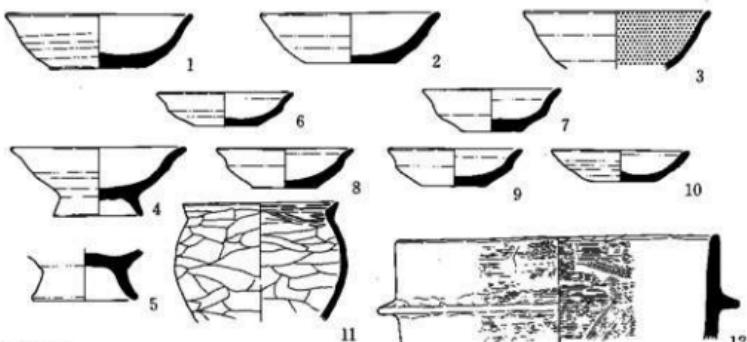


第48図 第11号、第12号、第13号住居址出土土器

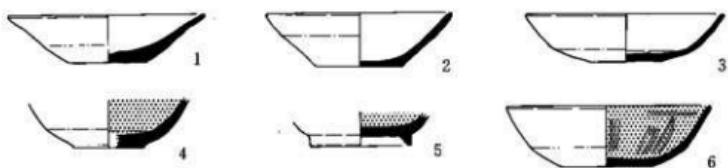
第14号住居址



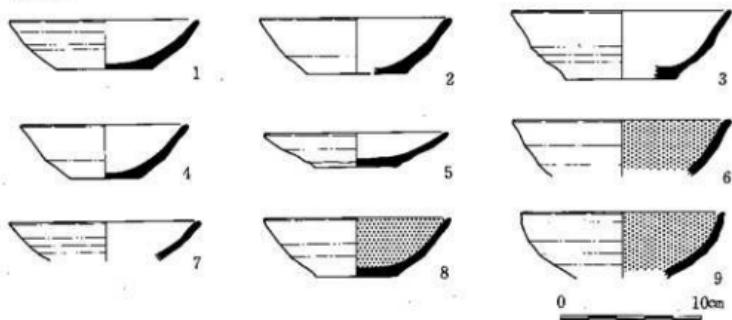
第15号住居址



第16号住居址

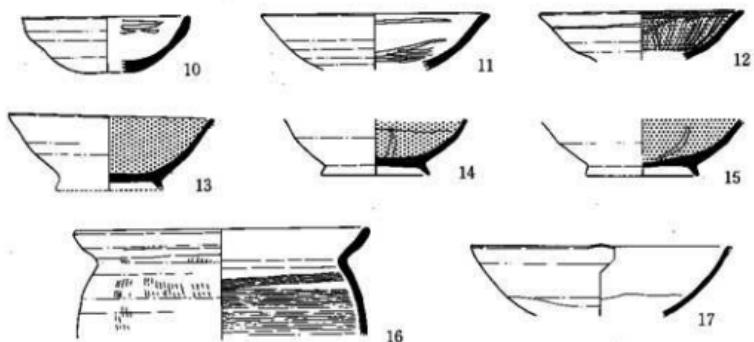


第17号住居址

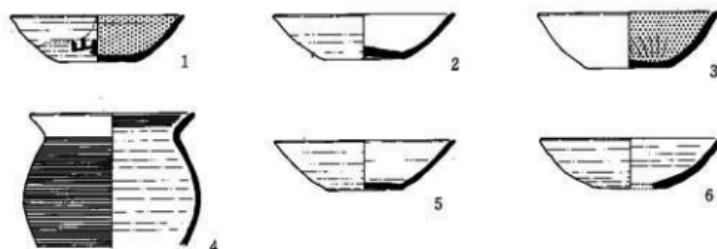


0 10cm

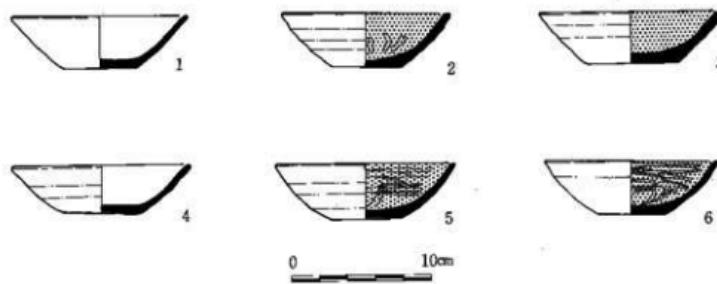
第49図 第14号、第15号、第16号、第17号住居址出土土器



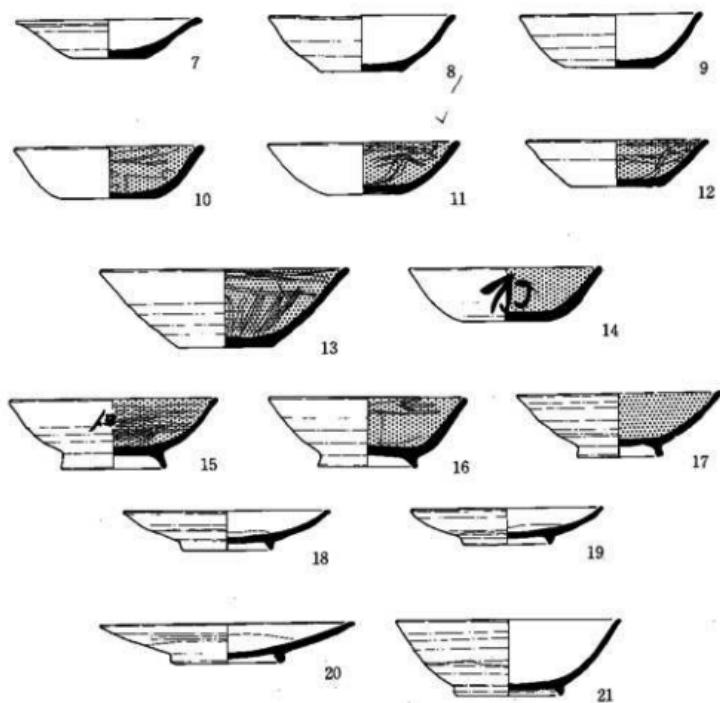
第18号住居址



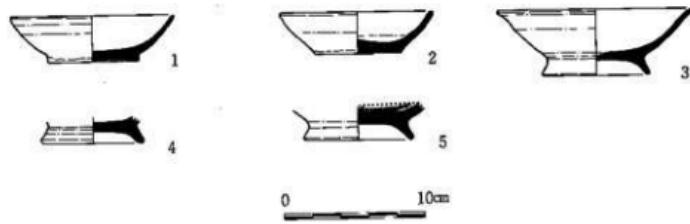
第19号住居址



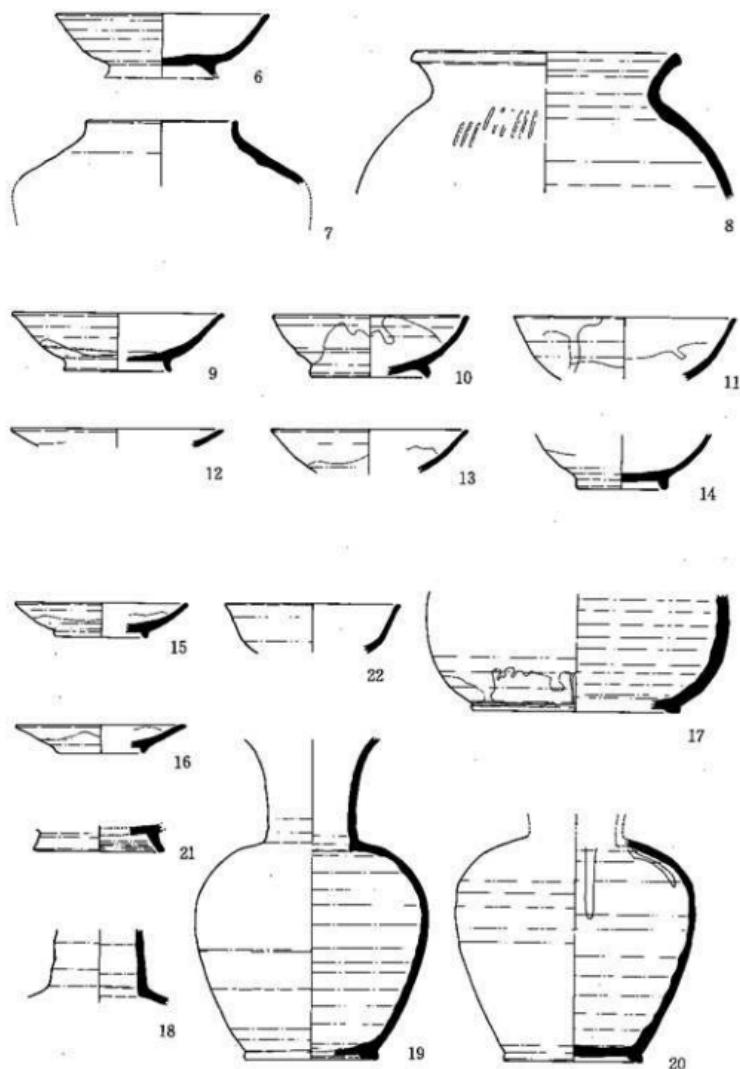
第50図 第17号、第18号、第19号住居址出土土器



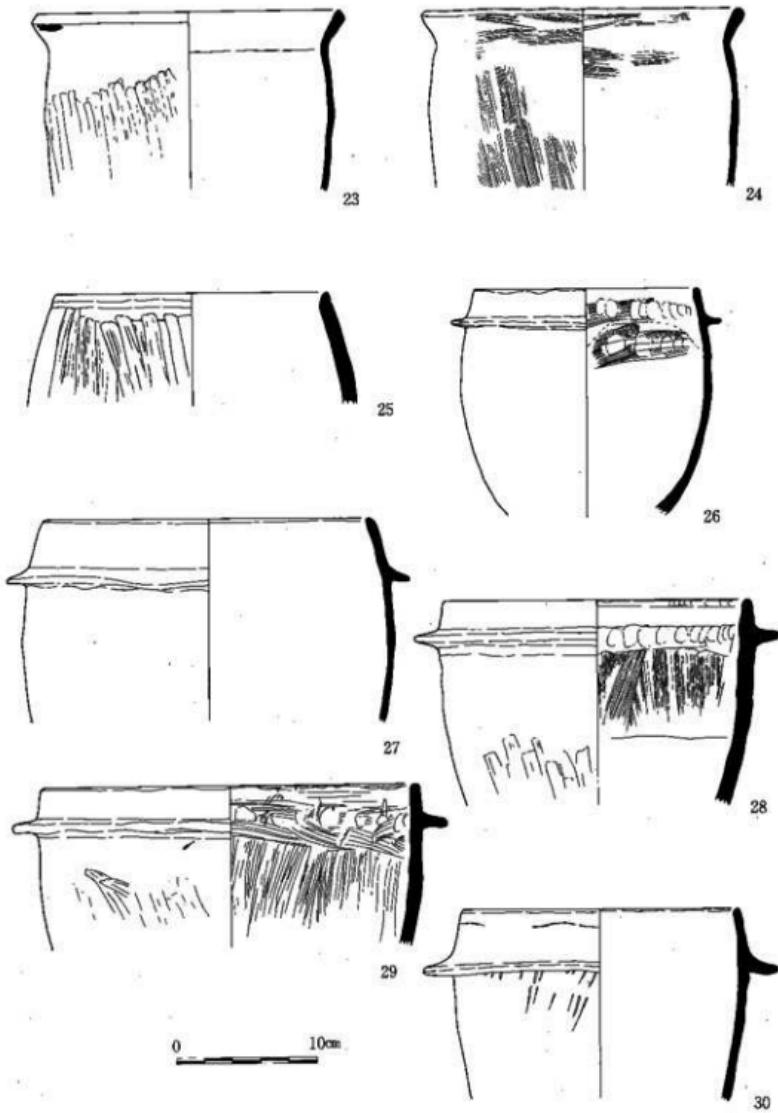
第20号住居址



第51図 第19号、第20号住居址出土土器



第52図 第20号住居址出土土器

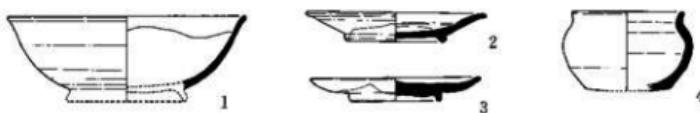


第53図 第20号住居址出土土器

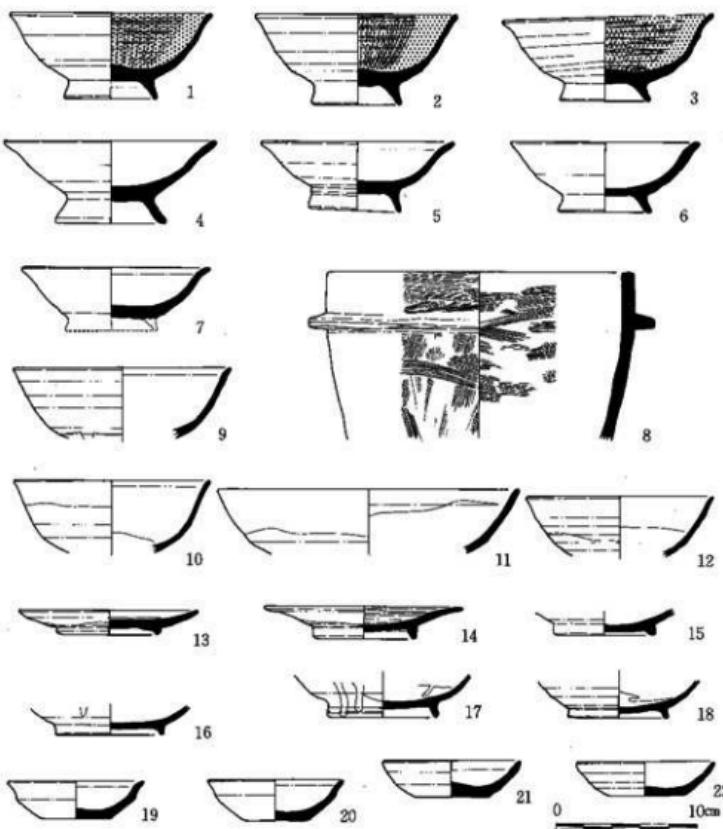
第21号住居址



第22号住居址

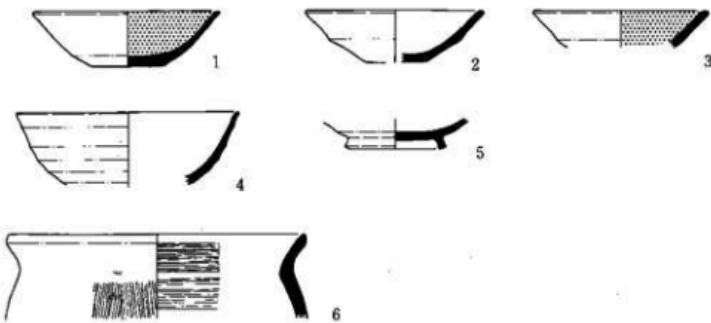


第23号住居址

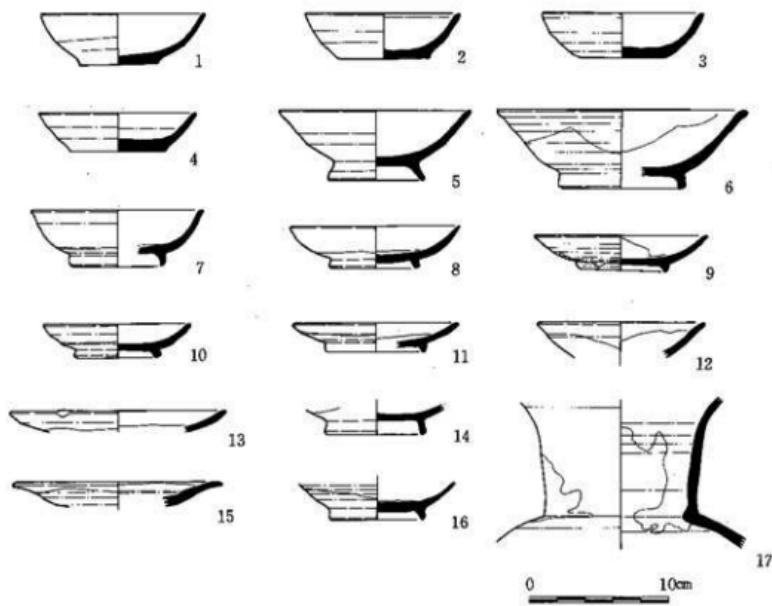


第54図 第21号、第22号、第23号住居址出土土器

第24号住居址



第25号住居址

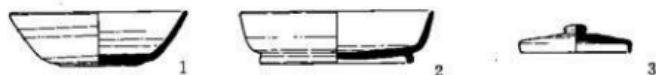


第55図 第24号、第25号住居址出土土器

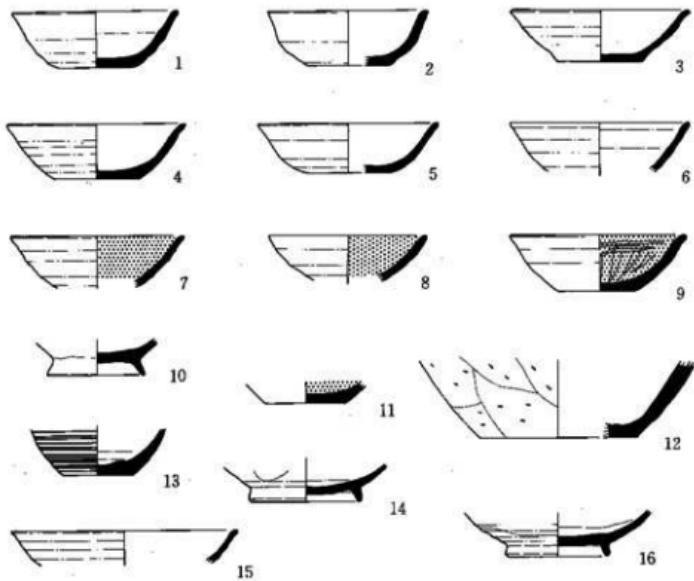
第26号住居址



第27号住居址

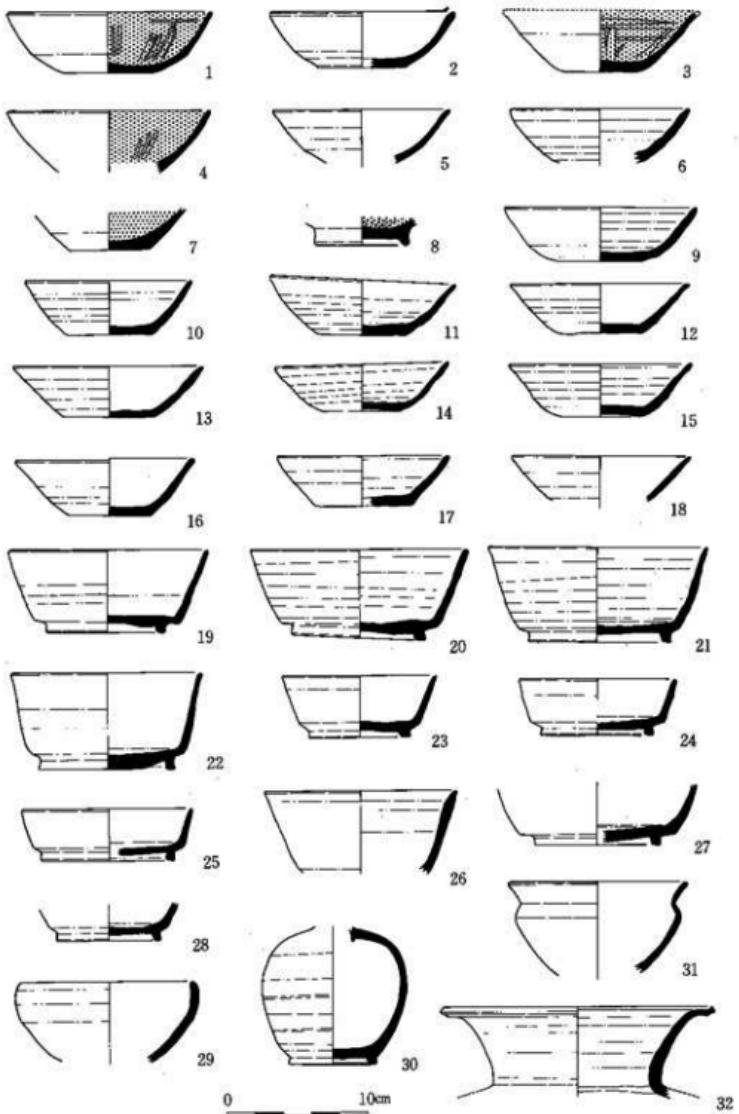


第30号住居址

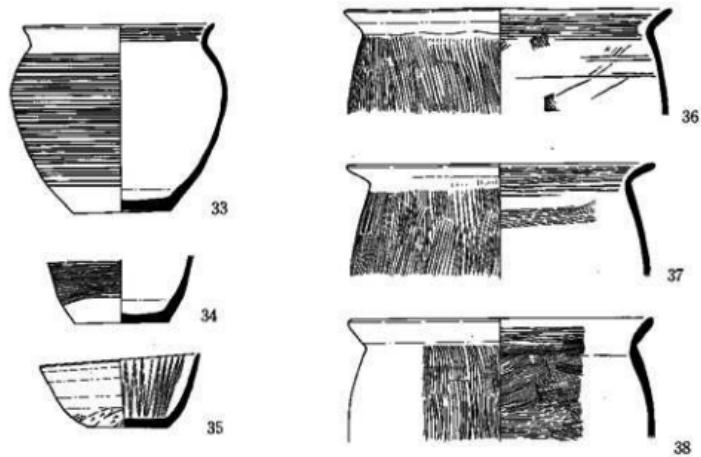


第56図 第26号、第27号、第30号住居址出土土器

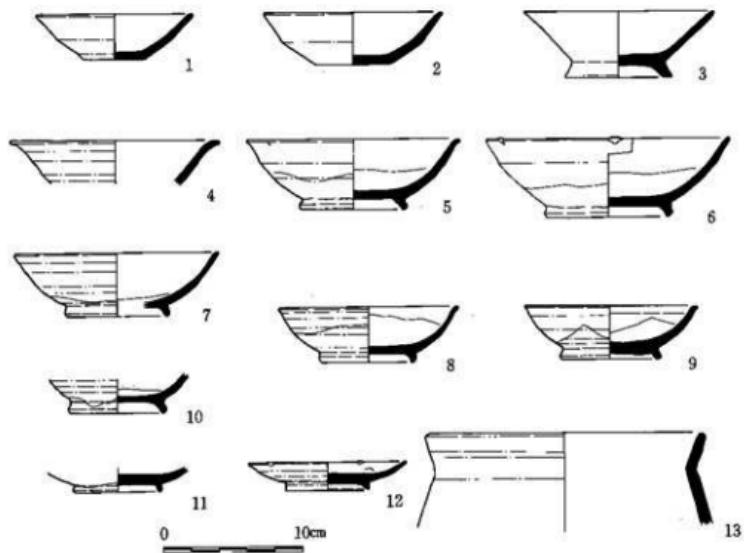
第31号住居址



第57図 第31号住居址出土土器

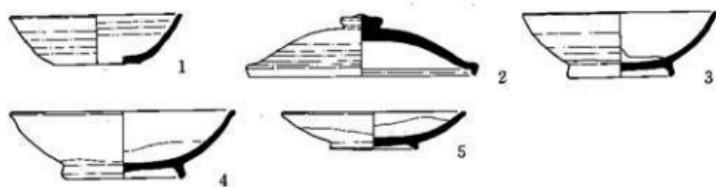


第32号住居址

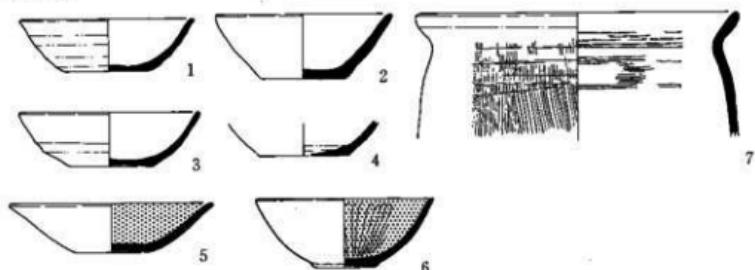


第58图 第31号、第32号住居址出土土器

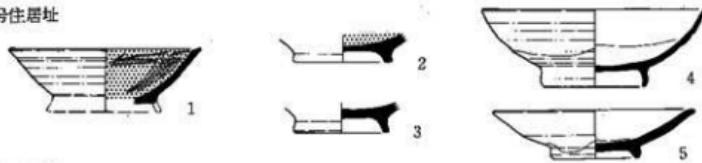
第33号住居址



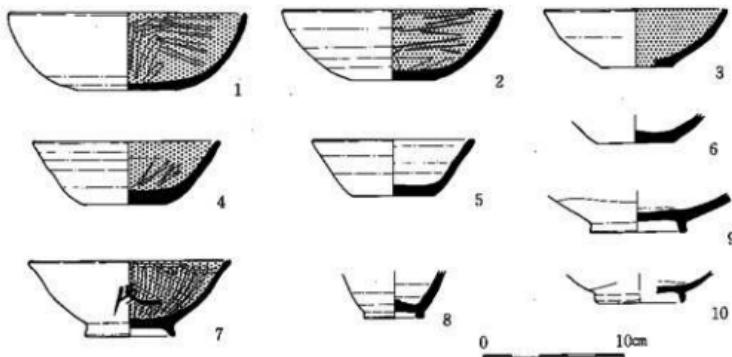
第34号住居址



第35号住居址

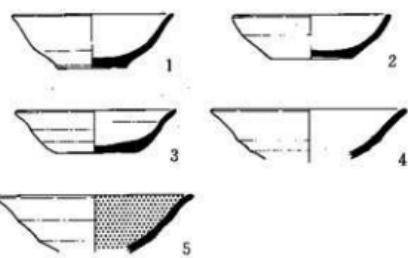


第37号住居址

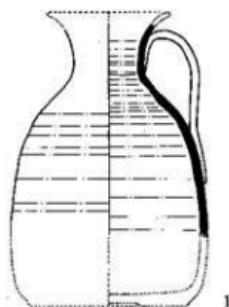


第59图 第33号、第34号、第35号、第37号住居址出土土器

第38号住居址



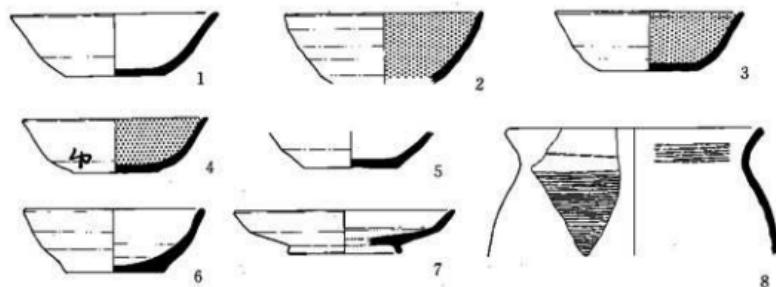
第39号住居址



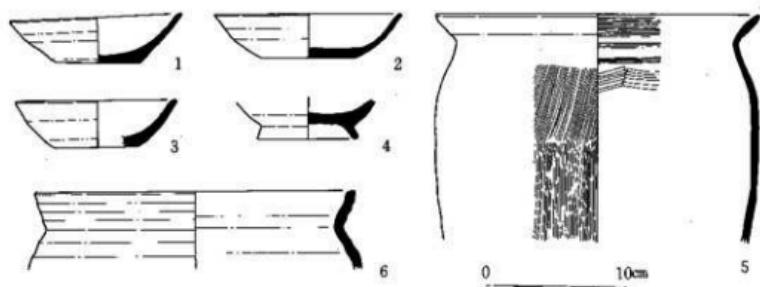
第42号住居址



第44号住居址

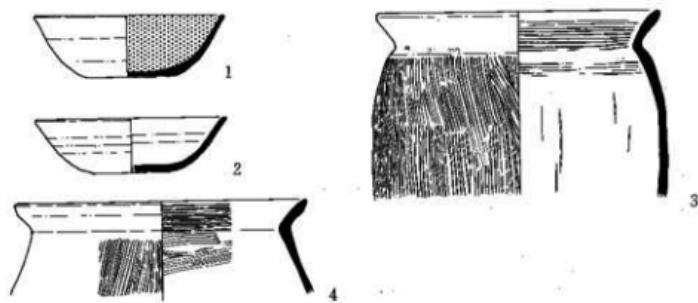


第46号住居址

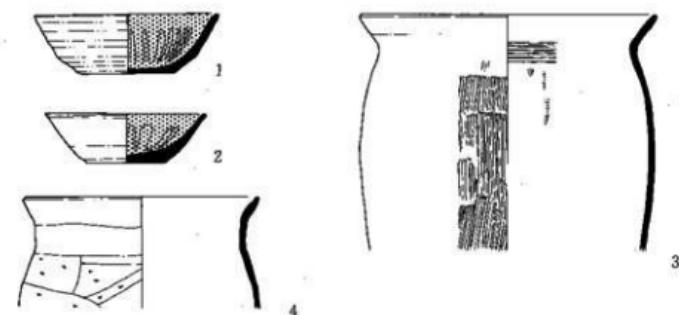


第60圖 第38号、39号、42号、44号、46号住居址出土土器

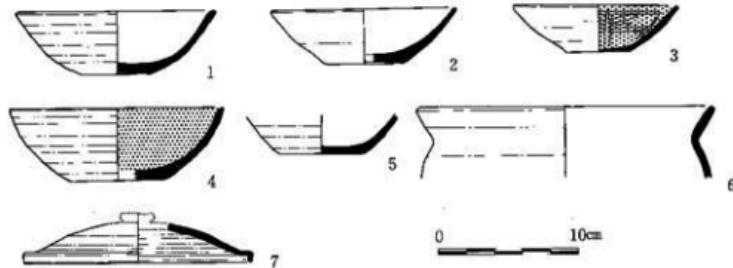
第47号住居址



第48号住居址

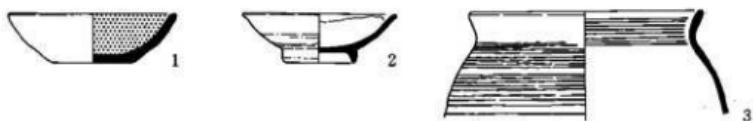


第49号住居址

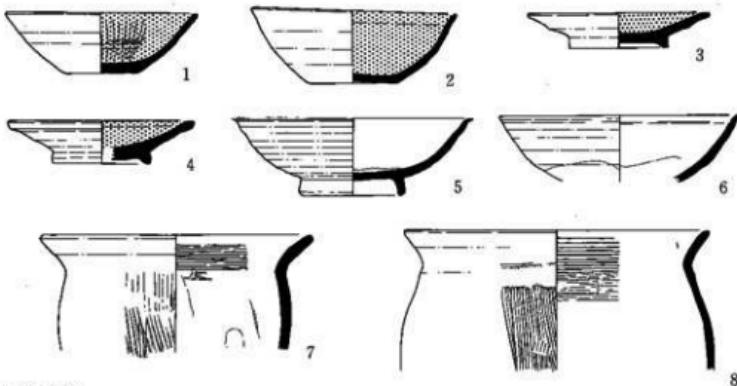


第61図 第47号、48号、49号住居址出土土器

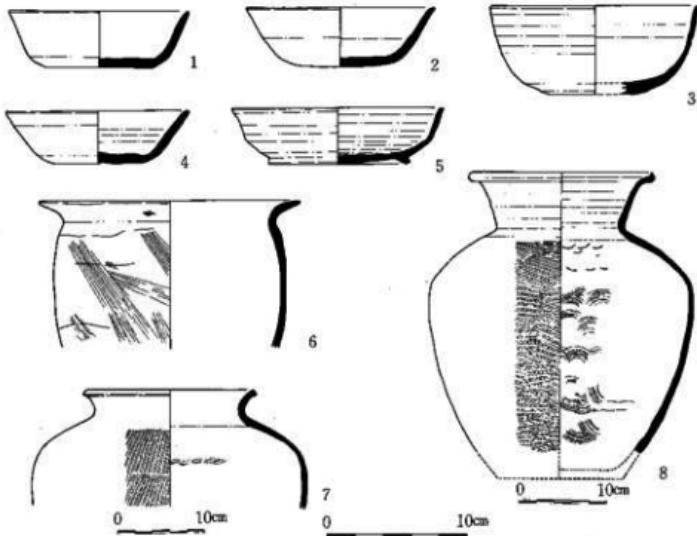
第50号住居址



第51号住居址

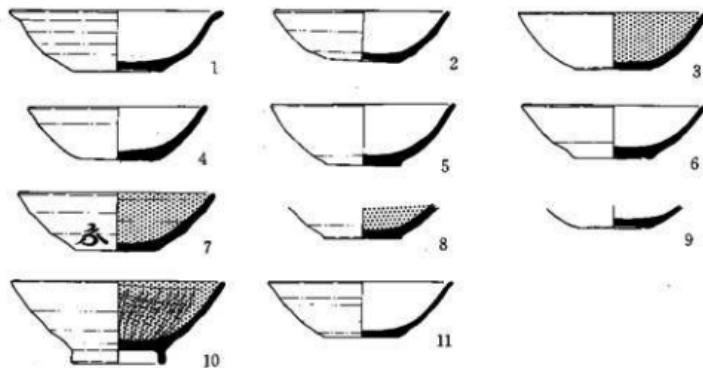


第52号住居址

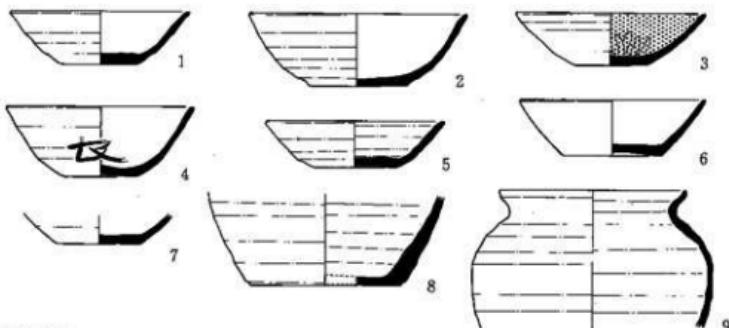


第62図 第50号、第51号、第52号住居址出土土器

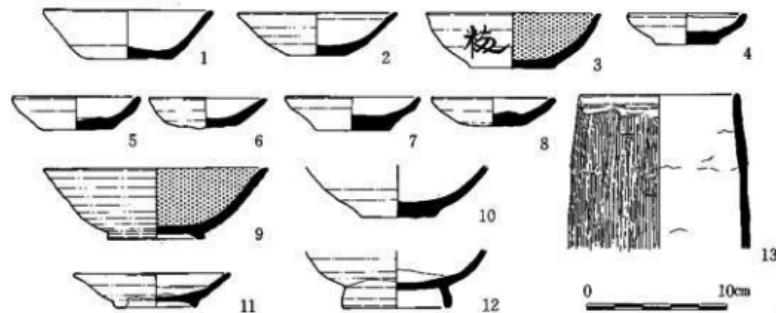
第53号住居址



第54号住居址

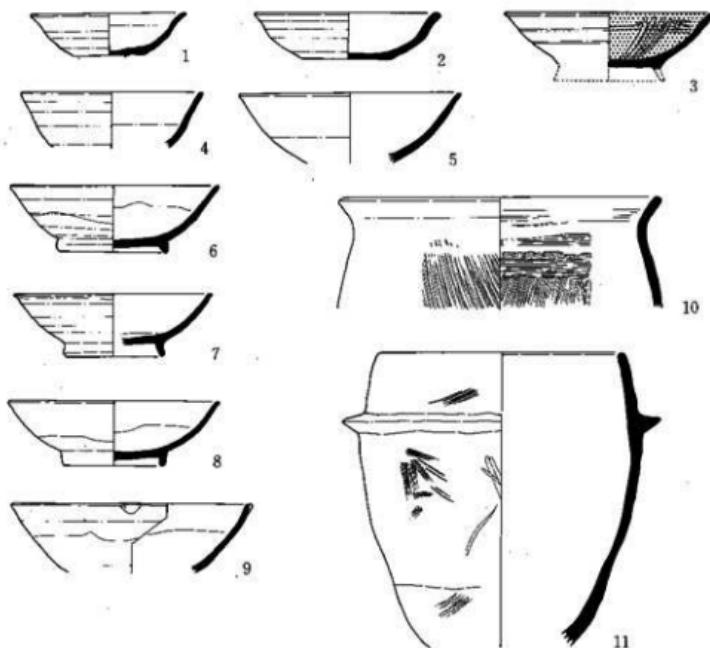


第55号住居址



第63図 第53号、第54号、第55号住居址出土土器

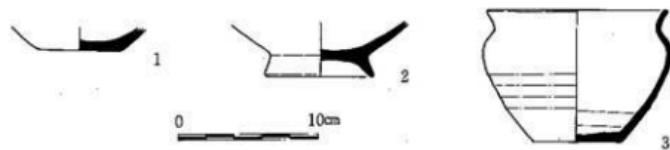
第56号住居址



第57号住居址

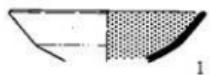


第59号住居址



第64圖 第56號、57號、59號住居址出土土器

第60号住居址



1

第61号住居址



1

第62号住居址



1



2



3

第63号住居址

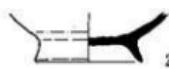


1

第65号住居址



1



2



3



4



5

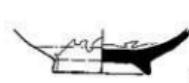


6

第67号住居址



1

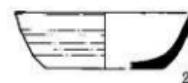


2

第69号住居址



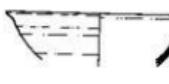
1



2



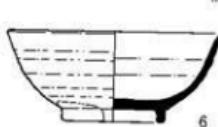
3



4



5



6

第70号住居址



1

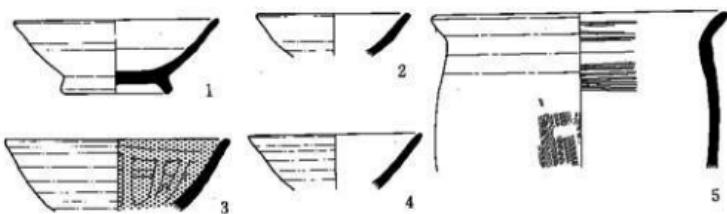


2



第65图 第60号、第61号、第62号、第63号、第65号、第67号、第69号、第70号住居址出土土器

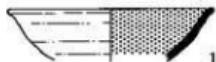
第71号住居址



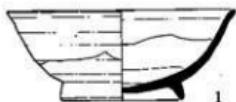
第72号住居址



第74号住居址



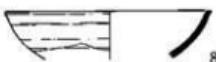
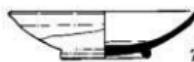
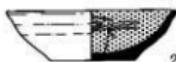
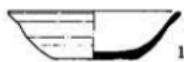
第75号住居址



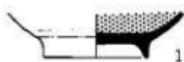
第76号住居址



第77号住居址



第78号住居址



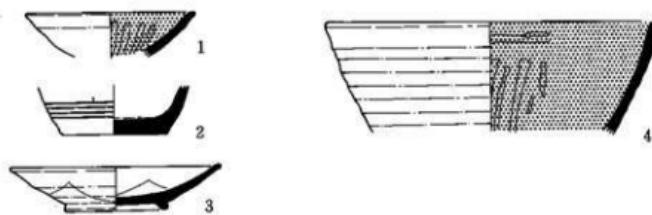
第80号住居址



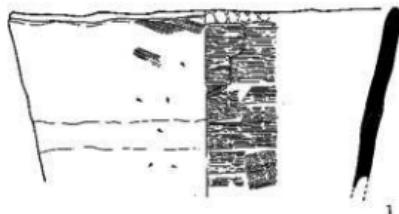
0 10cm

第66图 第71号、72号、74号、75号、76号、77号、78号、80号住居址出土土器

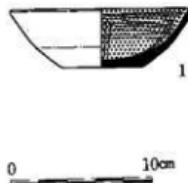
第81号住居址



第83号住居址



第2号建物址



第67図 第81号、83号住居址、第2号建物址出土土器

第1号住居址

第1表 出土土器觀察表

住居 番号	種別	器種	法量	色調	成形・調整の特徴		備考
					器内	外面	
43 1	土器	环	器内 口径 3.6	4.8 暗褐色	水褐色	水褐色	ロクロナデ、内面ヘラミガキ、放射状溝文、内面黒色處理
2	"	"	"	6.4 黑色	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、内面ヘラミガキ、内面黒色處理、山根糸切り
3	"	"	"	4.6 " " "	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、内面ヘラミガキ、内面黒色處理、山根糸切り
4	"	"	"	6.2 " " "	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、内面ヘラミガキ、内面黒色處理、山根糸切り
5	"	盤	"	10.4 赤褐色	赤褐色	赤褐色	外輪研毛日、内面は切削標記へナダ。のち縦、横位ヘラケズリ カマド焼。

第2号住居址

43	1	土器	环	器内 口径 15.2	黑色	明褐色	ロクロナデ、圓柱糸切り、内面黒色處理	
							外輪研毛日	内面研毛日
2	"	"	"	"	"	"	ロクロナデ、圓柱糸切り、内面黒色處理	高台の欠失
3	組	器	四耳壺	"	"	"	外國タキナ、凸筋貼りつけ	

第3号住居址

43	1	土器	环	器内 口径 24.9	暗褐色	暗褐色	ロクロボ、外輪研毛日、山根内面回転を用いた削毛目、内面輪研毛日	
							外輪研毛日	内面輪研毛日
2	"	"	"	"	"	"	ロクロボ、外輪研毛目、口輪内面回転を用いた削毛目	
3	"	"	"	"	"	"		

第4号住居址

43	1	土器	环	器内 口径 5.7	暗褐色	赤褐色	ロクロナデ、内面ヘラミガキ、圓柱糸切り	
							明褐色	明褐色
2	"	"	"	4.4 4.2 3.1	13.7 13.2 6.3	5.2 " " "	ロクロナデ、圓柱糸切り	ロクロナデ、圓柱糸切り
3	"	"	"	"	"	"	ロクロナデ、圓柱糸切り	ロクロナデ、圓柱糸切り
4	"	"	"	"	"	"	ロクロナデ、圓柱糸切り	ロクロナデ、圓柱糸切り
5	"	"	"	"	"	"	ロクロナデ、圓柱糸切り	ロクロナデ、圓柱糸切り
6	"	"	"	"	"	"	ロクロナデ、圓柱糸切り	ロクロナデ、圓柱糸切り
7	"	"	"	"	"	"	ロクロナデ、内面黒色地墨、内面ヘラミガキ	ロクロナデ、内面黒色地墨、内面ヘラミガキ
8	"	"	"	3.5 3.5	12.1 12.1	4.6 " " "	ロクロナデ、内面黒色地墨、内面ヘラミガキ、圓柱糸切り	ロクロナデ、内面黒色地墨、内面ヘラミガキ、圓柱糸切り
9	"	"	"	"	"	"	ロクロナデ、内面黒色地墨、圓柱糸切り、放射状溝文、模刻	ロクロナデ、内面黒色地墨、圓柱糸切り、放射状溝文、模刻
10	"	"	"	"	"	"	ロクロナデ、内面黒色地墨、回転ヘラミガキ	ロクロナデ、内面黒色地墨、回転ヘラミガキ

登録番号	種別	学名	標高	山性	法景			色調			成形・調整の特徴			備考
					内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面
43	土蜘蛛	环			6.2	黑色	暗褐色	ロクロナデ、内面黒色處理、内面ヘラミガキ、圓板糸切り付高台						
44	12	"	"		5.8	"	明褐色	ロクロナデ、内面黒色處理、内面ヘラミガキ、圓板糸切り付高台						
13	"	"	"		6.7	"	赤褐色	ロクロナデ、内面黒色處理、内面ヘラミガキ、圓板糸切り付高台						
14	"	"	"		8.0	"	"	ロクロナデ、内面黒色處理、内面ヘラミガキ、圓板糸切り付高台						
15	"	"	"		4.8	"	暗褐色	ロクロナデ、内面黒色處理、ヘラミガキ、圓板糸切り付高台						
16	"	瓢(小形)	4.2	13.1	7.0	暗褐色	"	ロクロナデ、圓板糸切り						
17	灰蜘蛛	境	"		6.6	灰白色	灰白色	ロクロナデ、圓板糸切り、ヘラケズリ						
18	"	"	"		8.4	"	綠褐色	ロクロナデ、圓板糸切り						
19	"	"	"		7.9	"	灰白色	ロクロナデ、圓板糸切り						
20	"	"	"		7.2	綠褐色	暗褐色	ロクロナデ、圓板糸切り						
21	"	"	"		7.0	灰白色	灰白色	ロクロナデ、圓板糸切り						
22	土蜘蛛	深	"		18.3	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、外面部毛目、内面部糸を用いた刷毛目指正紙						
23	"	"	"		23.0	"	明褐色	ロクロナデ、外面部毛目、内面部糸を用いた刷毛目指正紙						

第5号生原址

44	1	土蜘蛛	环		4.0	13.6	5.6	暗褐色	ロクロナデ、圓板糸切り						
2	"	"	"		4.4	14.3	6.1	黑色	明褐色	ロクロナデ、圓板糸切り、内面黒色處理、ヘラミガキ					
3	"	"	"		4.2	12.9	6.3	黑色	暗褐色	ロクロナデ、圓板糸切り					
4	"	"	"		3.8	13.1	5.5	"	"	ロクロナデ、圓板糸切り	内面黒色處理、放射状筋文				
5	"	"	"		4.4	13.0	5.5	"	"	ロクロナデ、圓板糸切り	内面黒色處理、放射状筋文				
6	"	"	"		7	"	"	6.6 明褐色	赤褐色	ロクロナデ、圓板糸切り	内面黒色處理、放射状筋文				
7	"	"	"		8	"	"	5.9	"	暗褐色	ロクロナデ、圓板糸切り				
9	"	瓢(小形)	12.4	20.6	6.5	暗褐色	"	外面部毛目、内面クロク、圓板糸切り							
10	"	蝶	"		8.0	黑色	暗褐色	ロクロナデ、内面前足糸ミガキ							
11	"	蝶	"		9.3	暗褐色	"	外面部毛目、足部付近、刷毛目、ヘラケズリ							
12	瓢虫	壁	"		23.0	茶灰色	"	内面黒色處理によるナフ。以下刷毛目							
								内面黒色處理	ロクロナデ						

第6号住居址:

借用者登録番号	番種	焼器種	調理法	量	色調			備考
					鍋底	口径	底径	
45 1	土	鍋	坏	4.0	13.8	5.1	暗褐色	暗褐色 ロクロナデ、底面水切り
2	"	"	"	5.7	14.8	7.7	"	黒地色 ロクロナデ、底面水切り、前文
3	灰	柏	焼	6.4	16.2	8.2	灰黑色	灰黑色 ロクロナデ、底面回転ヘラケズリ
4	"	"	"	5.3	16.6	9.4	灰白色	灰白色 ロクロナデ、底面水切り、底部の一部回転ヘラケズリ
5	"	"	"	4.6	14.5	8.0	"	" ロクロナデ、底面水切り、油合付近回転ヘラケズリ
6	灰	柏	焼	"	8.4	灰白色	灰白色 ロクロナデ、底面水切り	" ロクロナデ、底面水切り
7	"	"	"	2.1	12.6	5.9	"	" ロクロナデ、底面回転ヘラケズリ
8	"	"	"	2.5	12.1	6.2	黄白色	黄白色 ロクロナデ、底面回転ヘラケズリ
9	"	"	"	"	8.4	灰白色	灰白色 ロクロナデ、底面水切り、のち回転ヘラケズリ	" ロクロナデ、底面水切り
10	"	"	"	"	7.1	灰黄色	灰黄色 茶褐色	茶褐色 外周刷毛目、裏面内面回転を用いた刷毛目
11	灰	柏	半生飯	"	"	"	淡绿色	淡绿色 茶褐色
12	土	陶	裏	"	19.6	"	"	茶褐色 茶褐色

第7号住居址:

借用者登録番号	番種	所	量	2.0	9.3	3.5	明褐色	明褐色 ロクロナデ、底面水切り	ロクロナデ、底面水切り
				1.6	9.1	3.9	暗褐色	ロクロナデ、底面水切り	
45 1	土	陶	坏	4.0	13.2	6.2	茶褐色	茶褐色 ロクロナデ、底面水切り	茶褐色 ロクロナデ、底面水切り、内面ヘミガキ
2	"	"	"	3.5	12.7	5.3	暗褐色	暗褐色 ロクロナデ、底面水切り	暗褐色 ロクロナデ、内面底色免理
3	"	"	"	"	14.2	"	"	" ロクロナデ、底面水切り	" ロクロナデ、底面水切り
4	"	"	"	4.0	12.6	5.0	灰褐色	灰褐色 ロクロナデ、底面水切り	灰褐色 ロクロナデ、底面水切り
5	"	"	"	4.0	12.9	5.8	茶褐色	茶褐色 ロクロナデ、底面水切り	茶褐色 ロクロナデ、底面水切り
6	"	"	"	4.8	13.4	6.4	深褐色	深褐色 ロクロナデ、底面水切り	深褐色 ロクロナデ、底面水切り
7	"	"	"	"	"	7.2	赤褐色	赤褐色 ロクロナデ、底面水切り	赤褐色 ロクロナデ、底面水切り
8	"	"	"	"	"	5.6	明褐色	明褐色 ロクロナデ、底面水切り	明褐色 ロクロナデ、底面水切り
9	"	"	"	"	"	7.1	黑色	黑色 ロクロナデ、底面水切り、内面底色免理	黑色 ロクロナデ、底面水切り

標 番 号	種 別	浴 種	法 飛	色 調	成形・調整の特徴				備 考	
					輪 幅	口徑	底深	内 面	外 面	
45	10 土 脚	變(小形)			11.9		7.5	赤褐色	暗褐色	クロロナデ
11	"	"			"	3.4	5.5	赤褐色	茶褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、放射状輪文
12	"	"	變		"	3.7	5.0	"	明褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、内面黑色處理、ヘラミガキ
13	"	"	"		"	22.8	21.6	赤褐色	赤褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、内面黑色處理、ヘラミガキ

第9号住居址

46	1 土 脚	坏	4.8	12.7	6.2	黑色	棕褐色	ロクロロナデ、回転糸切り、内面黑色處理、放射状輪文	
2	"	"	3.7	13.4	5.2	"	赤褐色	ロクロロナデ、回転糸切り、内面黑色處理、放射状輪文	
3	"	"	"	13.5	5.5	"	茶褐色	ロクロロナデ、回転糸切り、内面黑色處理	
4	"	"	"	13.0	5.0	"	明褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	
5	"	"	"	18.6	"	"	黃褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	
6	"	"	"	12.9	"	"	赤褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	
7	深 十 恩	脚	"	12.9	5.7	黑色	棕褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ、座事状輪文	重み寄り
8	"	"	"	13.9	"	"	棕褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	
9	"	"	"	23.1	"	"	黃褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	
10	"	"	"	23.4	"	"	褐褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	
11	"	"	"	23.0	"	"	赤褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	
12	"	"	"	22.2	"	"	棕褐色	ロクロロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	

第10号住居址

46	1 上 脚	坏	4.7	12.6	5.0	黑色	赤褐色	ロクロロナデ、回転糸切り、内面黑色處理	
2	"	"	"	13.2	"	"	赤褐色	ロクロロナデ	
3	"	"	"	4.9	12.8	5.4	黑色	ロクロロナデ、回転糸切り、内面黑色處理、ヘラミガキ	
4	"	"	"	3.6	13.5	7.0	棕褐色	ロクロロナデ、回転糸切り	
5	"	"	"	3.3	12.7	5.3	黃褐色	ロクロロナデ、回転糸切り	
6	"	"	"	"	"	7.0	褐色	ロクロロナデ	
7	"	"	"	"	"	6.5	赤褐色	ロクロロナデ、回転糸切り	

管所 番号	種別	種類	注量	色調			成形・調整の特徴			備考
				溶媒	11透底透	内面	背面	内面	背面	
46	8 土	灰	灰		5.5	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
47	9 "	"	"		6.4	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
10	"	"	"	2.2	9.4	5.2 黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
11	"	"	"		6.4	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
12	"	"	"		6.1	"	"	ロクロナデ、回転糸切り		
13	"	"	"	4.0	13.4	6.4 黑色	明褐色	ロクロナデ、回転糸切り、内面黒色処理、ヘラミガキ、十字形刮文		
14	"	"	"	3.8	13.4	5.5 "	赤褐色	ロクロナデ、回転糸切り、内面黒色処理、ヘラミガキ		
15	"	"	"		5.9	"	黄褐色	ロクロナデ、回転糸切り、内面黒色処理、十字形刮文		
16	"	"	"		7.0	"	"	ロクロナデ、回転糸切り、内面黒色処理		
17	灰	粉	粉	6.0	15.1	6.6 灰白色	灰白色	ロクロナデ		
18	"	"	"		7.5	"	"	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ		
19	"	黑	黑		15.0	"	"	ロクロナデ、底部下ナット板回転ヘラケズリ		
20	"	灰	灰			6.5	"	ロクロナデ、底部下ナット板回転ヘラケズリ		
21	"	棕	棕	2.1	12.0	5.3	"	ロクロナデ		
22	手引付	"	"	1.4	11.4	9.5 増褐色	增褐色	指压紙着しい		浅い凹状
47	1 土	灰	灰		13.9	褐色	褐色	ロクロナデ		
2	"	"	"		12.7	黑色	淡褐色	ロクロナデ、内面黒色処理		
3	"	"	"	4.1	13.2	5.0 "	"	ロクロナデ、内面黒色処理、ヘラミガキ、回転糸切り		
4	"	"	"		15.3	"	"	ロクロナデ、内面黒色処理、ヘラミガキ		
5	"	"	"		13.5	"	"	ロクロナデ、内面黒色処理、ヘラミガキ		
6	"	"	"		13.5	"	"	ロクロナデ、内面黒色処理、ヘラミガキ		
7	"	"	"		13.9	"	明褐色	ロクロナデ、内面黒色処理、ヘラミガキ、付箋右		
8	"	"	"		5.6	"	"	ロクロナデ、内面黒色処理、回転糸切り		
9	"	"	"		6.4	明褐色	"	ロクロナデ、回転糸切り		
10	"	"	"		5.4	黑色	"	ロクロナデ、回転糸切り、内面黒色処理		
11	"	"	"		7.0	褐色	褐色	ロクロナデ		

第11号生述地

住	姓	種	性	年齢	法	骨	色	面	成形・調査の特徴				備考
									高	底盤	内面	外面	
47	灰	猪	雄	4.9	17.6	7.6	灰白色	灰白色	ロクロナデ、体部下面・背部頭部へラケズリ				
13	"	"	"	5.0	16.7	7.9	"	"	ロクロナデ、体部下・回転ヘラケズリ				
14	"	"	"	"	17.1	"	"	"	ロクロナデ、体部下半回転ヘラケズリ				
15	"	"	"	"	18.2	"	"	"	ロクロナデ				
16	"	段	雄	"	17.0	"	"	"	ロクロナデ				
17	"	"	"	"	7.1	"	"	"	ロクロナデ				
18	"	"	"	"	7.1	"	"	"	ロクロナデ				
19	"	"	"	"	6.6	"	"	"	ロクロナデ				
20	"	"	"	"	7.1	"	"	"	ロクロナデ				
21	"	"	"	"	4.6	"	"	"	面盤ヘラケズリ、回転糸切り				
22	"	"	黄	"	10.9	"	"	"	ロクロナデ				
23	"	"	"	"	11.0	"	"	"	ロクロナデ				
24	子	鈎	翼	"	10.3	暗褐色	明褐色	明褐色	ロクロナデ、回転糸切り				
25	"	"	翼(小形)	"	10.6	"	"	"	ロクロナデ、口輪外側クロクロナデ				
26	"	"	猪	"	12.2	"	"	"	ロクロナデ、口唇外側クロクロナデ				
27	"	"	猪	"	21.6	"	"	"	ロクロナデ、口唇外側クロクロナデ				
28	灰	猪	夜	"	5.3	灰白色	淡蜂色	淡蜂色	ロクロナデ、脚下部回転ヘラケズリ、足部糸切り				

第12号生居址:

48	1	土	脚	环	3.2	13.2	6.0	暗褐色	暗褐色	糞不可能の墨苔	
										2	3.4
	3	東	鹿	鍼	24.3	"	"	青灰褐色	青灰褐色	ロクロナデ、回転糸切り	

第13号生居址:

48	1	上	脚	环	5.2	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、回転糸切り	糞不可能の墨苔		
									2	3.5	
	3	東	鹿	"	"	3.5	12.3	6.2	ロクロナデ、回転糸切り		
	4	"	"	"	"	3.5	12.5	5.6	ロクロナデ、回転糸切り		

登録番号	種別	群種	器	法基調				成形・調整の特徴				備考
				器輪	内径	外径	内面	外側	内面	外側	内面	
48	5 頭	馬	环	3.8	12.7	6.7	青灰色	青灰色	ロクロナデ、回転糸切り			
6	灰	角	環	2.2	11.9	5.6	灰白色	灰白色	ロクロナデ			
7	"	"	環	"	8.2	"	"	"	ロクロナデ、底部凹長ヘタケズリ			
8	土	脚	速	"	19.2	暗褐色	暗褐色	"	ロクロナデ、脚部外周部毛柱、口輪内面頭部による刷毛日	No.3・4・6機合、外面黒色模大物付着		
9	"	"	"	"	16.2	"	"	"	ロクロナデ			
11	"	"	"	"	7.3	"	"	"	外側脚毛、内面脚毛アホナダ			
				"	10.7	"	"	"	外側脚毛アホナダ、内面ヨコナダ、底部は丸			

第14号生居社

49	1 土	脚	环	3.7	11.6	5.4	黑色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り、内面黒色處理		
2	2 頭	脚	环	3.8	12.8	6.6	灰黑色	灰黑色	ロクロナデ、回転糸切り		
3	"	"	环	3.9	12.6	5.6	青灰色	青灰色	ロクロナデ、回転糸切り		
4	"	"	环	"	11.1	"	"	"	ロクロナデ、底部凹長ヘタケズリ		
5	"	"	蓋	2.6	12.6	"	"	"	ロクロナデ、天井部上半回転ヘタケズリ		

第15号生居社

49	1 土	脚	环	3.8	13.4	6.6	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
2	"	"	环	3.5	12.7	6.3	"	"	ロクロナデ、回転糸切り		
3	"	"	环	"	13.2	黑色	黑色	赤褐色	ロクロナデ、内面黒色處理、ヘミガキ		
4	"	"	环	4.8	12.5	6.3	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
5	"	"	环	"	7.2	"	"	"	ロクロナデ		
6	"	"	環	2.4	9.8	4.3	淡黃褐色	淡黃褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
7	"	"	環	2.9	9.9	4.5	淡黃褐色	淡黃褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
8	"	"	環	2.6	9.8	4.8	淡黃褐色	淡黃褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
9	"	"	環	2.7	9.5	4.6	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
10	"	"	環	2.2	9.8	4.6	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
11	"	(小) 脚	蓋	"	11.0	被毛色	"	"	外側ヘタケズリ、内面は映毛ヨコナダ、以下テクス		
12	"	脚	蓋	"	22.9	被毛色	"	"	内・外側脚毛アホナダ、山輪外面に指狂痕		

第16号住居址

住居 番 号	種 類	構 造	部 位	法 輪				色 調				成形・調整の特徴				備 考
				底径	口径	断面	外 面	明褐色	灰褐色	暗褐色	明褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
49	1 土	16	环	3.3	14.1	5.6	明褐色	明褐色	灰褐色	灰褐色	明褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	カマドより出土 内面に黒色炭化物付着
2	n	n	n	3.8	13.3	6.2	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
3	n	n	n	3.3	14.2	5.1	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
4	n	n	n	n	n	5.1	黑色	黑色	黑色	黑色	黑色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
5	n	n	n	4.2	14.5	7.2	n	n	n	n	n	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
6	n	n	n	4.2	14.5	6.2	n	n	n	n	n	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	

第17号住居址

49	1 土	輪	環	法 輪				色 調				成形・調整の特徴				備 考
				底径	口径	断面	外 面	明褐色	灰褐色	暗褐色	明褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
2	n	n	n	4.0	13.0	7.1	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
3	n	n	n	4.9	15.7	7.9	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
4	n	n	n	3.6	12.0	5.0	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
5	n	n	n	2.4	13.2	6.0	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
6	n	n	n	15.6	n	n	黑色	黑色	黑色	黑色	黑色	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	
7	n	n	n	13.6	n	n	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	
8	n	n	n	4.0	13.4	5.9	黑色	黑色	黑色	黑色	黑色	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	
9	n	n	n	14.5	n	n	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	ロクロナデ、内面黑色處理	
10	n	n	n	11.9	n	n	黄色	黄色	黄色	黄色	黄色	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ	
11	n	n	n	16.2	n	n	黄色	黄色	黄色	黄色	黄色	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、放射状陶文	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、放射状陶文	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、放射状陶文	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、放射状陶文	
12	n	n	n	14.4	n	n	黄色	黄色	黄色	黄色	黄色	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、回転糸切り	
13	n	n	n	n	n	7.7	n	n	n	n	n	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ、回転糸切り	
14	n	n	n	n	n	8.0	n	n	n	n	n	外表面刷毛目、内面織目	外表面刷毛目、内面織目	外表面刷毛目、内面織目	外表面刷毛目、内面織目	
15	n	n	n	n	n	20.9	n	n	n	n	n	ロクロナデ、体部下半部鉛ヘタケリ、3ないし5の輪花	ロクロナデ、体部下半部鉛ヘタケリ、3ないし5の輪花	ロクロナデ、体部下半部鉛ヘタケリ、3ないし5の輪花	ロクロナデ、体部下半部鉛ヘタケリ、3ないし5の輪花	
16	n	n	n	n	n	18.5	n	n	n	n	n					

第18号住居址

50	1 土	輪	环	3.3	12.5	5.5	黑色	青褐色	青褐色	青褐色	青褐色	ロクロナデ、内面ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面ヘミガキ、回転糸切り	ロクロナデ、内面ヘミガキ、回転糸切り	備 考
												「春山」				

番号	種別	品種	法量	色調	成形・調整の特徴	備考
			苦酒	口添 底添	内面 外面	
50	2 土師	坏	3.3	13.1	6.6 赤褐色	赤褐色 ロクロナデ、内面ヘミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
3	"	"	4.0	13.0	6.1 黑色	黒色 ロクロナデ、内面ヘミガキ、回板糸切り、黒色處理
4	"	小形實	"	11.8	暗赤褐色	暗赤褐色 外面部カキ目、内面ロクロナデ、口輪部カキ目
5	須恵	坏	3.6	13.0	5.6 青灰色	青灰色 ロクロナデ、回板糸切り
6	"	"	3.6	13.0	5.4 白灰色	白灰色 ロクロナデ、回板糸切り

第19号住居世

50	1 土師	坏	3.8	12.6	5.1 淡褐色	暗褐色 ロクロナデ、回板糸切り
2	"	"	3.9	12.1	4.9 黑色	赤褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
3	"	"	3.6	13.2	6.7 黑褐色	黒褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
4	"	"	3.4	12.8	5.6 暗褐色	" ロクロナデ、回板糸切り
5	"	"	4.0	13.0	5.1 黑色	" ロクロナデ、回板糸切り、黒色處理、滑文
6	"	"	3.8	12.6	4.7 "	" ロクロナデ、回板糸切り、黒色處理、滑文
51	7	坏	2.8	13.3	5.1 暗褐色	黄褐色 ロクロナデ、回板糸切り
8	"	"	4.0	13.3	6.0 明赤褐色	明赤褐色 ロクロナデ、回板糸切り
9	"	"	3.8	12.9	6.3 暗褐色	暗褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り
10	"	"	3.7	13.5	6.9 黑色	黒色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
11	"	"	3.6	12.3	4.8 "	明褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
12	"	"	3.4	13.0	6.4 "	赤褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
13	"	"	5.6	17.8	6.8 "	明褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
14	"	"	3.8	13.9	6.3 "	暗褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理
15	"	"	4.9	14.9	7.6 "	" 黒褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理
16	"	"	4.9	14.2	7.0 "	明褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
17	"	"	4.5	14.7	6.2 "	黄褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、回板糸切り、黒色處理、滑文
18	灰釉	黑	2.8	14.8	6.5 灰白色	灰白色 ロクロナデ、外面上下回板ヘラケズリ
19	"	"	2.6	13.8	6.4 灰色	灰色 ロクロナデ、底部回板糸切り
20	"	"	2.8	18.3	8.0 "	" ロクロナデ、外面上下回板ヘラケズリ
21	"	焼	5.5	16.2	7.8 淡黄色	白色 ロクロナデ、外面上下回板ヘラケズリ

第20号住居址

当番 花園番号	種別	高 峰	法 量	成形・調整の特徴			備 考
				脚 高	口性 底邊	内 面	
51 1 土 師	坪	坪	3.3	11.6	6.4	暗褐色	暗褐色 ロクロナデ、回転承切り
2 " "	"	"	3.0	11.0	6.1	"	ロクロナデ、回転承切り
3 " "	"	"	4.6	14.2	7.5	"	ロクロナデ、回転承切り、付高台、部分ヨコナデ
4 " "	"	"	"	"	7.1	"	ロクロナデ、底面承切りのちナデ、底面ヨコナデ
5 " "	"	"	3.4	13.3	5.6	黑色	ロクロナデ、底面承切りのちナデ、内面無色處理、板附状略文 所墨の生焼き、内面に細長いワラ状紋
52 6 須 恩	坪	坪	7	10.8	"	灰褐色	灰褐色 ロクロナデ、回転承切り
8 " "	"	"	"	19.1	"	青灰色	青灰色 ロクロナデ、内面ヨコナデ
9 医 俗	坪	坪	4.1	15.1	7.5	灰白色	灰白色 ロクロナデ、回転承切り、付高台
10 " "	"	"	4.4	14.0	6.2	"	ロクロナデ、底面ヘラケズリ、付高台
11 " "	"	"	"	15.0	"	"	ロクロナデ、体部下凹ヘラケズリ
12 " "	"	"	"	15.1	"	"	ロクロナデ、
13 " "	"	"	"	14.0	"	"	ロクロナデ
14 " "	"	"	"	6.1	"	暗灰色	ロクロナデ
15 " "	"	"	2.4	12.3	6.5	灰白色	ロクロナデ、体部下凹ヘラケズリ
16 " "	"	"	2.0	12.0	6.1	"	ロクロナデ、付高台部分ヨコナデ
17 " "	"	"	"	14.7	青灰色	青灰色 外表面ヘラケズリ、内面ロクロナデ	内面にスス付繊 No.3、5、10、15、18、25、40番合
18 " 長頭駄	"	"	"	6.5	"	青灰色 鮮灰色	ロクロナデ
19 " "	"	"	"	9.4	淡绿色	淡绿色 ロクロナデ、脚下半回転ヘラケズリ	ロクロナデ
20 " "	"	"	"	10.0	灰白色	灰白色 ロクロナデ、底部切削ヘラケズリ	ロクロナデ
21 緑 物	坪	坪	"	9.4	淡绿色	淡绿色 ロクロナデ	ロクロナデ
22 " "	"	"	"	12.5	"	"	内・外ともに炭化物の付着が厚い
23 土 師	坪	坪	"	22.2	黑褐色	黑褐色 ロクロナデ、脚部外側ヨコナデ、脚部内側ヨコナデ	ロクロナデ
24 " "	"	"	"	22.9	"	"	ロクロナデ、脚部外側ヨコナデ、脚部内側ヨコナデ
25 " "	"	"	"	19.3	青褐色	青褐色 ロクロナデ、脚部外側ヨコナデ、脚部内側ヨコナデ	ロクロナデ
26 " "	"	"	"	15.9	暗褐色	暗褐色 ロクロナデ、脚部外側ヨコナデ、脚部内側ヨコナデ	ロクロナデ
27 " "	"	"	"	23.5	"	"	ロクロナデ、脚部外側ヨコナデ、脚部内側ヨコナデ

出題 番 号	種 別	形 態	法 則	色 調	成形・調整の特徴				備 考
					内面	外 面	内面	底辺	
53	28 土 壁 槌 垂	22.0	27.1	赤褐色	口縫外側ヨコナデ、内面上半部底ハケナデ、下半部ナデ	No.1、41枚合			
29	" "	"	"	暗褐色	口縫下半部ハケナデ、内面上半部底ハケナデ、外側ナデ、内面ナデ				
38	" "	"	"	赤褐色	口縫内外側ヨコナデ、内面下半部底ハケナデ				
				赤褐色	上半部底	外表面付着			

第21号住居址

54	1 床 線 痕	4.3	16.8	青灰色	灰白色	灰褐色	ロクロナデ、天井外側上半部底ハケナデ	
2	" "	3.2	15.6	灰褐色	灰褐色	"	ロクロナデ、底面切	
3	" 痕	1.6	12.2	灰白色	灰白色	"	ロクロナデ、底面切	
4	土 壁 槌 垂	5.6	7.8	明褐色	明褐色	"	ロクロナデ	

中心部に龜裂
発見

第22号住居址

54	1 上 間 痕	6.1	14.4	黑色	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、底面切	
2	" "	6.5	14.4	"	"	"	ロクロナデ、内面黒色切	
3	" "	6.0	15.0	6.4	"	"	ロクロナデ、内面黒色切	
4	" "	5.9	15.2	7.9	"	"	ロクロナデ、内面黒色切	
5	" "	5.0	13.9	6.4	"	"	ロクロナデ、内面黒色切	
6	" "	5.0	13.4	6.5	"	"	ロクロナデ、内面黒色切	
7	" "	5.0	13.4	6.5	"	"	ロクロナデ、内面黒色切	
8	" 鋼 痕	22.0	"	"	"	"	ハケナデ、鈎はケズリ	
9	床 物 城	"	15.6				ロクロナデ、底面切	
10	" "	"	14.0				ロクロナデ	
11	" "	"	21.6				ロクロナデ	
12	" "	"	13.3	"	"	"	ロクロナデ	

底部に爪で押した痕

第23号住居址

住戸番号	番号	階級	法量	色調				備考
				高性	底性	内面	外面	
54	13 床	上	1.8	12.8	6.8	灰白色	灰白色	ロクロナデ、回転ヘラケズリ
14	"	段	2.3	14.3	7.2	乳白色	乳白色	ロクロナデ、圓盤ヘラケズリ、付高合
15	"	床	"	"	7.0	"	"	ロクロナデ、回転糸切り、付高合
16	"	"	"	"	7.6	暗灰色	"	ロクロナデ、
17	"	"	"	"	7.8	灰白色	灰白色	ロクロナデ、回転糸切り、付高合
18	"	"	"	"	6.8	"	"	ロクロナデ、回転糸切り、付高合、体部下半回転ヘラケズリ
19	土間	床	2.7	9.8	4.9	淡黃褐色	淡黃褐色	ロクロナデ、回転糸切り
20	"	"	2.7	9.4	4.6	水褐色	水褐色	ロクロナデ、回転糸切り
21	"	"	2.6	9.9	5.4	灰黑色	灰黑色	ロクロナデ、回転糸切り
22	"	"	2.4	9.9	5.3	褐色	褐色	ロクロナデ、回転糸切り

第24号住居

55	1 土間	坪	3.8	13.2	5.1	黑色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り
2	"	"	3.7	12.7	4.0	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、回転糸切り
3	"	"	"	12.9	"	黑色	淡褐色	ロクロナデ、内面黒色處理、ヘミガキ
4	床	床	"	16.0	"	灰白色	灰白色	ロクロナデ
5	"	"	"	6.5	"	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、底盤回転ヘラケズリ
6	土間	坪	"	21.3	"	暗褐色	暗褐色	ロ輪外側ナデ、内面漆を用いたハケヌ、脚外張ハケヌ

第25号住居

55	1 土間	坪	3.6	11.6	5.5	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、回転糸切り
2	"	"	3.2	11.1	6.4	"	"	ロクロナデ、回転糸切り
3	"	"	3.2	11.5	6.0	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、回転糸切り
4	"	"	2.7	11.2	6.3	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り
5	"	"	5.0	13.8	6.7	甲板色	甲板色	ロクロナデ、回転糸切り
6	床	床	5.6	18.0	8.6	乳白色	乳白色	ロクロナデ、回転糸切り、体部下半回転ヘラケズリ
7	"	"	4.0	12.2	6.4	綠灰色	綠灰色	ロクロナデ、回転糸切りのちナナデ
8	"	"	3.0	12.2	6.2	明灰褐色	明灰褐色	ロクロナデ、回転糸切りの後

書籍番号	性別	器種	法量	成形・調製の特徴				備考
				器形	口径	底述	内腹面	
55	9	灰釉	直	2.5	12.4	6.1	灰白色	灰白色
10	"	"	"	2.4	10.5	5.6	"	ロクロナデ、底部削輪へラケズリ
11	"	"	"	2.0	11.9	7.0	"	ロクロナデ、底部削輪へラケズリ
12	"	(壺)	"	"	12.0	"	"	ロクロナデ、底部削輪へラケズリ
13	"	直	"	13.5	"	"	"	ロクロナデ、輪化
14	"	壺	"	"	7.0	"	"	ロクロナデ、底部削輪へラケズリ
15	"	段壺	"	15.1	"	"	"	ロクロナデ、底部下部削輪へラケズリ
16	"	壺	"	"	6.7	"	"	ロクロナデ、底部削輪へラケズリ
17	"	長颈瓶	"	"	"	"	"	ロクロナデ、肩部削輪へラケズリ

第26号住居址

書籍番号	性別	器種	法量	成形・調製の特徴				備考
				器形	口径	底述	内腹面	
56	1	土師	壺	3.0	15.1	6.0	明褐色	明褐色
2	2	漆	"	6.7	14.2	9.3	青灰色	青灰色

第27号住居址

書籍番号	性別	器種	法量	成形・調製の特徴				備考
				器形	口径	底述	内腹面	
56	1	須恵	壺	3.8	12.6	5.6	青灰色	ロクロナデ、底部削輪
2	"	"	"	3.9	13.7	10.9	白灰色	ロクロナデ、底部削輪へラケズリ、ヘラケズリ
3	"	壺	"	2.0	7.7	"	"	ロクロナデ、一段ケズリ

第28号住居址

書籍番号	性別	器種	法量	成形・調製の特徴				備考
				器形	口径	底述	内腹面	
56	1	土師	壺	4.0	11.7	5.3	褐色	ロクロナデ、
2	"	"	"	3.9	11.4	5.8	暗褐色	ロクロナデ、内腹下部へラケズリ、圓底斜切

第29号住居址

書籍番号	性別	器種	法量	成形・調製の特徴				備考
				器形	口径	底述	内腹面	
56	1	土	壺	"	"	"	"	本社からは出土遺物が極めて少なく、出土土器も図示し得ない。
2	"	"	"	"	"	"	"	第23号住居址と重複しているため、重複部分から土器群が若干出土しているが、所蔵が不明確でないため除外した。

社 團 登 記 號	種 別	器 體	法 量	色 調				成形・調整の特徴	備 考
				高 度	口徑	底径	外 面		
56	3 土 置	环	3.7	12.7	6.0	所褐色	灰褐色	ロクロナデ、留板糸切り	
4	"	"	3.9	12.7	6.0	黄褐色	灰褐色	ロクロナデ、留板糸切り	
5	"	"	3.5	12.9	5.9	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、留板糸切り	
6	"	"	"	12.8	"	褐褐色	褐褐色	ロクロナデ	
7	"	"	"	12.8	"	黑色	黑色	ロクロナデ、内面黑色處理	
8	"	"	"	11.3	"	"	黄褐色	ロクロナデ、内面黑色處理	
9	"	"	4.5	12.6	5.6	"	黑褐色	ロクロナデ、留板糸切り、内面黑色處理、ヘラミガキ、放射状紋文	
10	"	"	"	"	7.0	黑色	赤褐色	ロクロナデ、留板糸切り、内面アーチガキ	
11	"	"	"	"	3.7	黑色	黄褐色	ロクロナデ、留板糸切り、内面黑色處理	
12	"	"	"	"	11.4	黄褐色	"	外部ヘラケツリ	
13	"	"	"	5.0	黑色	黑色	黑色	ロクロナデ	
14	灰-釉	塊	"	"	7.7	灰白色	灰褐色	ロクロナデ、留板ヘラケツリ	
15	"	"	"	"	7.2	"	"	ロクロナデ、留板ヘラケツリ	
16	"	"	"	"	16.2	青灰色	青灰色	ロクロナデ	

第31号住居址

57	1 土 置	环	4.4	14.5	6.4	褐色	暗褐色	ロクロナデ、留板糸切り	
2	"	"	4.0	13.2	6.2	明褐色	明褐色	ロクロナデ、留板糸切り	
3	"	"	"	"	5.1	黑色	灰褐色	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘラミガキ	
4	"	"	"	14.5	"	明褐色	明褐色	ロクロナデ、わすか内面黑色處理、研文	
5	"	"	"	12.6	"	"	"	ロクロナデ	
6	"	"	"	12.8	"	"	"	ロクロナデ、留板糸切り	
7	"	"	"	5.6	黑色	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、留板糸切り	
8	"	"	"	6.6	"	明褐色	明褐色	ロクロナデ	
9	須 置	"	3.8	13.7	6.0	青灰色	青灰色	ロクロナデ、留板糸切り	
10	"	"	3.8	11.9	6.1	"	"	ロクロナデ、留板糸切り	
11	"	"	3.9	13.3	6.2	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、留板糸切り	
12	"	"	3.5	12.9	5.8	青灰色	青灰色	ロクロナデ、留板糸切り	

参考 社団等 名	番 号	種 別	器 種	法 量				色 調				成形・調整の特徴				備 考
				器 高	口徑	底 径	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面		
57	13	瓶	瓶	3.6	13.5	6.5	青灰	青灰	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	内面一部に炭化物付着	
14	"	"	"	3.3	12.4	5.5	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
15	"	"	"	3.7	12.9	5.5	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
16	"	"	"	4.1	12.8	6.0	灰白色	灰白色	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	体部半圓柱へラケズ	
17	"	"	"	3.6	12.3	6.5	青灰	青灰	"	"	"	"	"	"	ビット10 出土	
18	"	"	"	"	12.8	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
19	"	"	"	6.0	14.2	8.4	"	"	"	"	"	"	"	"	No.13・25兼合	
20	"	"	"	6.4	15.6	9.3	"	"	"	"	"	"	"	"		
21	"	"	"	6.7	15.6	10.1	"	"	"	"	"	"	"	"		
22	"	"	"	6.8	13.6	9.7	"	"	"	"	"	"	"	"		
23	"	"	"	4.4	11.0	7.2	灰白色	灰白色	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	底盤圓板糸切り	
24	"	"	"	4.0	11.2	8.0	青灰	青灰	"	"	"	"	"	"		
25	"	"	"	3.7	12.2	9.4	"	"	"	"	"	"	"	"		
26	"	"	"	"	13.8	"	青灰	青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	
27	"	"	"	"	"	9.0	"	"	"	"	"	"	"	"		
28	"	"	"	"	"	7.4	"	"	"	"	"	"	"	"		
29	"	"	"	"	12.5	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
30	"	"	甕(小形)	"	"	6.3	"	"	"	"	"	"	"	"		
31	"	"	甕	"	"	12.7	"	"	"	"	"	"	"	"		
32	"	"	甕(小形)	"	"	19.8	青灰	青灰	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	ロクロナデ、底盤糸切り	内面黑色斑点	
33	土 師	"	甕	"	"	13.4	13.5	6.9	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	内面黑色斑点	
34	"	"	"	"	"	4.6	11.4	5.7	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	内面黑色斑点	
35	"	"	"	"	"	23.3	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	内面黑色斑点	
36	"	"	"	"	"	22.0	"	"	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	内面黑色斑点	
37	"	"	"	"	"	21.8	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	内面黑色斑点	
38	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		

第32号住居址

住居 番 号	構 造 形 態	壁 材	窓 口 高	法 量	色 調			成形・調整の特徴			備 考
					内 面	外 面	底 面	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
58	1 土 壁	环	3.2	11.2	4.4	淡褐色	淡褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	2 "	"	3.7	12.8	5.2	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	3 "	"	4.7	13.6	7.6	"	"	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	4 "	"	"	15.1	"	"	"	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	5 灰 墻	塊	5.0	15.2	7.3	灰白色	灰白色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	6 "	"	5.6	17.4	8.7	"	"	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	7 "	"	4.5	14.6	7.1	"	"	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	8 "	"	3.9	12.9	6.5	"	"	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	9 "	"	3.8	12.4	7.0	"	"	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	10 "	"	"	6.6	"	"	"	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	11 "	"	"	6.0	"	"	"	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	12 灰 墻	塊	2.0	11.3	6.0	淡褐色	淡褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	13 土 壁	塊	20.0	6.0	"	黄褐色	黄褐色	ロ接外露ロクロナデ、削形ハメ	ロ接外露ロクロナデ、削形ハメ	ロ接外露ロクロナデ、削形ハメ	

第33号住居址											
59	1 黑 漆	杯	3.5	12.2	6.0	漆灰黑色	漆灰黑色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	2 "	"	4.4	16.7	"	青灰黑色	青灰黑色	ロクロナデ、天井部上半回転ヘラケズリ	ロクロナデ、天井部上半回転ヘラケズリ	ロクロナデ、天井部上半回転ヘラケズリ	混入(覆土)
	3 灰 墻	塊	4.7	13.9	7.3	灰白色	灰白色	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	混入(覆土)
	4 "	"	4.8	16.1	8.3	"	"	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	混入(覆土)
	5 "	"	2.7	13.3	6.1	乳白色	乳白色	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	混入(覆土)

第34号住居址

59	1 土 壁	杯	3.7	12.4	6.1	明褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	底部内外面にスス付着、カマド出土
	2 "	"	4.6	12.7	6.0	苯褐色	苯褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	3 "	"	3.9	12.9	5.8	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	4 "	"	6.4	漆	"	漆	漆	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	
	5 "	"	3.5	14.6	4.9	漆	漆	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ、回転糸切り	

住居番号		機種	機械番号	法量	流量	内面	外周	成形・調整の特徴			備考
59	6	十脚	环	4.9	12.7	4.3	黑色	暗褐色	クロナデ、回転糸切り、内面黒色處理、放射状模文		
	7	n	實	n	23.1	n	茶褐色	明褐色	II輪外面クロナデ、口部内面回転糸を用いたハナデ、脇外観、ケメ、口唇面部取り		

第35号住居番号

59	1	上端	环	13.7	黑色	暗褐色	クロナデ、回転糸切り、内面黒色處理、ヘラミガキ				
	2	n	n	n	7.0	"	クロナデ、回転糸切り、内面黒色處理、				
	3	n	n	6.6	褐色	褐色	クロナデ、回転糸切り				
	4	所持	端	5.5	16.1	灰白色	ロクロナデ、林部ドギー底部回転ヘラゲズリ				
	5	n	皿	3.4	14.5	6.0	ロクロナデ、底部回転ヘラゲズリ				

第36号住居番号

本性からは表示できる出汁器が得られなかつた。

第37号住居番号

59	1	十脚	环	5.5	17.0	7.2	黑色	暗褐色	クロナデ、回転糸切り、内面黒色處理、ヘラミガキ、放射状模文		
	2	n	n	5.0	15.7	6.0	"	"	クロナデ、回転糸切り、内面黒色處理		
	3	n	n	4.1	13.2	5.2	"	"	クロナデ、回転糸切り、内面黒色處理		
	4	n	n	4.5	13.4	6.2	"	實褐色	クロナデ、回転糸切り、内面黒色處理		
	5	n	n	4.0	11.7	6.0	灰褐色	灰褐色	クロナデ、回転糸切り		
	6	n	n	5.7	n	n	"	"	クロナデ、回転糸切り		
	7	n	n	5.4	14.4	6.4	黑色	實褐色	ロクロナデ、回転糸切り、ロクロナデ、内面黒色處理、放射状模文、墨書き		
	8	頭輪	蓋端	n	4.3	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、下半部回転ヘラゲズリ			
	9	床輪	n	n	6.9	乳白色	乳白色	ロクロナデ、下半部回転ヘラゲズリ			
	10	n	n	n	6.0	暗灰色	暗灰色	ロクロナデ、回転糸切り			

第38号住居番号

60	1	土鍋	环	3.8	11.4	4.9	明褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
----	---	----	---	-----	------	-----	-----	-----	-------------	--	--

住居番号	種類	器種	法灰	色	調	成形・調理の特徴		備考
						高	径	
60 2	土 壁	环	3.2	11.3	5.8	断端色	断端色	ロクロナデ、圓板糸切り
3	"	"	3.0	11.4	5.7	茶褐色	茶褐色	ロクロナデ、圓板糸切り
4	"	"	14.0	"	"	"	"	ロクロナデ
5	"	"	14.0	黑 色	"	"	"	ロクロナデ、内面黒色處理

第39号住居址

60	1	灰 精	把手付瓶	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ、把手付

第40号住居址

60	1	灰 精	把手付瓶	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ、把手付

第41号住居址

60	1	灰 精	把手付瓶	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ、把手付

第42号住居址
第42号址に大半が切られ、42号址との重複部分から土師器の出土があるが個別できるものはない。

60	1	灰 精	把手付瓶	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	内外面クロロナデ

第43号住居址

60	1	灰 精	把手付瓶	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ、把手付

ハケメの土師器鏡の出土がみられたが、小片で表示不能である。

60	1	土 壁	环	4.5	14.6	7.1	白褐色	白褐色	ロクロナデ、圓板糸切り
2	"	"	"	"	14.3	"	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、内面黒色處理
3	"	"	"	4.2	13.4	6.8	"	"	ロクロナデ、内面黒色處理、圓板糸切り
4	"	"	"	3.8	13.2	6.0	白褐色	白褐色	ロクロナデ、内面黒色處理、圓板糸切り、墨跡、外側にスス付着
5	"	"	"	"	"	6.6	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、圓板糸切り

住居号	種別	層種	調査の特徴						備考
			器胎	口徑	底径	内面	外面		
60	6	土 壁	环	4.6	12.8	6.9	灰褐色	灰褐色	ロクロナデ、底胎余切り
	7	柱 枕	黑	3.1	15.9	8.0	深绿色	深绿色	
	8	土 所	裏		18.6		暗褐色	暗褐色	ロクロナデ

第45号住居址

土器胎遺存片の出土がある。

第46号住居址

60	1	土 壁	环	3.3	12.3	5.9	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、底胎余切り
	2	"	"	3.1	13.5	6.7	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、底胎余切り
	3	"	"	3.4	11.5	6.0	"	"	ロクロナデ、底胎余切り
	4	"	"	"	"	7.1	"	"	ロクロナデ、底胎余切り、付着物
	5	"	盤	"	"	23.1	"	"	口縁外側ロクロナデ、内面胎輪を用いたハケメ、脚外面ハケメ
	6	"	"	"	"	22.6	青紫色	青紫色	内外面クロロ直

第47号住居址

61	1	土 壁	环	4.5	13.6	6.4	黑色	黑色	ロクロナデ、底胎余切り、内面黑色處理、ヘラミガキ
	2	"	"	3.8	13.6	5.5	灰白色	灰白色	ロクロナデ、底胎余切り
	3	"	盤	"	"	20.2	黑色	黑色	口縁内面胎輪を用いたハケメ、外側ロクロナデ、脚外面ハケメ
	4	"	"	"	"	20.7	暗褐色	暗褐色	口縁内面胎輪を用いたハケメ、内面ロクロナデ、脚外面ハケメ

第48号住居址

61	1	土 壁	环	4.1	13.1	6.6	黑色	黄色	ロクロナデ、底胎余切り、内面黑色處理、放射状鉛文
	2	"	"	3.4	11.5	5.8	"	"	ロクロナデ、底胎余切り、内面黑色處理、放射状鉛文
	3	"	盤	"	"	21.2	明褐色	暗褐色	口縁外側ロクロナデ、脚外部ハケメ、内面、ヘラ状工具によるナナ
	4	"	"	"	"	16.8	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、脚部ハケメ

第49号住居址

住居址番号	種別	特徴	注量・色調						成形・調整の特徴			備考
			高さ	口径	底径	内面	外面					
61	1 土 壁	环	4.5	14.3	4.9	茶褐色	茶褐色	ロクロナデ、底部糸切り				体部外面スス付箋
2	"	"	3.9	13.3	5.6	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、底部糸切り				カマド背面出土
3	"	"	3.3	11.8	4.6	黑色	"	ロクロナデ、底部糸切りのハーフカズリ、内面黑色處理、ヘラミガキ				カマド背面ピット内出土
4	"	"	5.1	15.2	6.7	"	"	ロクロナデ、底部糸切り				内面黑色處理、ヘラミガキ
5	"	"	5.9	13.0	5.9	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、底部糸切り				
6	"	"	21.3	16.6	16.2	青灰色	青灰色	ロクロナデ、天井部外面上半部糸切り				
7	領 意	壁						ロクロナデ、天井部外面上半部糸切り				

第50号住居址

住居址番号	種別	特徴	注量・色調						成形・調整の特徴			備考
			高さ	口径	底径	内面	外面					
62	1 土 壁	环	3.6	11.9	5.5	黑色	暗褐色	ロクロナデ、底部糸切り、内面黑色處理、ヘラミガキ				
2	灰 材	壁	3.4	10.9	4.8	灰白色	灰白色	ロクロナデ、底部糸切り				
3	土 壁	壁	16.6	16.6	16.6	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ				

第51号住居址

住居址番号	種別	特徴	注量・色調						成形・調整の特徴			備考
			高さ	口径	底径	内面	外面					
62	1 土 壁	环	4.3	13.6	5.0	黑色	黄褐色	ロクロナデ、底部糸切り、内面黑色處理、放射状鉛文				
2	"	"	5.2	14.6	6.3	"	黑色	ロクロナデ、底部糸切り、内面黑色處理、ヘラミガキ				
3	"	壁	2.5	13.0	7.0	"	黑色	ロクロナデ、内面黑色處理				
4	"	"	3.0	13.3	6.8	"	褐色	ロクロナデ、内面黑色處理、回転糸切り				
5	灰 材	壁	5.5	17.2	7.0	灰白色	灰白色	ロクロナデ、底部下半部糸切り				
6	"	"	17.0	乳白色	"	"	"	ロクロナデ、底部下半部糸切り				
7	土 壁	壁	19.5	黑褐色	"	"	"	口縫外面ロクロナデ、内面糸を用いたハケメ、制御外面ハケメ				
8	"	"	21.7	暗褐色	"	"	"	内面糸、ヘラ押				

第52号住居址

住居址番号	種別	特徴	注量・色調						成形・調整の特徴			備考
			高さ	口径	底径	内面	外面					
62	1 灰 材	环	4.0	12.9	7.7	白褐色	白褐色	ロクロナデ				
2	"	"	4.2	13.5	7.0	"	"	ロクロナデ				

登録番号	種類別	筋幅	法量	色調			成形・測定の特徴	備考
				横幅	口径	底径		
62	3 漢 市	16	6.3	14.9	6.0	底白色	ロクロナデ、底部回転(→ケズ)	
4	" "	"	3.7	13.1	6.1	"	ロクロナデ、底部回転(→ケズ)	
5	" "	"	4.0	15.2	10.1	青灰色	ロクロナデ	
6	七 部	變	"	18.7	"	暗褐色	口輪内外面クロロナデ、脚部シダ、ハサナデ	
7	漢 市	"	"	19.2	"	明茶灰褐色	口輪内外面クロロナデ、脚部外周タタキ目、内面浮皮	
8	" "	"	"	21.0	"	青灰色	口輪内外面クロロナデ、脚部外周タタキ目	

第53号生層址

63	1	十 門	環	4.3	15.2	5.3	明褐色	ロクロナデ、回転系切り
2	"	"	"	3.5	12.5	5.2	暗褐色	ロクロナデ、回転系切り
3	"	"	"	4.0	13.4	5.4	暗褐色	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理
4	"	"	"	3.7	12.6	5.2	黃褐色	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理、ヘラミガキ
5	"	"	"	4.3	13.1	5.2	"	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理、ヘラミガキ
6	"	"	"	3.8	12.9	5.6	明褐色	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理
7	"	"	"	4.1	14.1	5.8	"	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理、ヘラミガキ
8	"	"	"	"	"	5.4	不褐色	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理、ヘラミガキ
9	"	"	"	"	"	5.0	明褐色	ロクロナデ、回転系切り
10	"	"	"	5.9	15.2	6.5	黑色	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理、放射状斜文
11	"	"	"	4.0	13.1	5.4	底白色	ロクロナデ、回転系切り

第54号生層址

63	1	十 門	環	3.8	12.2	5.6	赤褐色	ロクロナデ、回転系切り
2	"	"	"	5.2	15.6	6.9	黑色	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理
3	"	"	"	3.2	13.6	5.2	"	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理、放射状斜文
4	"	"	"	5.0	13.3	5.3	暗褐色	ロクロナデ、回転系切り、内面黑色處理、ヘラミガキ
5	漢 市	"	"	3.3	12.7	6.0	青灰色	ロクロナデ、回転系切り
6	"	"	"	4.0	13.2	7.0	"	ロクロナデ、回転系切り
7	"	"	"	"	"	5.8	暗褐色	ロクロナデ、回転系切り

番 種 別	器 種	法 量	色 調	成形・調整の特徴				備 考
				口径	底径	内面	外面	
63	1 土瓶	坪	坪	3.9	12.1	6.0	暗褐色	ロクロナデ、底面糸切り
2	"	"	"	3.0	11.4	4.0	明褐色	ロクロナデ、底面糸切り
3	"	"	"	3.9	12.5	6.0	黑色	ロクロナデ、底面糸切り、内面黒色處理
4	"	"	圓	2.1	8.5	4.2	赤褐色	ロクロナデ、底面糸切り
5	"	"	"	2.2	9.1	4.8	暗褐色	ロクロナデ、底面糸切り
6	"	"	"	2.0	8.4	4.0	"	ロクロナデ、底面糸切り
7	"	"	"	2.4	9.7	5.1	"	ロクロナデ、底面糸切り
8	"	"	"	2.0	9.0	4.0	赤黃褐色	ロクロナデ、底面糸切り
9	"	"	16	4.9	15.9	6.9	黑色	ロクロナデ、内面黒色處理、ヘラミガキ
10	"	"	"	5.3	暗褐色	"	底面糸切り	ロクロナデ、底面糸切り
11	灰地	段直	坪	2.3	11.2	5.6	灰褐色	ロクロナデ、底面糸切り
12	"	坪	段	7.6	15.0	7.0	白灰色	ロクロナデ、底面糰粂(タケヌキ)
13	土瓶	段	段	11.6	底面糰粂	"	外面部ハゲメ、内面糊粂ハグ	

第55号住居址:

63	1 土瓶	坪	坪	3.9	12.1	6.0	暗褐色	底面糸切り
2	"	"	"	3.0	11.4	4.0	明褐色	ロクロナデ、底面糸切り
3	"	"	"	3.9	12.5	6.0	黑色	ロクロナデ、底面糸切り、内面黒色處理
4	"	"	圓	2.1	8.5	4.2	赤褐色	ロクロナデ、底面糸切り
5	"	"	"	2.2	9.1	4.8	暗褐色	ロクロナデ、底面糸切り
6	"	"	"	2.0	8.4	4.0	"	ロクロナデ、底面糸切り
7	"	"	"	2.4	9.7	5.1	"	ロクロナデ、底面糸切り
8	"	"	"	2.0	9.0	4.0	赤黃褐色	ロクロナデ、底面糸切り
9	"	"	16	4.9	15.9	6.9	黑色	ロクロナデ、内面黒色處理、ヘラミガキ
10	"	"	"	5.3	暗褐色	"	底面糸切り	ロクロナデ、底面糸切り
11	灰地	段直	坪	2.3	11.2	5.6	灰褐色	ロクロナデ、底面糸切り
12	"	坪	段	7.6	15.0	7.0	白灰色	ロクロナデ、底面糰粂(タケヌキ)
13	土瓶	段	段	11.6	底面糰粂	"	外面部ハゲメ、内面糊粂ハグ	

第56号住居址:

64	1 土瓶	坪	坪	3.0	11.0	5.0	赤褐色	ロクロナデ、底面糸切り
2	"	"	"	3.2	13.2	6.4	"	赤褐色
3	"	"	"	14.9	黑	底面糰粂	ロクロナデ、底面糸切り	
4	"	"	"	12.9	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ	
5	灰地	坪	"	15.8	灰白色	赤褐色	ロクロナデ、底面糰粂(タケヌキ)	
6	"	"	"	4.7	14.8	7.6	"	ロクロナデ、体部下半圓弧ヘタケズリ
7	"	"	"	4.5	14.1	6.7	棘状色	ロクロナデ、底面糰粂(タケヌキ)
8	"	"	"	4.6	15.0	7.0	灰白色	ロクロナデ、底部圓弧ヘタケズリ
9	"	"	"	17.2	"	"	ロクロナデ、輪花	

住居 番 号	種 別	器 種	法 差				色 調				成形・調整の特徴		備 考
			端高	口径	底径	内面	外面	内面	外面	内面	成形・調整の特徴		
54	10	土 膜	透		23.0	明褐色	明褐色	口輪クロロナデ、内面凹輪を用いんハケノ、脚部外周ハケメ 内面ハケナデ					
	11	"	鋼鑄		17.6	暗褐色	暗褐色	脚部ハケナデ					
第57号住居址													
64	1	須 慈	环	4.6	16.0	11.4	青灰色	青灰色	ロクロナデ、底部凹輪ヘラケズリ				
	2	"	"	"	5.7	"	"	"	ロクロナデ、圓底糸切り				
	3	"	透		"	"	"	"	圓底ヘラケズリ				
	4	土 膜	透		7.0	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、圓底糸切り					
第58号住居址													
土器器形断片1が付上している													
第59号住居址													
64	1	土 膜	环		6.0	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、圓底糸切り					
	2	"	"		7.7	明褐色	明褐色	ロクロナデ、圓底糸切り					
	3	須 慈	透	9.4	12.9	6.3	青灰色	青灰色	ロクロナデ、圓底糸切り、口唇部直取り				
第60号住居址													
65	1	土 膜	透	14.0	黑色	褐色	白色	白色	ロクロナデ、内面黑色處理、ヘミガキ				
第61号住居址													
65	1	灰 土	环	3.8	13.0	5.8	青灰色	青灰色	ロクロナデ、圓底糸切り				
	2	"	"	6.4	14.4	9.0	"	"	ロクロナデ、圓底糸切りのちヘラケズリ				
	3	"	長盤	8.4	"	"	灰 色	灰 色	ロクロナデ				
第62号住居址													

第63号住居址

告白 番号	種別	器種	法 畜 色 国				成形・調整の特徴				備 考
			器底	口径	底径	内面	外面	外觀			
65	1	土 壁	环	5.2	15.9	6.8	黑色	明褐色	ロクロナデ、回転糸切り、内面黑色處理		

第64号住居址

土器の出土がみられなかった

第65号住居址

65	1	土 壁	环	3.7	13.3	5.9	黑色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り、内面黑色處理		
	2	"	"	2.3	12.4	6.6	深褐色	茶褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
	3	灰 壁	环	"	"	6.6	乳白色	白色	ロクロナデ、回転糸切り		
	4	土 壁	环	4.7	13.9	5.4	深褐色	深褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
	5	灰 壁	环	20.4	"	"	灰白色	灰白色	ロクロナデ、回転糸切り		
	6	土 壁	舞釜	"	"	"	暗褐色	暗褐色	外面ヨコナデ、指压紙、内面ハケナア		

第66号住居址

土器の出土がみられなかった

第67号住居址

65	1	土 壁	环	4.1	13.9	4.9	明褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
	2	灰 壁	环	"	"	7.0	"	"	ロクロナデ、回転糸切り		

第68号住居址

土器舞釜5片(全て内面黑色處理)、圓錐器环片3片が出土

第69号住居址

65	1	土 壁	环	3.9	12.1	6.6	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、回転糸切り		
	2	"	"	4.0	12.8	8.2	"	"	ロクロナデ、回転糸切り		

器 物 地 點 番 号	種 別	器 種	法 量	色 調	成形・調整の特徴				備 考
					器高	口径	底径	内面 外面	
65	3	土 磁 圈	2.8	黄褐色	19.3	13.4	8.6	黄褐色	ロクロナデ
4	4	灰 磁 圈	n	灰白色	4.7	16.4	8.6	灰褐色	ロクロナデ、頭部下半円錐、体部下半円錐、ヘラケズリ
5	5	n	n	乳白色	6.4	15.4	7.4	n	ロクロナデ、圓錐切替
6	6	n	n	灰白色	n	n	n	n	

第70号住居址

65	1	灰 磁 圈	3.2	11.4	5.6	乳白色	乳白色	ロクロナデ	カマド出土
2	n	n	n	14.3	n	灰白色	灰白色	ロクロナデ	

第71号住居址

66	1	土 磷 磁 圈	5.2	14.6	7.4	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、圓錐切替	内面黒色處理、格子状神文 ロクロナデ、内面黒色處理、格子状神文 ロクロナデ、内面黒色處理、格子状神文 ロクロナデ、内面黒色處理、格子状神文 ロクロナデ、内面黒色處理、格子状神文
2	n	n	n	10.9	n	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ	
3	n	n	n	15.9	n	黑色	黑色	ロクロナデ	
4	n	n	n	12.4	n	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ	
5	n	罐	n	21.0	n	n	n	口縁外周ロ紋、内面ハケメ、腹部外面ハケメ、口沿部面取り	

第72号住居址

66	1	土 磷 磁 (小形)			6.8	暗褐色	暗褐色	ロクロ板、腹部水の栗文	
----	---	------------	--	--	-----	-----	-----	-------------	--

第73号住居址

上器の出土がみられなかつた。

第74号住居址

66	1	土 磷 磁 环			14.5	黑色	暗褐色	ロクロナデ、内面黒色處理	
----	---	---------	--	--	------	----	-----	--------------	--

第75号住居址

信 息 注 記 番 号	番 号	種 別	器 械	法 量			色 調			成形・調整の特徴			備 考
				器 高	口 徑	底 径	内 面	外 面					
66	1	灰 胎	碗	6.4	16.4	8.5	灰白色	灰白色	ロクロナデ、外側下部及び底部削除へラケズリ				
	2	"	段 盘	2.8	13.9	7.5	"	"	ロクロナデ、底部削除へラケズリ				

第76号住居址

66	1	灰 胎	碗	5.0	15.2	7.0	白 色	白 色	ロクロナデ、外側下部及び底部削除へラケズリ
----	---	--------	---	-----	------	-----	--------	--------	-----------------------

第77号住居址

66	1	土 胎	环	3.4	12.2	5.9	明褐色	明褐色	ロクロナデ、圓孔斜切り				
	2	"	"	3.5	12.2	6.0	黑色	赤褐色	ロクロナデ、圓孔斜切り				
	3	"	"	3.3	12.1	5.9	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、圓孔斜切り				
	4	"	"	4.2	12.0	5.5	"	"	ロクロナデ、圓孔斜切り				
	5	"	"	"	"	8.4	茶褐色	黃褐色	ロクロナデ、圓孔斜切り				
	6	"	直	"	"	13.3	黑色	暗褐色	ロクロナデ、圓孔斜切り				
	7	灰 胎	碗	3.4	13.6	6.4	灰白色	乳白色	ロクロナデ、底部削除へラケズリ				
	8	"	碗	"	"	14.9	淡棕色	淡綠色	ロクロナデ				

第78号住居址

66	1	土 胎	环	7.4	黑 色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、圓孔斜切り、内面黒色處理、ヘラミガキ
----	---	--------	---	-----	--------	-----	-----	-----	--------------------------

第79号住居址

土胎強硬、須磨磨頭の破片が少量出土

第80号住居址

66	1	土 胎	环(小形)	6.1	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ
----	---	--------	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-------

第81号住居址

土胎強硬、須磨磨頭の破片が少量出土

件番 送付箇所	種別	器種	法量			色調			成形・調整の特徴			備考
			鉢高	口径	底径	内面	外面	外側				
67 2 土 陶(小形)			7.4	實褐色	實褐色	實褐色	實褐色	實褐色	ロクロ板			
67 3 土 陶 直 丸			3.1	15.1	7.0	絲灰色	絲灰色	絲灰色	ロクロナダ、回転ヘラケズリ			
67 4 土 陶 鉢			23.7	黑色	黑色	黃褐色	黃褐色	黃褐色	ロクロナダ、内面黒色處理、ヘラミガキ			

第82号住居址

出土遺物が少なく、固化できるものなし

第83号住居址

67 1 + 斧	鑿	27.8	暗茶褐色	暗茶褐色	内面、ハケナダ、外側、ハケナダ及びヘラケズリ
----------	---	------	------	------	------------------------

第84号住居址

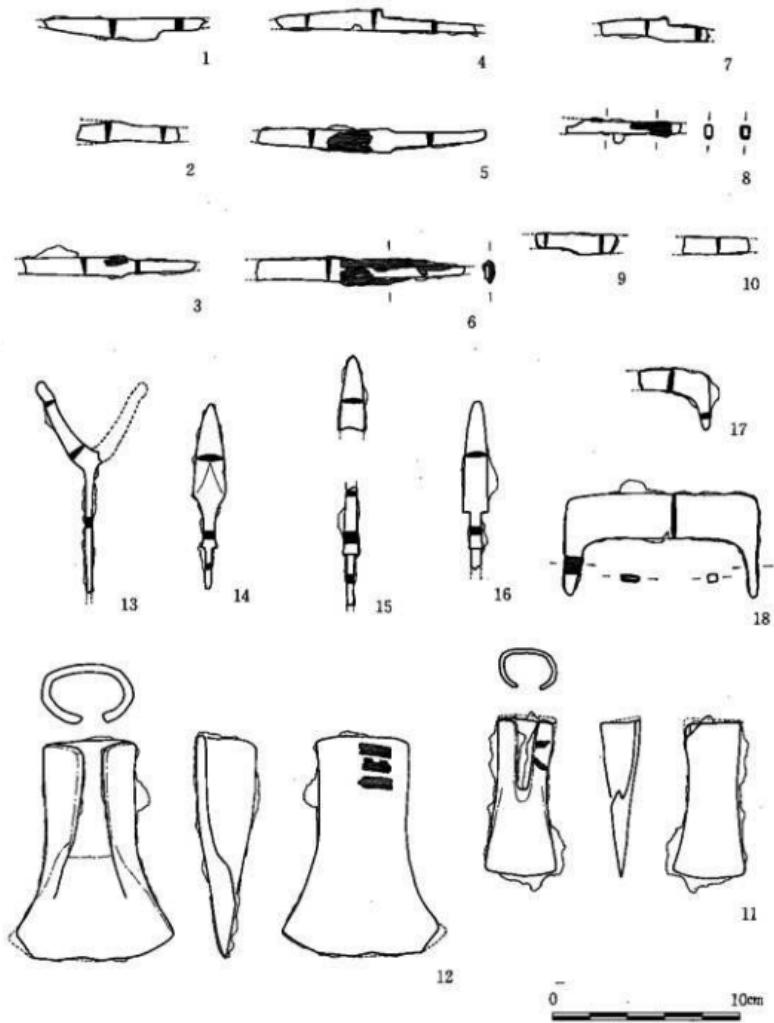
出土遺物が少なく、固化できるものなし

第85号住居址

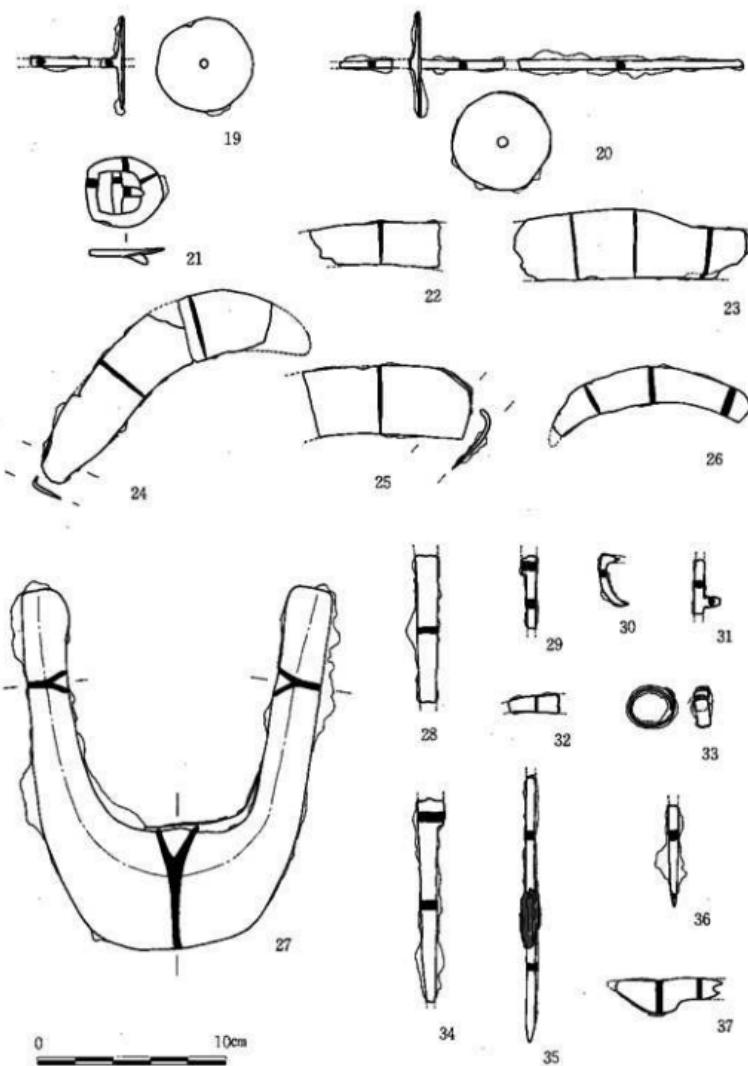
出土遺物が少なく、固化できるものなし

第2号住居址

67 1 上 鋸 环	4.1	13.0	5.5	黑色	暗褐色	ロクロナダ、回転糸切り、黑色處理、暗文	繩縄と同じ性穴より出土
------------	-----	------	-----	----	-----	---------------------	-------------



第68図 出土鉄製品



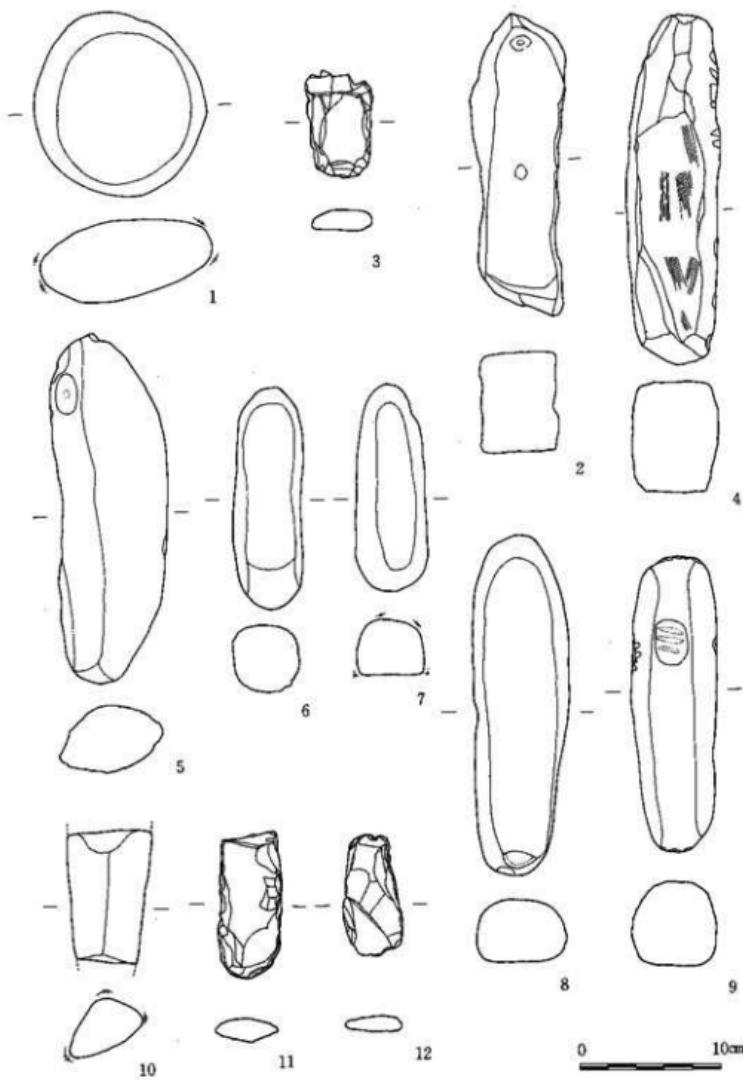
第69図 出土鉄製品

第2表 出土鉄製品一覧表

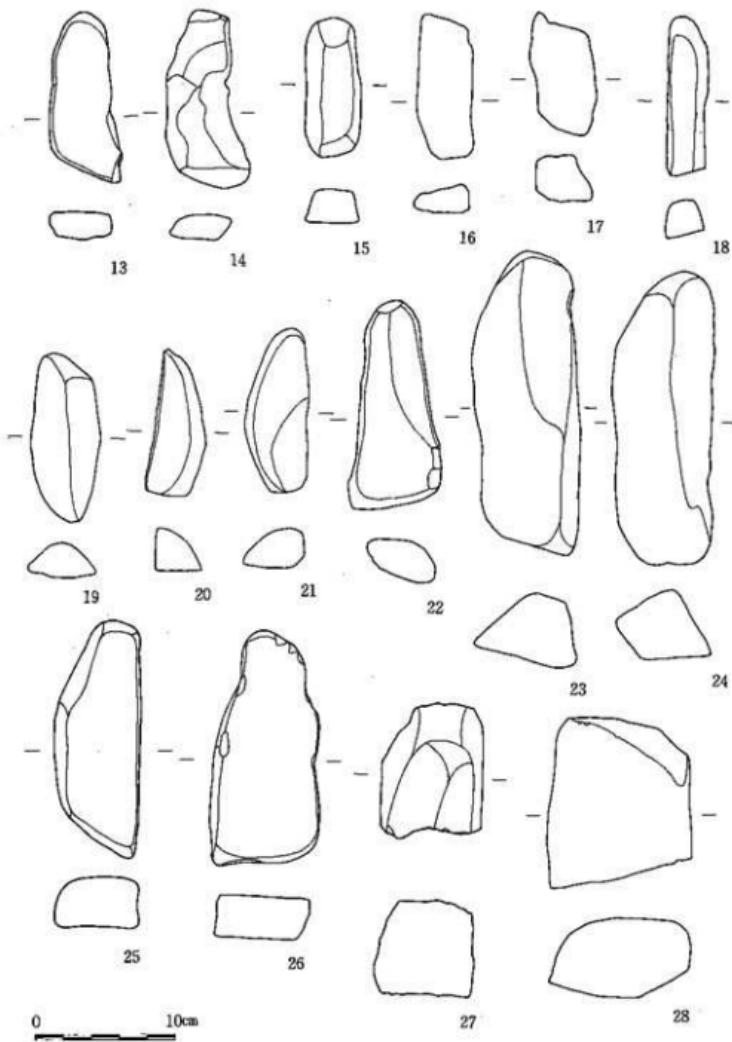
(単位: cm. g.)

図書番号	No.	出土遺構	製品名	遺存状態	長	幅	厚さ	重さ	備考
68	1	第5号住居址	刀子	身の先端と茎の一部欠損 身の一部を残すのみ	(8.7)	1.3	0.3	(11.0)	
	2	第19号住居址	"	"	(5.3)	1.1	0.25	(7.5)	
3		第21号住居址	"	身の先端と茎の一部欠損	(9.1)	1.0	0.25	(11.5)	一部、木質部残存
4		第25号住居址	"	身の先端と茎の一部欠損	(10.6)	1.1	0.2	(40.5)	
5		第31号住居址	刀子	刃の先端欠損	(12.2)	1.2	0.25	(14.0)	刃部に柄の木質部残存
6		第34号住居址	"	身の半分と茎の先端欠損	(11.2)	1.2	0.25	(20.5)	茎部に柄の木質部を明瞭に残す
7		第46号住居址	刀子?	身の先端と茎の一部欠損	(5.7)	1.2	0.2	(6.0)	
8		第5号住居址	"	"	(6.0)	0.7	0.35	(7.5)	刀子の某か? 木質部残存
9		第30号住居址	"	身の先端と茎欠損	(4.2)	1.1	0.2	(7.0)	
10		第50号住居址	"	身の一部を残す	(3.4)	0.9	0.15	(4.0)	
11		第55号住居址	斧	基部の一部欠損	(8.5)	3.8	0.9	(110.0)	表面にテープ状の木質部残存
12		第60号住居址	"	はばき穴	11.7	8.8	0.25	415.0	表面にテープ状の木質部残存
13		第24号住居址	鍬	片方の刃と基部を欠損	(11.2)	(5.8)	0.15	13.0	腹板式
14		第22号住居址	"	光 孫	9.8	1.7	0.35	13.0	後板をもつ
15		第46号住居址	"	身の先端部と茎を残す	{(3.8)}	0.2	0.2	{(3.5)}	同一地點より出たが、別個体の可能性有り
16		第61号住居址	"	身の先端欠損	(8.9)	1.4	0.2	(19.0)	
17		第38号住居址	解皮削器	片手を欠損	(3.3)	3.2	0.25	(7.5)	刃部形態より解皮削器と見える
18		第55号住居址	"	光 孫	10.3	2.4	0.2	46.0	16と同様な刃部を持つ、突出部に木質部残存
19		第12号住居址	筋繩車	円筒部と輪郭部の一部を残す	(4.2)	4.0	0.15	(30.5)	
20		第46号住居址	"	輪郭部の一部欠損	(19.8)	5.2	0.15	(56.5)	
21		第19号住居址	管 金 具	先端部と基部を欠損	4.1	3.7	0.35	19.0	
22		第14号住居址	鍔	先端部と基部を欠損	(6.9)	2.4	0.2	(18.0)	
23		第55号住居址	"	先端部と基部を欠損	(12.5)	3.7	0.1	(90.0)	
24		第61号住居址	"	先端部欠損	(15.1)	3.5	0.15	(51.0)	
25		第65号住居址	"	先端部欠損	(8.7)	3.7	0.2	(40.5)	
26		第74号住居址	鍔?	先端部欠損	(10.6)	2.0	0.15	(51.0)	刃部は先端に一部あるのみ、他の未製品か?

圖書号	No.	出土遺物	製品名	造	存	状	舞	長	土	幅	厚	さ	重	量	備	考
68	27	第2号住居址 第10号住居址	鑿頭 不	明				19.2 (7.8)	16.6 (7.8)	0.35 1.2	0.4 0.4	419.0 (19.5)	刀先が鋭い、 早く細長い鉄板、刃端を久く 何かの茎と考えられる			
	28	第19号住居址	"					(3.8)	0.3 0.3	0.45 0.4	0.45 0.4	(3.5) (1.5)				
	29	第23号住居址	"					(2.7)	0.4 0.5	0.4 0.35	0.4 0.35	(1.5) (2.0)				
	30	第24号住居址	"					(2.9)	0.5 (2.7)	0.1 0.1	0.1 (1.0)	419.0 (19.5)	刀先が鋭い、 早く細長い鉄板、刃端を久く 何かの茎と考えられる			
	31	第24号住居址	不	明												
	32	第24号住居址	不	明												
	33	"	"	光背												
	34	第46号住居址	"													
	35	第55号住居址	"													
	36	"	"													
	37	"	"													



第70圖 出土石器



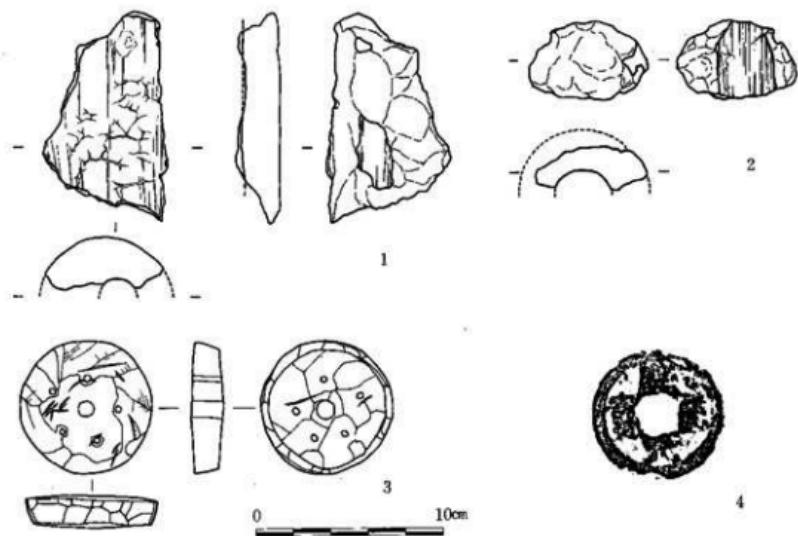
第71図 出土石器

第3表 出土石器一覽表

(種類、cm. t.)

器物番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
70	1	1号住居	縫合物用石綱	13.1	12.3	3.6		
	2	"	"	21.5	7.6	5.6		
	3	3号住居	縫合物用石綱	24.9	7.9	6.0		
	4	10号住居	打製石片	(7.2)	4.3	1.4		
	5	19号住居	縫合物用石綱	25.0	7.4	4.8	1,420	
	6	"	"	15.7	4.8	4.8	520	
	7	"	"	"	"	"		
	8	20号住居	"	44.2	6.4	4.4	1,240	
	9	"	"	21.0	6.0	6.0	1,220	
	10	37号住居	"	"	"	"		
	11	53号住居	打製石片	(10.2)	4.4	1.6		
	12	56号住居	"	8.5	4.0	1.1		
	13	55号住居	縫合物用石綱	12.1	4.5	2.1		
	14	"	"	12.7	4.4	1.8		
	15	"	"	9.8	3.9	2.4		
	16	"	"	10.4	4.6	2.1		
	17	"	"	8.7	3.9	3.3		
	18	55号住居	縫合物用石綱	(11.4)	2.8	2.7		
	19	"	"	12.0	4.7	2.5		
	20	"	"	10.5	3.3	3.0		
	21	"	"	11.6	4.3	2.8		
	22	65号住居	"	14.9	4.9	2.7		
	23	"	"	21.6	7.4	4.8		
	24	"	"	20.8	6.6	4.9		
	25	"	"	16.6	5.2	3.6	570	
	26	"	"	16.5	7.2	3.0	665	

試番号	No.	運 構 名	種 別	長 度	幅	厚 度	重 量	備 考
71	27	"	"	(9.0) (11.5)	7.3 11.0	6.6 5.6	(650) (1,300)	
	28	"	"					



第72図 刃口、土製紡錘車、古錢

第VI章 まとめ

第1節 集落立地

遺跡の立地を把握することは、該地の古代史を解明していく上で必修の要素である。その意味で相対的な集落の変遷、あるいは地形区分に従う遺跡立地等の研究は、古代史の流れを追っていく上で非常に重要である。しかしながら世代の流れに沿った「動的」な変遷を復原しようとするならば、可能な限り限定された地域や時間の中で把えられる集落遺跡にスポットをあてて研究してみることも必要なことと考える。勿論これには頻繁な地形変化に伴なう不安定な自然環境と、連続性の認められる生活跡を兼ね備えているという条件が必須であるが、なかなかこのような遺跡にめぐり逢う機会は少ない。

今回の吉田向井遺跡は調査の結果、幸いにもこのような条件をある程度満たしていることが判明した。現地での地質調査および遺物の整理等が完全ではなく資料的に不十分な面が未だ多々あるが、現段階で自然環境に制約された集落変遷の過程を追ってみることにする。

河川は一般に下流へ向って浸食過程、運搬過程、堆積過程とその性格を変える。これらはあくまでも相対的なものではあるが、田川ではおおよそこれらの移行点を大門市街地のはずれにあたる棟敷付近と、広丘野村の丘中学校東方の東西橋付近とみることができよう。そして3区分はそれぞれ独自の地形環境を形成し、川川流域では開折扇状地、河岸段丘、氾濫原の形態を呈している。

これらは時代別区分にも反映しており、開折扇状地では東山の緩い斜面を利用して縄文文化が栄えており、また結梗ヶ原台地に沿った河岸段丘では高出遺跡群の黒崖、北原、一夜窪、妻ノ原、社宮寺をはじめとして対岸の中島（堀之内・棟敷）、上木戸（南熊井）などの諸遺跡が分布しており、まさに松本平野有数の弥生遺跡の密集地帯となっている。

田川はもともと水量に乏しく、棟敷付近から野村付近にかけては片丘稜から流下合流する地表流水と地下水が加わってやや水量を増すが、野村、吉田、村井の地籍では伏流が著しくなり流水が減少する。ちょうど吉田向井遺跡付近で、表流水増加量と表流水伏流量がそれぞれ $0.2 \text{ m}^3/\text{sec}$ と等しくなる。このため流水量は少ないが、地下水と伏流水が比較的浅い所で得られるという便がある。しかし降雨時には逆に洪水になる危険性も高く、下流に多量の堆積物を運搬するため、松本市出川付近では河床が平地より高くなってしまい天井川となっている。条里制の定着に伴ない水田地域が拡大された当時においてもなお、自然灌漑の可能な領域に限定され栽培を余儀なくされてきた所も決して少なくなかったはずである。

一般に稲作集落は水に恵まれ、しかも洪水の危険性の少ない微高地、例えば段丘末端、自然堤防などに立地し、開田は段丘上の開折谷底、河川沿いの後背湿地、旧河道、沼沢地などを中心に進められてきた。しかしこの平安時代においては、条里水田を破壊して住居址を構築するといった現象が生まれ、後背湿地の水田地帯にまで多くの遺跡を残している（笹沢1972）。笹沢はこの中で、かつて存在していた水田地帯の一部に居住区が設けられていたという事実を重視し、平安時代の遺跡の激増を、単に気候の温暖化に伴なう稲作園の拡大（井関1971）や農業技術の進歩・発展という理由にとどまらず、古代的土地制度の崩壊過程で生じた居住地の拡散という形でまとめている。勿論このような情況の中には歴史的な背景が関与する意識の変化が色濃く表われていると思われるが、しかし同時に自然堤防、後背湿地といった非常に不安定な立地条件から生ずる制約があったことも事実として見えられる。

集落立地の好地形としてはむしろ河岸段丘線が掲げられるが、開田を考慮すると必ずしも適しているとはいえない（丘中学校遺跡1983）。水利、日照、交通の便等の利点を考えると自然堤防のほうが度重なる洪水の危険性を上回って高く評価されよう。平穏時にはこうした好条件に恵まれるため、生産活動の面からもより適した環境となる。経済基盤をほとんど水稻栽培に依存することになったこの時代においては、遺跡が自然堤防上に立地することはなんら不自然なことではなく、現在においても普遍的にみられる村落形態なのである。

自然堤防の背後には低地を伴なうことが多い。このため大増水時には、ここも河道になることがあります、場合によっては自然堤防を中洲として取り残すことさえある。そして次第に浸食されながら遂には河底に没することになり、同時に自然堤防上に立地する遺跡も河底に沈む。自然堤防上の遺跡は多くの場合、このような運命によって消滅していくのである。

吉田向井遺跡内の今回の調査域は、田川の本流を東へ約80mの所に臨む自然堤防上で、中央やや東寄りの墓地付近を微高地(田川との比高差、約5m)とし両側へ緩く低下する形状を呈し、河川方向と相対する東西方向に延びているために河川による種々の堆積物が見られる（第2図、第3図）。

この付近は厚い砂礫層を基盤としている。最上位では層状構造がみられ、また礫疊の掏汰が発達しているところから頻繁に流れの影響が及んでいると推察される。この層の上位には、ローム層を挟んで砂礫層が局部的にしかも帶状に分布している。すなわち26号、27号、51号、57号、62号の各住居址では、この砂礫層直上に床面を設けており、また2号、5号、12号、22号、32号、39号、46号、53号、55号、56号、60号の各住居址では、砂礫層を掘り込んで住居址を設けているために壁、床面ともに砂利の部分が多く、住居として使用するためにははなはだ不都合だったと推測される。これらの自然石の分布は現地でもかなり目を引くものであり、幾度もの居住地の移動や廃絶の展開を感じさせるものである。

次に注意すべきは、8号、9号、20号、22号、23号址の覆土として検出された漆黒色土である。腐植質壤土で、多孔質で纖維に富むものである。これら低湿地の草木堆積物も砂礫層とともに

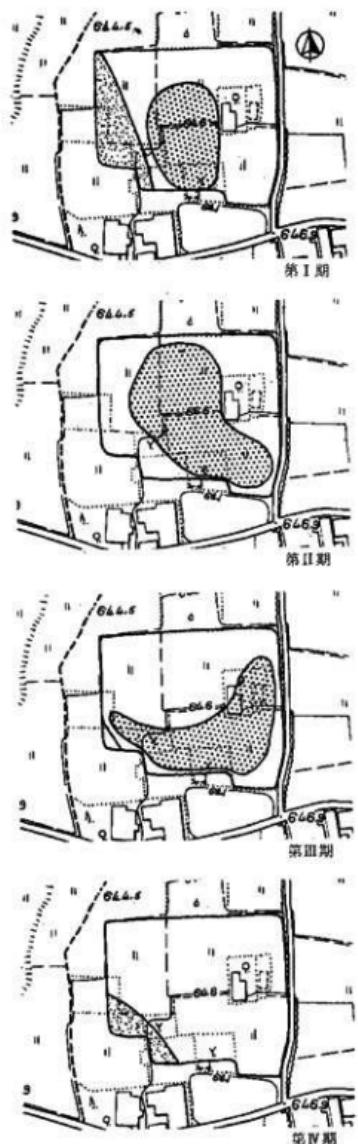


第73図 住居址の覆土からみた堆積層分布図

河道の移動形態を計る示標となりうる。従って本層の分布を追っていくことも極めて重要なことではあるが、残念なことに短期間のオーダーでしか生息する環境になかったものについては非常に薄層であるため、区別がはつきりしている砂礫層とちがって削平時にとばしてしまった可能性が高い。今回顕著な発達がみられたものについては、ある程度その環境が継続したことを示している。これらは住居址の変遷のオーダーをはるかに越えてしまってはいるが、全体の流れを把握するうえで1つの示標にはなりうるだろう。

ローム層の存在については、沖積氾濫原という環境から概めて特異なものと推察される。すなわち從来、塩尻市では小林1961の段丘面群の分類に従えば、5段ある段丘面のうちロームの堆積が認められるのは今井原面(3b)以上ということになっており、より下位の郷原面(4c)太田面(5c)といった低位段丘面には堆積が認められていない。この付近の田川流域では丘中学校の立地する桔梗ヶ原面(2c)の下位に直接郷原面(4c)が展開しており、微地形であるためその間の段丘面は把えにくいい。

模式柱状図は中央微高地で作成したためローム層の堆積を頭著に把えているが、調査域西方の



所謂砂利層地域ではロームの存在が確認されていない。すなわち模式柱状図にみられる下部砂礫層の上にすぐまた砂礫層が堆積し、22号住や39号住のように覆土に砂利層が詰っているものについては、このわずかな期間に居住したことを示している。ロームは混入物の少ない比較的きれいなロームであることから運搬され低地へ流れ込んだ2次的なロームであるとは考えにくく、むしろ現位置に堆積したものとみられる。従ってこの洪積世最末期に堆積したロームが残存する面と、浸食削平されてしまった面とを区分して、段丘崖こそ顕著ではないが墓地のすぐ西側あたりから東方僅かな区域を郷原面より一段高い面として覚えるのが適当かと思われる。つまり調査域中央の微高地は単なる一時的な自然堤防ではなく、むしろ取り残された段丘面ではないかということである。もしこのような推論を展開すれば、堆積物の分布が自然堤防を中心とした単純なメカニズムでは解せないことも理解されるのである。このように当集落がこの付近では最も好条件の地を選んで立地したことになると、当集落のある程度安定した繁栄ぶりが推測されても決して不自然ではないだろう。

最後にこれまで述べてきた各堆積物の様相と、出土した土器からわかる住居址編年を組み合わせて判読できる集落の変遷と環境の変化を追ってまとめとしたい。ここでは吉田向井遺跡の全集落過程を便宜上4期に大別し、それぞれの様相を順を

住居址分布域

河道推定域

第74図 集落の変遷と環境の変化

追って再現していく（第74図）。

第Ⅰ期（集落発生期）

最も古い住居址としては42号址、43号址、52号址がこれに相当し、微高地を中心に放射状に小規模にまとまっている。吉田向井の地に初めて居住を構えたのはやはり微高地からということになる。西側は田川の河川敷で集落のすぐ近くまで田川の流れが迫っており、集落は常に洪水の危険性にさらされていた。一方東側は、大増水時に時々田川の流れが氾濫し、微高地によって支流が枝分れし流れ込む低湿地帯となっていた。水船栽培に利用されていたものと考えられる。

第Ⅱ期（集落繁栄期）

山川の流れは西方へ退き、洪水に悩むことも少ない平穏な時期を迎える。居住区域も倍近くに広がっている。この時期、西域にもかなり住居址が進出しているが、前期から残存する砂利層が著しく、このような場所にあえて住居址を掘り込んで設ける理由があったのだろうか。疑問として残される点である。

第Ⅲ期（集落衰退期）

居住地は更に外側へ広がり東西へ長く延びている。西域には再び山川が近づき、おびただしいばかりの砂利層地帯である。一方東側は当初の後背湿地帯すなわち水田利用地と推測される場所へあえて居住地を広げている。洪水によって破壊された条里を見捨てて意識的に居住地を定めたものであるのか、あるいは条里を無視して居住地を定めるようになったという歴史的背景があるのか、いずれにしても古代土地制度の条里水田は崩壊が始まっており、集落の存続にかなりの支障がきたってきたことになる。

第Ⅳ期（集落消滅期）

22号址や39号址では、住居址の覆土にもかなりの砂利が詰っていた。第Ⅲ期に氾濫の危険性のある調査域最西端の地にあえて進出してきた住居址ではあるが、短期間でやはり洪水の土砂を被り破棄する結果となった。この時期の東域の情況は不明であるが、西域には明らかに山川が接近し洪水が集落を襲うこともあったであろう。微高地はどうやら河床となることはなかったと推察されるが、微高地の上に発生し繁栄した集落は存続することなくこの時期を最後にした。

以上のようにおそらく平安時代にこの地の中核的な存在になっていたと思われる吉田向井遺跡も、河川による制約や歴史的背景を背負いながらついにはそれらによって消滅していったといえよう。

遺跡立地の在り方を検討していくことは古代史の背景を解明していく極めて重要な手段であるが、このような視点を踏まえた調査・報告はまだ少ない。既資料を再検討するとともに類例の增加を待ちたい。

（鳥羽嘉彦）

参考文献

太田守夫他「東筑摩郡誌」第1巻自然 1957

小林国夫「いわゆる“信州ローム”」地質学雑誌 67 1961

- 多田文男「自然環境の変貌」東京大学出版会 1964
- 岸和男「長野県松本盆地水理地質図説明書」地質調査所 1966
- 藤沢宗平他「塩尻市高出遺跡とその周辺」長野県考古学会研究報告1 1967
- 井関弘太郎「古代の歴史地理的基盤」古代の日本2 1971
- 筆沢浩「善光寺平における古墳時代以降の集落立地の基礎的研究」信濃24-4 1972
- 日下雅義「歴史時代の地形環境」古今書院 1980
- 塩尻市教育委員会「丘中学校遺跡」1983

第2節 土器について

遺物整理の時間的制約により出土遺物はすべて提示できず、明細な検討もできなかったが、大まかに向井I～IV期に分けられた（第75～77図）。

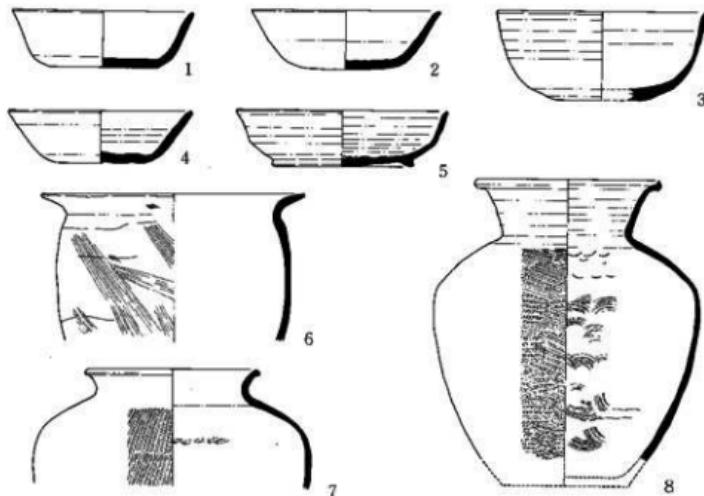
I期は数少ないのではっきりとしないが、供膳形態で須恵器が中心となり、須恵器の底部で回転糸切り手法が発生し、奈良時代からの回転ヘラケズリ手法、回転ヘラ切り手法の三手法が混在する。須恵器高台付杯は回転ヘラケズリ手法のみである。土師器杯は出土していないのではっきりとしない、土師器縁は「く」の字に外反する口縁部が主流で胴部外面は縦位のハケ目、ヘラケズリ、ヘラナデで整形され、内面は、丁寧にナデで整形するもの、ハケで整形するものがある。I期の代表例として52件、42件があげられる。

II期は供膳形態でひき続き、須恵器が主体で、底部がほとんど回転糸切りとなる。高台付杯も回転糸切りが導入され、回転ヘラケズリ手法と併用され、糸切りの痕跡は中央に残る。土師器杯は回転糸切り手法と数少ないが回転ヘラケズリも見られる。内面はヘラミガキされるものが多く、黒色処理するもの（黒色土器）も出現する。また甲州製杯も見られる。土師器小形縁は胴部外面、口縁部内面に回転ハケ目と呼べるようなロクロを利用したハケ目のカキ目で整形されるものが出現し多くなる。縁は口縁部～胴部上半外面がロクロナデされ、口縁部～胴上半内面はカキ目により整形するものが多くなる。また数少ないが「コ」の字形口縁の薄い器壁のヘラケズリの武藏型縁も共伴している。II期の代表例として31件がある。

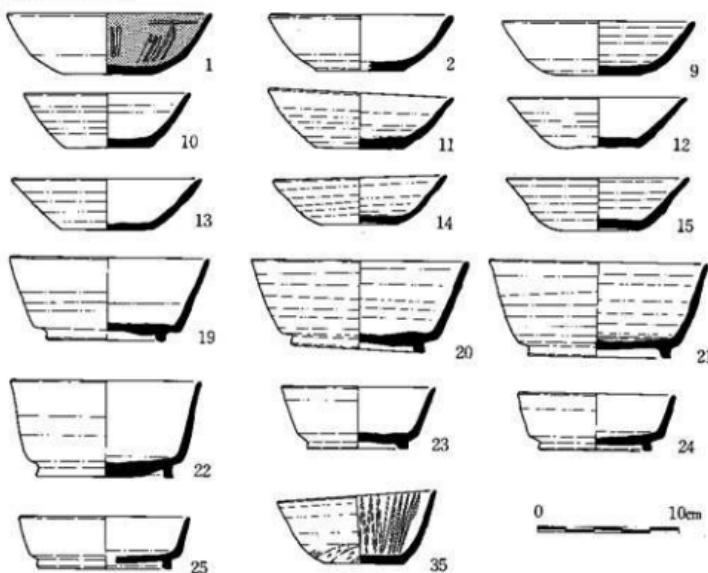
III期は供膳形態で須恵器が減少し、内面黒色処理した土師器（黒色土器）が多くなる。II期に出現する。施釉陶器の影響を受けた内面黒色処理した土師器の高台付杯、皿も多くなる。この期をもって供膳形態での須恵器はほとんど姿を消す。土師器小形縁、縁はII期とはほぼ同じでカキ目手法をもつものが主流である。III期の代表例として、9、8、17、30、44件がある。

IV期は灰釉陶器が多く搬入する時期で供膳形態での主流をなすようになる。灰釉陶器のほとんどは、折戸53号窯期のもので、黒窓90号窯期のものもわずかであるが見られる。供膳形態で須恵器はほとんど消滅するが、軟質の灰白色の生焼け風の須恵器の杯がわずかに見られる。土師器杯は、ロクロ成形痕跡を顕著に残すものが多くなり、作りが雑となる。高台付杯も作りが雑となり、足

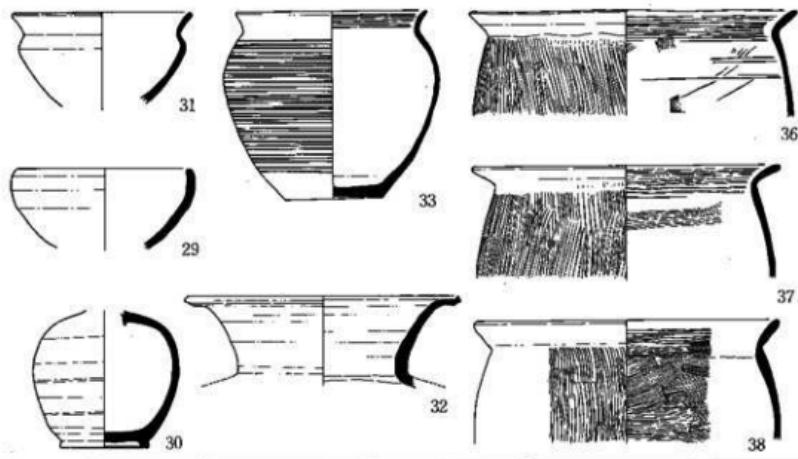
第Ⅰ期（第52号住居址）



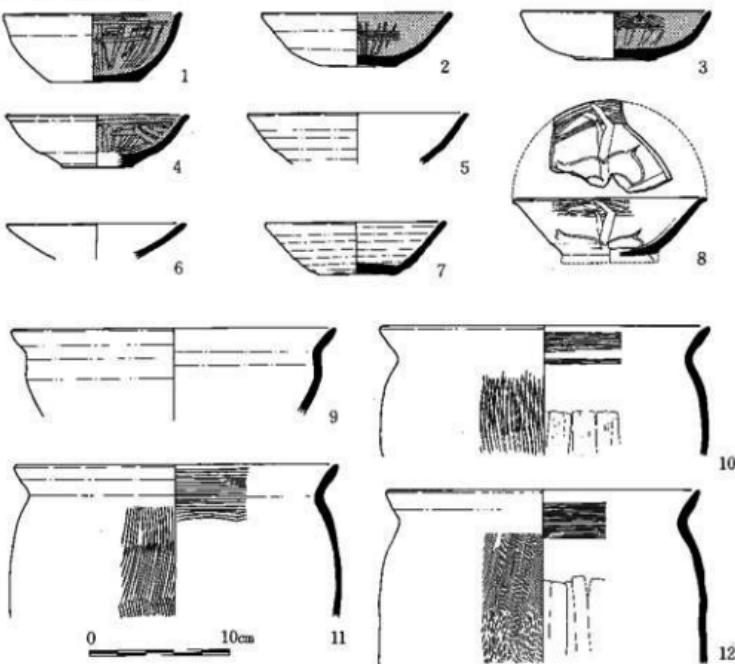
第Ⅱ期(第31号住居址)



第75図 吉田向井遺跡出土平安時代土器時期区分（1）

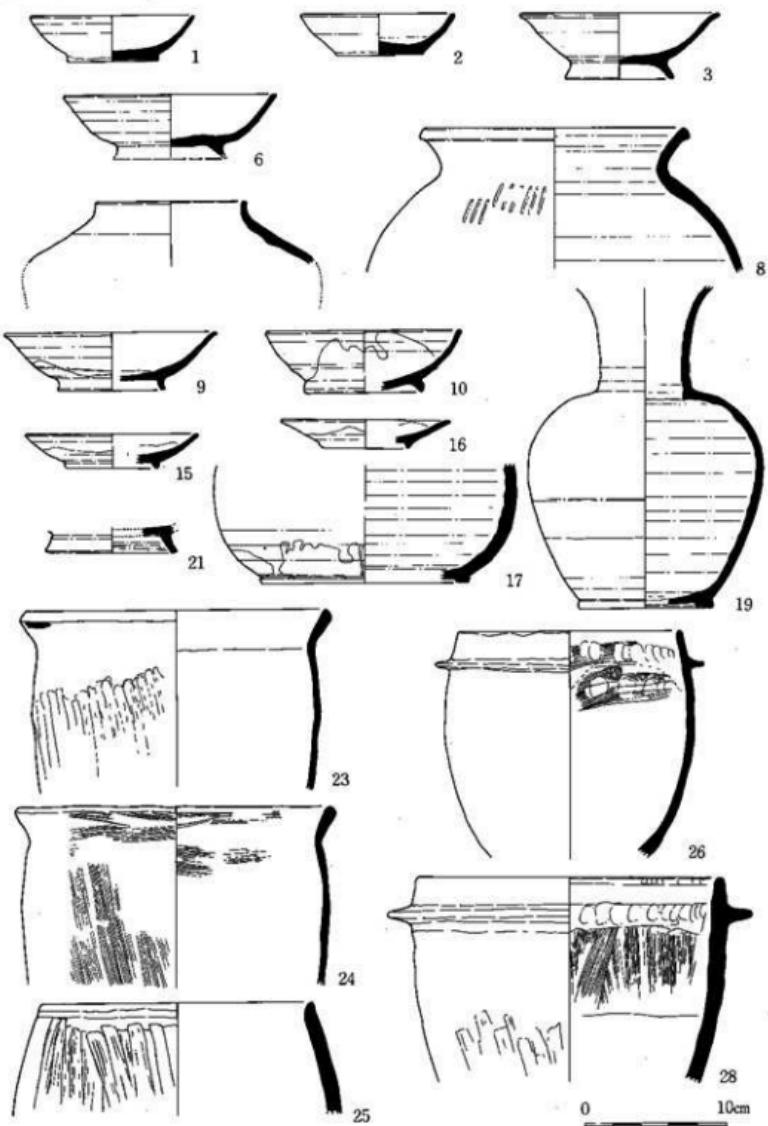


第Ⅲ期（第9号住居址）



第76図 吉田向井遺跡出土平安時代土器時期区分（2）

第Ⅳ期（第20号住居址）



第77図 吉田向井遺跡出土平安時代土器時期区分（3）

高台と呼ばれる高台が高いものが多くなる。また中世土師器の初源と思われる小形の皿も出現する。内面黒色処理の土師器は減少する。煮沸形態では、甕がやや減少し、羽釜が出現する。IV期の代表例として15、19、20、23、55、56住がある。II期で共作している甲州型杯は松本地方においては、本遺跡の南方にある丘中学校南遺跡で、見られるのみで、本遺跡より北ではまだ出土しておらず、現在の所、甲州型杯の北限と考えられる。I～IV期、予想される年代を示すと、I期は、9世紀代、II期は9世紀後半～10世紀前半、III期は10世紀後半～11世紀前半、IV期が11世紀後半～12世紀頃と推定される。

I～IV期に大まかに分類したが、十二ノ后遺跡（佐沢他、1975）のごとく細分されると思われる。資料の集成をし、あらためて再検討することを今後の課題としたい。

（島田哲男）

参考文献

- 伴 信 大他 「長野県中央道報告—上伊那郡箕輪町一昭和48年度」 1973年
箕 洋 浩他 「長野県中央道報告—諏訪市その4—昭和50年度」 1975年
岡田正彦他 「長野県中央道報告—富士見町その1—昭和48年度」
岡田 正彦 「平安時代土師器等の編年試論——特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として」 信濃29巻-9号 1977年
小林康男他 「剪屋敷」 1980年
原嘉藤、山田瑞穂 「長野県塙尻市内田原遺跡概報」 信濃21巻6号 1969年
川上 元 「土師系什器の展開と終焉」 中部高地の考古学 I 1978年
篠崎健一郎他 「僧房遺跡Ⅲ、前田遺跡」 1982年

第3節 集落における鉄製品のあり方

今回の調査では、鋤頭、帶金具をはじめ、数々のバラエティーに豊んだ貴重な鉄製品が出土した。85軒に及ぶ平安時代の大集落の発掘は当地方では珍しく、当時の生産活動を知る上で、これら鉄製品は土器以上に貴重な存在であるといえる。そこで、今回出土の鉄製品について、集落との関係も含めて若干の考察を行ってゆきたい。

〔1〕 内田原遺跡との比較

本遺跡より南東方向へ、直線距離にして2.5kmほど離れて位置する内田原遺跡は、同時代の遺跡として、立地に違いは見られるが、出土鉄製品に類似する点が多いため、ここに比較、検討をしてみたい(第4表)。

高ポッチ山麓の扇状地で麻の生産、紡織に従事していたと考えられる内田原遺跡では、当然鋤頭、鎌などの農具は出土していないが、吉田向井遺跡においては、それら鋤頭、鎌といった水田耕作用具と共に紡錘車、麻皮削器も出土しており、本遺跡でも内田原遺跡のような麻の生産、紡

織が行われていたと推察される。

また、両遺跡を特徴づける出土鉄製品として帶金具が挙げられよう。形態はやや異なるが、すべて完形品であり、文化水準の高さを窺わせる。なお当方は信濃から西園への玄関口にあたり、麻の交易の点からも、両遺跡は当地方の主要な集落であったことが推察される。

第4表 内田原遺跡との出土鉄製品比較

	鋤頭	鎌	刀子	斧	紡錘車	麻皮削器	鐵	帶金具	刀佩具用 鐵金具	不明	計
吉田向井	1	4	7	2	2	2	4	1	0	14	37
内田原	0	0	3	0	5	1	2	2	1	10	24

註：内田原の調査概報(S, AA 塩尻市教育委員会)では麻皮削器を火打
金機器として記してあるが、ここでは麻皮削器として扱った。

第5表 I～IV期を通した鉄製品出土数

	鎌	刀子	斧	紡錘車	麻皮削器	鐵	帶金具	不明	計	鉄製品出土 住居址数	検出住 居址数
I 期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
II 期	2	2	1	1	0	1	0	0	7	6	12
III 期	0	2	1	1	1	1	0	5	11	6	19
IV 期	2	3	0	0	1	2	1	9	18	10	33

(2) 住居址内における鉄製品出土状態

住居址内における鉄製品出土位置を、モデルハウスに記入してみた(第78図)。

本遺跡においては、住居址の切り合いで頻繁に行われており、住居址内出土の鉄製品については流れ込みによるものがかなりあると考えられ、発掘による出土地点が必ずしも当時の生活空間における位置を表すものとは思われないが、出土状態についてある程度類似した傾向がみられる。

- 1) ほとんどが外区よりの出土である。
- 2) 紡錘車は2点とも壁際より出土している。
- 3) 柱穴の外側にやや集中している。
- 4) カマド反対側の壁際には少ない。

以上のことから、鉄製品を使用、もしくは収納したのは、柱穴の外側を中心とした外区であると推察できる。

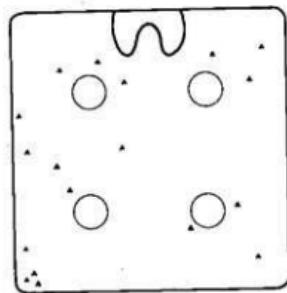
(3) 集落における各住居の鉄製品所有形態

集落における鉄製品の出土状態を、住居別、製品別に全体図に記入してみた(第79図)。

3軒の建物址を囲むようにして並ぶこの集落において、鉄製品は特定の住居に集中して出土するという傾向が見られる。特に19号址、46号址、55号址などは、3～5点の鉄製品を有するかなり大型の住居であり、集落の中核をなしていたと考えられる。また、集落の中心に位置する第2号建物址よりは、生産用具として重要な意味をもつ鋤頭が発見されており、当時の社会経済面を考える上でも興味深い。次に各住居の鉄製品の所有形態を製品別にみてゆくと、刀子は日常品

としての利用度が高かったとみて散在しており、単独でも出土している。反対に、鎌、鎌などの大貴品は、あまり単独では出土せず、他製品との組み合わせで出土することが多い。

全体的にみると、鉄製品を所有する住居址は、数は限定されるが、集落内の各所に散在している。比較的大型な住居が多いといえる。おそらく、鉄製品を有する住居が、各期を通して集落内の小グループの中核をなしていたからだろう。当時、鉄はまだ貴重な存在であり、鉄器の所有は権力の象徴であったのかもしれない。



第78図 住居址内における鉄製品出土地点模式図



第79図 集落内における鉄製品出土状態図

〔4〕 I～IV期を通した鉄製品のあり方

I～IV期を通した鉄製品のあり方を表にしてみた(第5表)。

1) I 期

I期は集落発生段階であり、鉄製品を所有する住居はまだみられない。

2) II 期

II期になると5割の住居址から鉄製品の出土をみており、鉄製品の普及が窺える。すでに各種の鉄製品が出揃い、住居址数が少ない割には貴重な製品が多く、発展、盛行期といえよう。

3) III 期

住居址数が増えた割には鉄製品の増加がみられず、鉄製品の出土をみる住居址は3割弱となる。鎌の出土が見られないが、これは絶対数が少ないのであるからとも考えられる。不明鉄製品が増え、麻皮削器が現れる。II期と同じく、各種の製品が使用されている。また、この時期に、46号址のような中核的な住居が現れる。

4) IV 期

IV期もIII期と同じく、鉄製品の出土をみる住居址は3割に満たない。不明鉄製品が半分以上を占めるようになり、III期で消滅した鎌が復活する。帶金具が出土したのはこの時期の住居で、19号址、55号址のような、集落の中核をなす巨大住居が存在することから、集落内に貧富の差が拡がり、中核住居へ権力の集中が行われていたことが推察される。

(前田清彦)

参考文献

1969 原嘉藤、山田瑞穂「長野県塙尻市内田原遺跡調査概報」塙尻市教育委員会

1982 岡田正彦「平安時代の鉄製用具と小銀治遺構小考」中部高地の考古学II

第4節 集落と堅穴住居址の検討

第IV章で述べたように、吉田向井遺跡は南北にのびた自然堤防上に立地しており、一つの集落としてのまとまりをもっていたと推察される。しかし、今回の調査では、南北に長く展開していたと思われる集落の北端の一部を調査したにすぎず、この調査地域での結果をもって吉田向井遺跡の集落の全体像にせまるにはやや不充分な面もある。ここでは、このように限定された範囲の中ではあるが、集落の発展、その構成、そして住居址のもつ問題点について検討を加えることにしたい。

具体的な検討を加える前に、各住居址の時期的区分について解説をおきたい。今回の調査で得られた土器の分析から、一応4時期に大別することができた。この4時期区分はあくまでも大別であって、各時期は更に数段階に細別される可能性がある。第II期に属する第16号住居址と第31号住居址が重複関係にあり、また、第III期の第53号、第54号の切り合い、さらに第IV期の第11号、第13号、第30号、第65号の重複などは、このことをよく示している。ここでは不充分ではあるが、

住居址から出土した土器の様相から各住居址を第Ⅰ～第Ⅳの4時期に分け、各時期ごとの状態を考えてみたい。なお、土器の出土が少なく、時期決定が判然としないものは分析の対象から除外した。また、平安時代以前縄文時代・弥生時代とも生活の痕跡が認められるが、その内容が不明確であるため、ここではこれらの時期でも生活の跡がみられる点のみを指摘するにとどめたい。

(1) 住居址の配置

吉田向井遺跡は、9～12世紀の約400年間にわたった集落と推定される。調査によって85軒の住居址と3軒の建物址、小窓穴が検出された。全体的に住居址の分布をみると、第1～第3号建物址を中心に、東西88m、南北60mの楕円形形状の範囲に密に集中し、これに10mほどの空白地域を隔てて第1号～9号・35号の住居址群が南に存在する。中心部分の建物址の存在する地区には住居址は存在せず、やや西に離れて小窓穴の一群が存在する。住居址のある地区は互いに重複が著しく、何回にもわたって居住地域とされたのに対し、中心地には建物址のみが構築され、しかも第1号と第3号の建物址が重複していることは、当時、この地区は建物址を建築する場所として設定されていた場所であり、他の施設はここには造ることはできなかったことを示していると考えられる。いいかえれば、これら3棟の建物址を中心として、これをとり囲むようにして居住地区が設けられていたといえる。

なお、東側の第67～80号周辺および南側の第83～85号の周辺は住居址の空白がみられるが、この地域は、調査終了後ブルドーザーによる表土削平時、遺構の検出を行った場所であったため、遺構検出に不充分な面もあり、あるいは他に数軒程度住居址が存在していた可能性も否定できない。しかし、その数は決して多い数ではなく、集落の構成にはさほど影響を与えるものではなかったと考えている。

では、85軒中、時期の判明した69軒について以下その様相をみてみたい。

第Ⅰ期（第80図）第42・43・52号住居址の3軒が相当する。集落のはば中央部の小範囲に占居するが、建物址北側の第42・43号址の一群と、西側の第52号址との2箇所に分かれる。第42号と第43号址が重複関係にあることから、この時期は多くて2軒、少なくみれば1軒という極めて少數の住居のみであったことがうかがえる。吉田向井における集落初源期の様相をよく示しているといえる。

第Ⅱ期（第81図）第3、12、14、21、26、27、31、33、47、48、57、60、62号住居址の13軒の住居址が相当する。第Ⅰ期が中央やや北および西側に1・2軒程度の居住空間を有していたのに對し、この時期に至り、前時期の居住域を踏襲する第12・14・33号址（中央やや北より）、第47、48、57、60、62号（中央やや西より）の2グループのほかに、新たに中心より南側に進出する第21、26、27、16、31号址と、南東に孤立して存在する第3号址のグループがある。この時期も、第16号と第31号、第26号と第27号、第60号と第62号がそれぞれ重複しており、こうした状況を考えるとこの時期には特定地区に集中して住居が営まれるということもなく、一軒一軒がかなり離れた場所に孤立して存在するといった状態を示している。吉田向井は第Ⅱ期に至り、軒数的に

も増加し、居住空間も拡大し、いわば発展の時期にあたるといえる。

第III期（第82図）第1、2、5、8、9、17、18、30、34、38、44、46、49、50、53、54、63、71、74号住居址の18軒が相当する。集落全域に拡まつた第II期の様相は、この第III期に至り一変する。すなわち、中央北側に同一標高に一列に並ぶ第38、50、63、53、54、18、41、34、44、46、74、71号のグループと、中央東南に塊状に分布する第17、2、8、5、9、1号のグループの2地域に偏在する傾向を示す。特に、中央部のすぐ南側の区域は前時期には第21、26、27、16、13号など主要な居住空間であったが、第III期には空白地帯となり、より離れた東南地区への進出が著しい。また、第I期・第II期とも住居址の重複が著しかったが、第III期では、ほとんど重複関係が認められず、単独に存在するという顕著な特徴も指摘できる。第II期は、住居軒数は前時期の12軒から19軒と漸増する程度で、それ程極端な変動は認められないが、空間的には前述したように特定地区に偏在するという特異な在り方を示している。この第III期は、発展期ともいえた第II期から繁栄期であり終末期でもある第IV期への基礎固め的、橋渡し的な時期として認識できよう。

第IV期（第83図）第4、6、7、10、11、13、15、16、19、20、22、23、24、25、32、35、37、39、40、51、55、56、61、65、67、69、70、75、76、77、78、81、83号住居址の34軒が相当する。この第IV期は住居址軒数の面においても、また居住空間の面においても飛躍的な発展がなされた時期である。すなわち、住居址軒数は、時期が判明した68軒の48%を占め、住居址占居地区はほぼ調査地区全域に拡大している。しかし、第I、III期とも主要居住地域であった建物址のすぐ北側には一軒の住居址も発見されておらず、居住地域から除外されていたようである。さて、これら33軒の住居址を検討してみると、ある程度のグルーピングが可能であることが判明した。第83図に示したA～Eのグループである。Aは東南に存する一群で第4、6、7、35号址が含まれ、他に83号もここに入るかもしれない。Bは中央部南側にあり、第10、11、13、15、24、25、32、65号址が含まれる。Cは、東北にあり、第69、70、75、76、77、78号址がこれにあたる。Dは中央西側に位置し、第19、20、22、23、40、56号址が含まれる。Eは、やや西北地域にあたり、第37、39、51、55、61号址がこれに含まれる。これらのグルーピングは、住居址の遠近、住居址間に空白地区が介在しているか、あるいは建物址との位置関係などから想定したものである。この各住居址群をみると、一辺5～6mを越す大形の住居址がそれぞれ一軒づつ含まれていることに気づく。Aでは第6号址が、Bでは第11号址が、Cでは不明な点があるが一応第75号址が、Dでは第19号址が、Eでは第55号址がそれぞれこの時期としては大形の住居址である。これらの住居では、第4節で述べたように鉄器の所有も著しく、他の小住居とは性格が異なっていたことも推察される。大形住居はいわばこの時期の各グループの中核的存在であったと考えられる。このように各グループ内には一軒程度の大形住居があり、これを中心として4・5軒の住居が配置され小集落を構成し、こうした小グループが最低4～5グループ建物址を中心に各住居区域を占居し、一集落を形造っていたものと考えられる。なお、Aグループは、建物址との関係からみるとやや遠

距離にあり、あるいは、より南側に更に同様の集落が存在し、それに伴なった1グループという見方も考えられる。今回の調査区域では、その点を確かめることができなかったが、近いうちに中央道開通の調査が実施されるようであるので、その時の結果をみて、再度考えてみたいと思う。

いずれにしても、第Ⅳ期は、吉田向井における最も発展した時期であると同時に、その理由ははっきりしないが、これに後続する時期の住居が発見されないことからみてこの期をもって突然廃絶され、終末を向かえることになった。あるいは、現在の下向井の集落方面（南側）に移動したのであろうか。現時点では、明確な解答が得られていない。

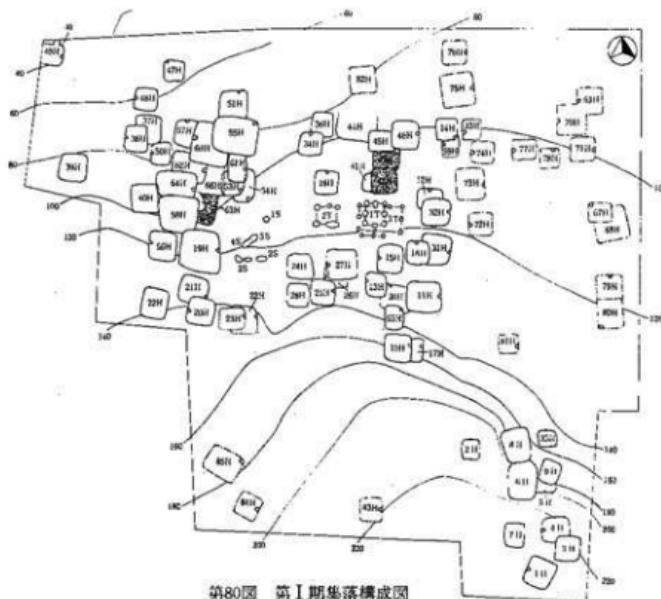
以上、各時期毎に集落の大雑把な変遷をたどってきた。全体を概観すると、住居址初現期の第Ⅰ期には、中央やや北・西側に1・2軒程度の極めて少数の住居址がみられるが、第Ⅱ期には住居軒数は激増し、居住空間も大幅に拡大する。次の第Ⅲ期になると、住居軒数は横ばい状態であるが、中央の北側と東南側の2地域への分割占居がなされる。最後の第Ⅳ期は、吉田向井最大の繁栄期であり、大形住居を中心5群の住居址群が集落全域にわたって展開する。しかし、この繁栄期を最後として、調査区域においては集落は廃絶されたといえそうである。

(2) 住居址規模の検討

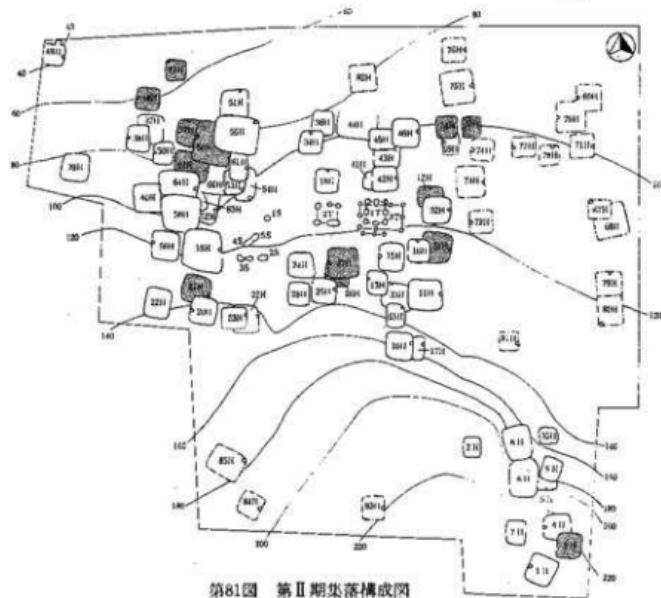
第84図によって住居址の規模をみてみたい。まず最初に全時期を通じて、住居の大きさをみると、最小の第2号址 ($2.9 \times 2.9\text{m}$) から最大の第55号址 ($7.04 \times 5.63\text{m}$) まであり、その中心は一辺3m～一辺5mの範囲に含まれる。第Ⅰ期の住居址は、 $4.5 \times 5.0\text{m}$ の隅丸方形ないし長方形で、検出軒数が僅少ということもあるが比較的大形の住居といえる。第Ⅱ期は $4.5 \sim 5.0 \times 4.5 \times 5.0\text{m}$ の比較的大きなものと、 $3.0 \sim 4.2 \times 3.0 \sim 4.6\text{m}$ の小形のものという2つの大きさに分けられ、住居規模に分化傾向が認められる。しかし、こうした傾向も次の第Ⅲ期には消滅し、 $3.2 \sim 4.5 \times 3.0 \sim 4.6\text{m}$ と比較的小形化した住居が主流を占める。第Ⅳ期には、住居址は大・中・小の3形態に分化する。大形は、一辺5m以上の住居で、第6、30、19、55、75号址がこれにあたる。量的には少ない。中形は、この時期の中心的な住居で、大半がこれに含まれる。一辺4～5mである。小形は、一辺3m前後で、第78、81号など量的には少ない。第Ⅳ期では、こうした3形態の住居が大形住居を中心としてそれぞれの群を形成していたと考えられる。

以上のように、各期の住居址はその規模において変化を示しているが、形態、内部施設面では余り顕著な特徴を見い出せない。

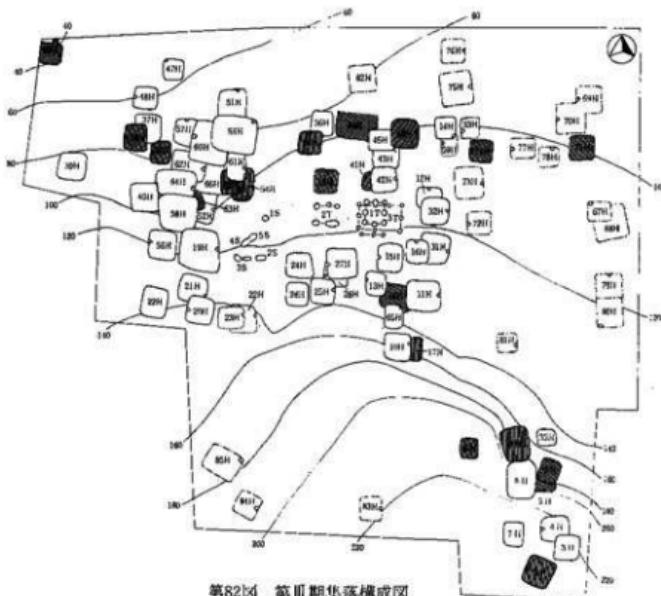
（小林康男）



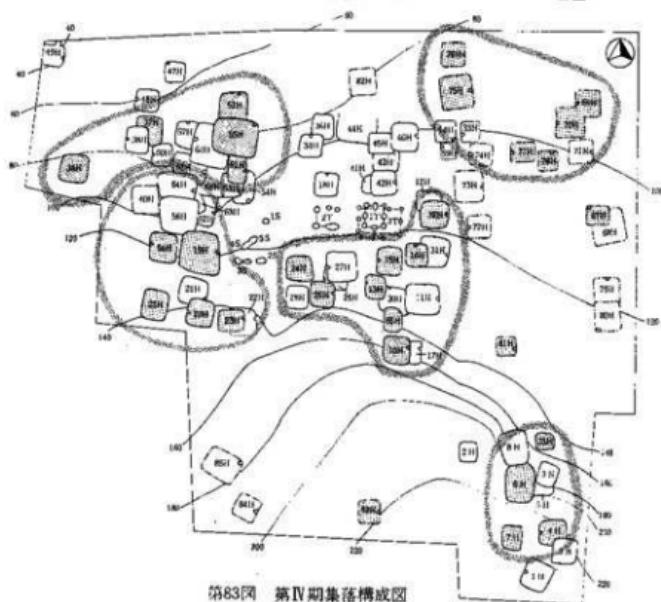
第80図 第Ⅰ期集落構成図



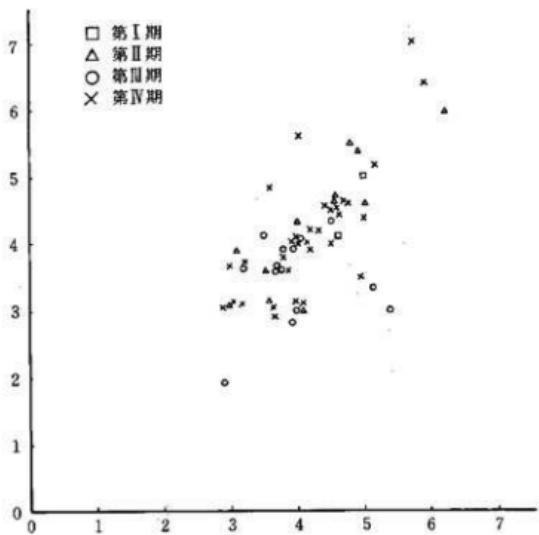
第81図 第Ⅱ期集落構成図



第82図 第III期集落構成図



第83図 第IV期集落構成図



第84図 住居址規模

第VII章 結 語

塙尻市広丘吉田に所在する吉田向井遺跡は、以前より平安時代の遺跡として知られていたが、今回の発掘調査によって縄文時代草創期から平安時代にいたる生活の痕跡が見い出され、松本平を代表する遺跡であることが確認された。

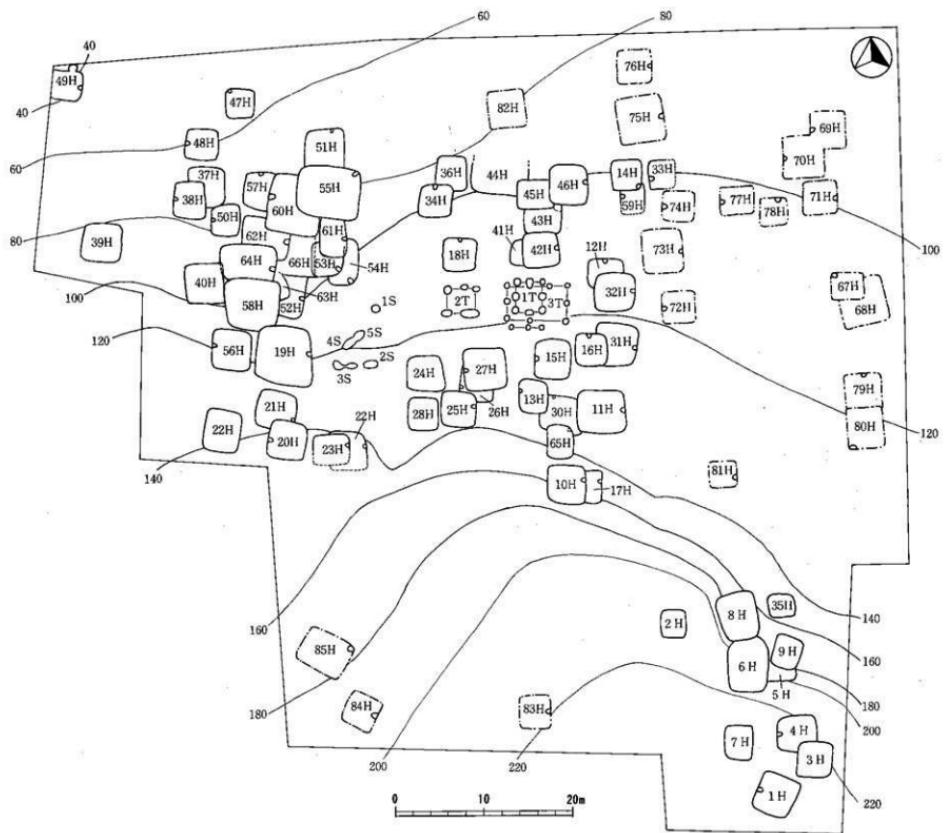
縄文時代草創期では、たった1点ではあったが有舌尖頭器が得られ、松本平ではこの種石器の資料が少ないとから、今後の研究上貴重なものとなろう。また、縄文時代中期では、石鐵、打製石斧、土器片が出土し、後期では土器片がある。ともに量的には極めて僅少であったが、最近該期集落の低地立地問題が論議されている折から好資料となるものと考える。

弥生時代の遺物は、田川流域に濃密に分布するが、市内におけるその中心は広丘高出、野村の河岸段丘の発達している地区が中心となっており、今まで広丘吉田地区にはその存在を聞かなかつた。しかし、今回の調査によって2個体の土器が発見され、この地区にも確実に弥生時代の生活の痕跡があることが証明された意義は大きい。

今回の発掘での最大の成果はなんといっても平安時代集落の調査であろう。平安時代という一時期に属する集落として85軒もの多くの住居址の発見は県下でも特筆に値しよう。これら多数の住居址から出土した多量の土器は分析の結果第Ⅰ期～第Ⅳ期まで4段階に区分され、更に今後の詳細な分析、検討によってそれぞれ数期に細分が可能である。平安時代の土器編年が松本平において今だ確立されていない現在、今回の出土土器の果す役割は大きなものがあろう。このほか、多種に富む鉄器類は、集落内における鉄器の取り扱われ方を具体的に示す好例として注目される。こうした出土遺物からの検討とともに自然環境の変化から把えられる集落の推移の復元、それらを通じた集落構造の分析等吉田向井遺跡の調査結果が提起する問題は極めて大きなものがある。今回の報告書では、調査後短日時しか整理の期間が持てなかつたため不充分な結果しか得られなかつたが、今後の分析、検討によって該期研究の貴重な一資料となるものと思う。特に、今回は触れることができなかつたが、周辺遺跡との関わりから見た吉田向井遺跡の問題がある。当時、田川流域を中心として良田郷が設置されていたとの推定があるが、今だその実態解明までにはいたっていない。最近の調査では、広丘野村の丘中学校遺跡での大規模な集落の発見、寺の存在を暗示する墨書き土器、円面鏡の出土があり、またこの周辺一帯は遺跡稠密地帯として知られている。そして、吉田向井遺跡での継続的に営まれた集落址の発見で、広丘高出、野村、吉田…帯が良田郷に含まれていた可能性があり、しかもその中心地的な遺跡であったことを示唆しているものと受取ることができる。いずれにしてもこの問題を考えるうえでも重要な資料を提供したといえる。

今回の調査が多大の成果をあげて無事終了できたことは、市教育委員会、地元の方々、土地改良区の役員の方々等多くの方々の深い御理解と御協力の賜であります。これら暖い御援助に対し厚く感謝申し上げます。

(花村 格)



第85図 調査地区全体図

図 版



上、調査地区北側全景 下、調査地区中央部全景



上、調査区域東側全景 下、第14・33・59号住居址



上、第18号住居址 下、第19号住居址



上、第20・21号住居址 下、第25号住居址



上、第27号住居址 下、第34号住居址



上、第48号住居址 下、第1・2号建物址

吉田向井

—長野県塙尻市吉田向井遺跡発掘調査報告書—

昭和58年3月18日 印刷

昭和58年3月20日 発行

編集 吉田向井遺跡発掘調査団

発行 塙尻市教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

